

宮崎県船野遺跡における細石器文化

橋 昌 信

1 遺跡の調査

遺跡の発見 宮崎県宮野郡佐土原町に所在する船野遺跡は昭和45年4月、当時別府大学史学科の学生であった宮崎市出身の二宮忠司氏（現福岡市文化課勤務）が宮崎市周辺の踏査を行った際発見したものである。別府大学考古学研究室に持ち込まれた採集資料の中にはナイフ形石器・台形様石器・細石刃・細石核それに多数の縦長剝片が存在し、その組成とさらに石器群の大部分が流紋岩という素材の特異性に大きな興味を持ったのである。少くとも九州においてある種のナイフ形石器・台形様石器に細石刃・細石核が共伴するとの予測を持っており、事実福岡県峠山遺跡の調査においてその可能性の一端が把握されたのであった。北部九州とは地理的に離れた南九州の地においても同様な状態が観察されるかどうかを確かめてみたいと考えていただけに絶好の機会と判断した。

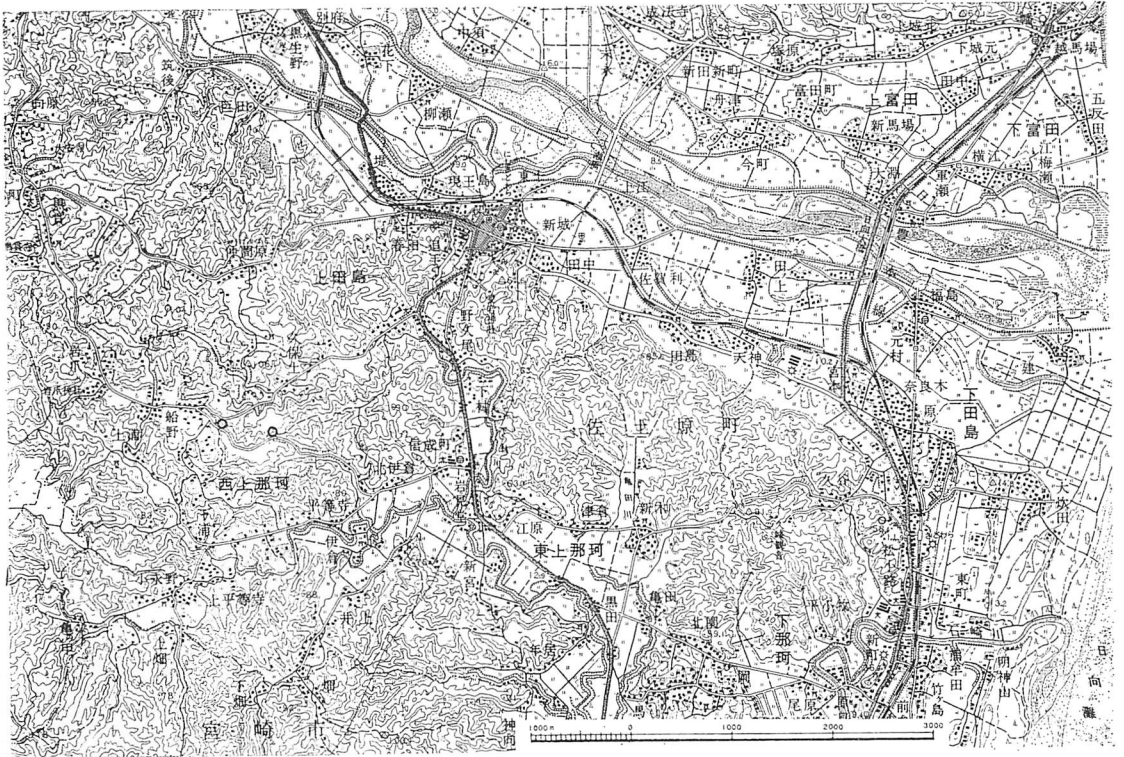
翌5月に早速現地を訪れ、遺跡の立地及び土層の堆積状況の観察を行い、新たな資料が増加されたのである。8月に再度おもむき試掘を実施し有望な包含層が認められいよいよ発掘調査の必要性を痛感したのである。同時に試掘を行なった地点（第1地点）から東へ約1 Kmの同じ台地上の続きにおいてもほぼ同様な石器群の組成を持つと考えられる地点（第2地点）を発見したのである。

発掘調査 第一次の調査は昭和45年10月1日より8日までの8日間第1地点において実施された。表採及び試掘の結果と畑の作付けを考慮して、22m×12mの調査区を設定し、2×2mを1グリッドとして都合10グリッドの発掘を行なった。この調査期間中の後半の1日は第2地点の遺跡の拡がり及び包含層の状況観察のための予備調査を実施した。第二次調査は翌年の7月7日より17日までの間、先の調査で遺物の包含が確認された第2地点の調査を行った。第一地点は農作物の関係で夏の実施が困難であり第三次調査にまわさざるを得なかった為である。第2地点は遺物の拡がりも狭いこともあって2×2mのグリッド11ヶにて調査を完了した。第三次調査は47年3月7日～15日の間、第一次調査の結果最も有望と考えられた地点一ヶ所にしほり12ヶのグリッドを発掘した。

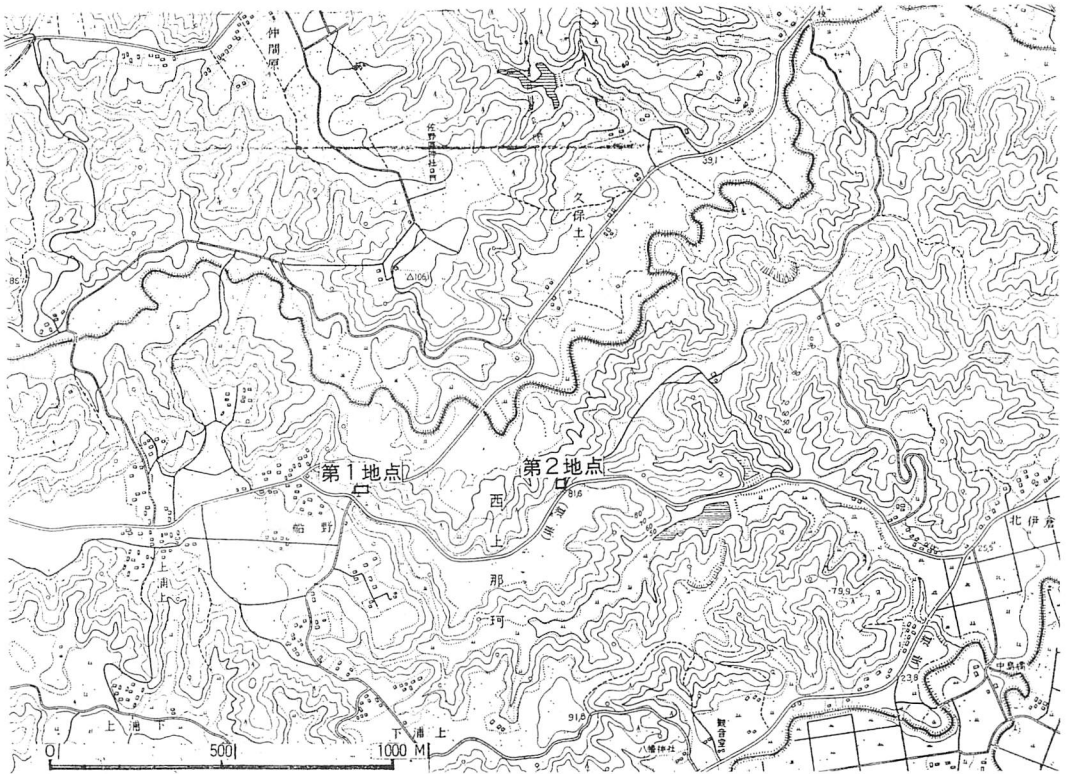
以上の三次にわたる調査は別府大学考古学研究室が主体で行なわれ、史学科考古学専攻学生が参加した。各次の発掘参加者および関係者は末尾にまとめることとする。

2 遺 跡

地理的位置 宮崎県のほぼ中央に位置し、九州山地に源を発し日向灘に注ぐ一ツ瀬川は県下における大河の一つである。この一ツ瀬川の下流は西都市・佐土原町の附近で大きくS字状の蛇行を行いその兩岸には沖積平野が開け、さらにその背後には複雑に谷の入り込んだ開析され断片化した段丘が広がっている。船野遺跡の周辺も標高80～90mの開析台地が発達し、段丘は八方に延びる複雑な地形を呈している。船野遺跡はそれらの段丘の一つに存在し、先に述べた一ツ瀬川までは北へ4



第1図 船野遺跡の位置 (○) と環境



第2図 船野遺跡 (第1・2地点) 周辺の地形

Kmを数える。一方東へ10Km弱で日向灘の海岸へ出ることができ、宮崎市の中央は東南14Kmに位置する。現在、船野の人々の家屋は東西に延びる段丘のほとり中央にまとまって営まれており、南北は他の台地と同様小さな谷によって刻まれている。船野遺跡の第1・2地点共に船野の東側に占地し標高は84~87mの間におさまる。遺跡の北側は石崎川による谷を形成しており、川との比高は約40mである。対岸は90m前後の台地がやはり東西に広がり、仲間原と呼ばれ先土器時代や縄文時代早期の遺物が採集されている。(第1図・第2図)

(表1) 船野遺跡第1・2地点の遺物

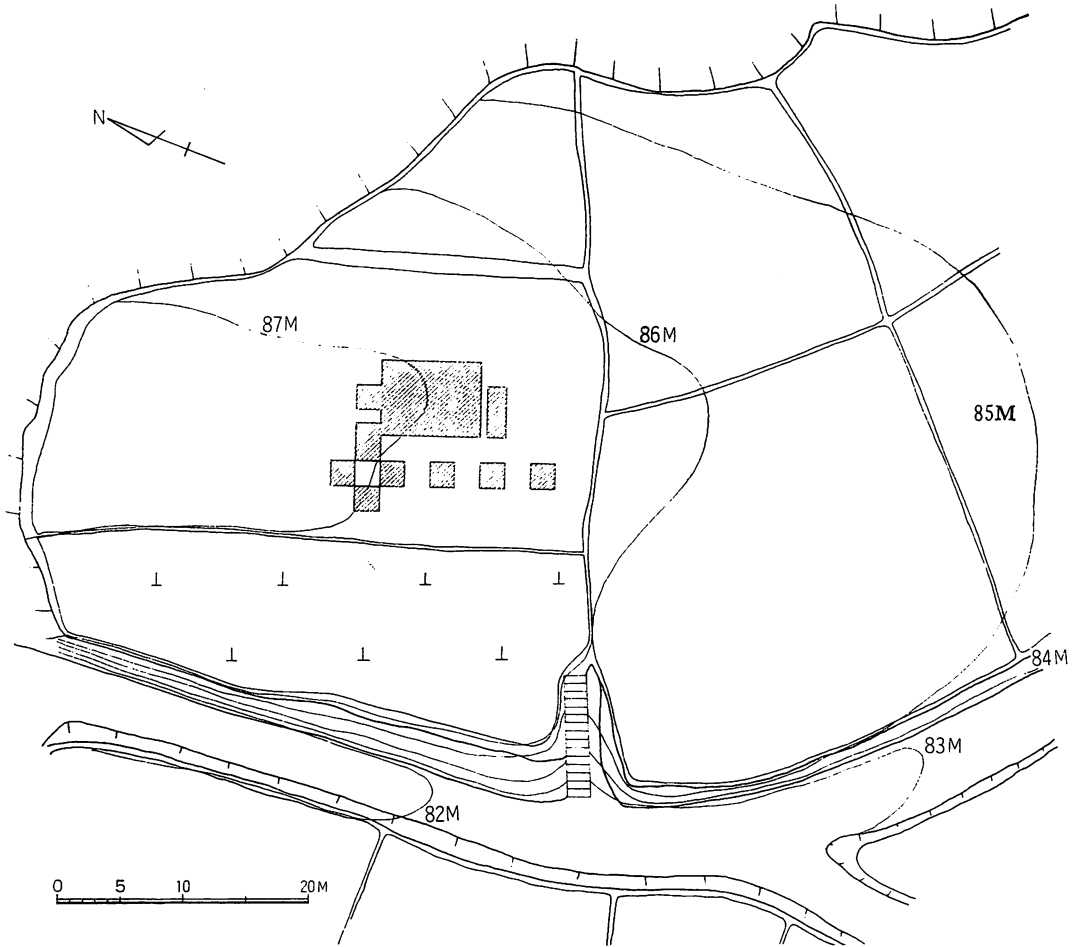
	層	細石核	細石刃	ナイフ形石器	その他の石器・石核	剥片 砕片	石土 鏃器	
第1地点	表 探	4	4	6	17	8	6	45
	I・II	7	29	10	70	430	40	586
	III	17	54	20	277	545		913
	IV			1	7	6		14
計		28	87	37	371	989	46	1558
第2地点	表 探		3	1	13	41		58
	I・II	1	9	1	17	27	7	62
	III	10	30	8	81	167		296
	IV			1	1	11		13
計		11	42	11	112	246	7	429
総計		39	129	48	483	1235	53	1987

船野遺跡第1地点はほとり東西に開けた80~90mの段丘が南より延びる小さな谷の侵蝕によって著しくその幅が狭まった個所の北側の台地縁辺近くに占地し現在畑地として利用されている。標高は約86mを数える。(第3図)

第2地点は第1地点の東 約900m、80mの等高線が一度切れる台地の末端近くに所在している。両地点が位置する段丘の北側は崖を形成し、しかも台地が弓なりを呈しており、はからずもその両端を占地する形となる為どちらの地点からも一方の地点を望むことができるのである。第2地点の標高は84mの等高線におさまっている。(第4図)

土層の堆積 船野遺跡における土層の堆積状態は第1・2地点共基本的に一致している。以下土層観察のために深く掘り下げた両地点のA-9GとD-2Gを観ることとする。

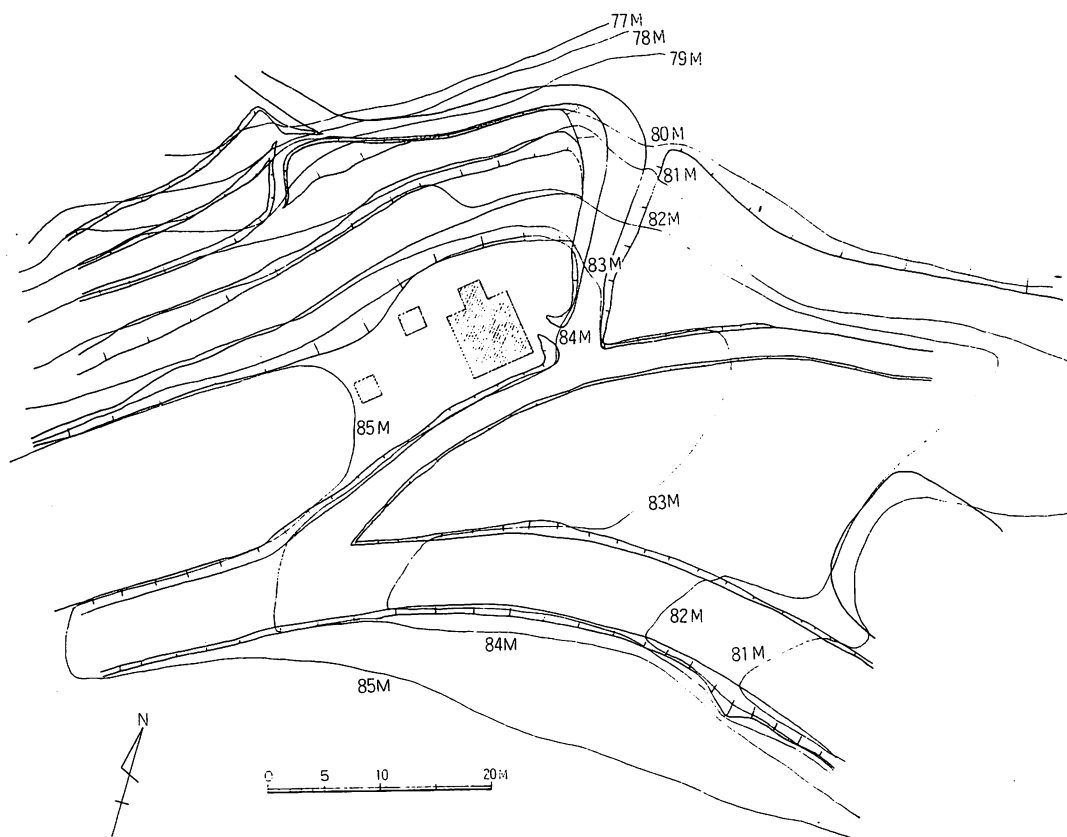
第I層は黒色ないし黒褐色を呈する耕作土層で、土質は極めて柔らかくサラサラしている。厚さは20~30cmである。第II層は褐色の土層で部分的に橙色をしたサラサラした砂質の層(第一オレンジ・II₂)が認められる。地点によってはこの第一オレンジ層の上すなわち第I層直下に黒色の土層(II₁)が堆積している。第2地点では第一オレンジ層が20~40cmの整層を形成しており、その下に褐色土層(II₃)が存在する。II層中からも先土時代の遺物が発見されるが堆積状況が不安定で、縄文式土器や石鏃、それに最近の焼物などが包含されている。第III層は暗~黒褐色のローム層



第3図 船野遺跡第一地点の地形と調査区

で30~40cmの厚さあり、小白斑を含み全体的に光沢を帯び緻密で粘質な固いローム層である。第2地点も全く同様であり厚さは若干薄く30~35cmである。この第Ⅲ層が船野遺跡における主要な包含層である。第Ⅳ層はⅢ層に比較して明る味を帯びた明褐色ローム層で第1地点は30~40cm、第2地点では10~20cmの厚さを有する。土質についてはⅢ層に類似している。遺物はこの面の上部にまで僅少であるが認められる。以下は全く出土していない。なおⅢ層とⅣ層との境界は凹凸が著しく不整合な堆積状況が観察される。第Ⅴ層は橙色ないし淡黄色をした土層(第二オレンジ層)で土質は第一オレンジ層と近似しているが全体にやゝ粒子が粗い。第1地点では20cm前後で第2地点は5~10cmと極端に薄い。第Ⅵ層は黒褐色を呈するローム層。Ⅲ層と同様な土質をしているが含入している白斑の大きい点で異なる。Ⅵ層は下部にしたがって明るさを増す傾向が窺がえる(Ⅵ')。両地点共最も厚い個所では70cmを測る。第Ⅶ層は茶褐色の粘質土層であり、紫色の小さな粒子が多量に含まれている。第1地点では50cm前後の厚さに対し、第2地点では80cmと厚く下半分は赤褐色を帯びる(Ⅶ')。第Ⅷ層は赤褐色ないし黄褐色のローム層で、30~35cmの厚さである。第Ⅸ層はⅧ層と同様な色調を呈する土層で非常に固くしまっており黄色の粒子(軽石)を含んでいる。第1地点は35~

40cm、第2地点は10~20cmである。第X層は第1地点のみに観察される黄褐色ないし赤褐色ローム層で約35cmの厚さがある。第2地点ではX層に対比される層がなく、淡いうぐいす色をした礫(硅質岩)が出土し、この段丘の礫層を形成しているものと考えられる。第XI層は赤褐色あるいは橙色をしたザラザラした砂質の土層(第三オレンヂ層)で第二オレンヂ層より更に粗い。20~25cmの厚さである。第XII層は赤褐色をしたやゝ粘質を帯びる土層で小礫を混入している。この層が段丘を形成している礫層に続くものと考えられる。地表面より約3mでの深さである。(第5図)



第4図 船野遺跡第二地点の地形と調査区

調査区の設定と遺跡の拡がり 第1地点は東南方向を除いて他の三方向はいずれも崖および道路により切断された台地の先端部にあっている。墓地の北側の平坦な畑地に東西20m、それに直交する12mの範囲を南より1・2~10、西よりA・B~Fと2×2mを1グリッドとする調査区を設定して発掘を進めた。第一次調査は畑地の作付を考慮して調査区の南側と西側に位置するB-2・4・6・8・10G、A-9・C-9・E-9Gに重点をおき、さらに作物をはずしてF-6・7Gの10グリッドの調査を行なって包含層の様子を観察した。第三次調査では遺物の包含状況が最も良好であ

(表2) 第1地点の石器群と出土層位

層		表採	I	II	III	IIIa	IIIb	IIIc	IIId	IV	計
細石核	Rh.	2	2	1		1	2	1			9
	Ob.	2		4		2	9	2			19
細石刃	Rh.			4		3	5	1	1		14
	Ob.	4		25		18	18	7	1		73
ナイフ形石器		6		10	1	6	3	7	3	1	37
搔器・削器		4		12	2	7	14	5	2		46
彫器		1		1		2	1	2			7
石錐									2		2
尖頭器				2	1	2	1	6			12
台形様石器		1			2	2	3	2			10
磔器		2	1	5		2	2				12
敲石						1	1	3			5
使用痕・二次加工割片		8		40	3	15	77	74	11	6	234
石核		1	5	4	1	3	9	5	4	1	33
剥片		4		288	29	64	81	91	26	4	587
砕片		4		142	14	64	85	58	33	2	402
計		39	8	538	53	192	311	266	81	14	1512
土器片		6	5	26							37
石鏃				9							9

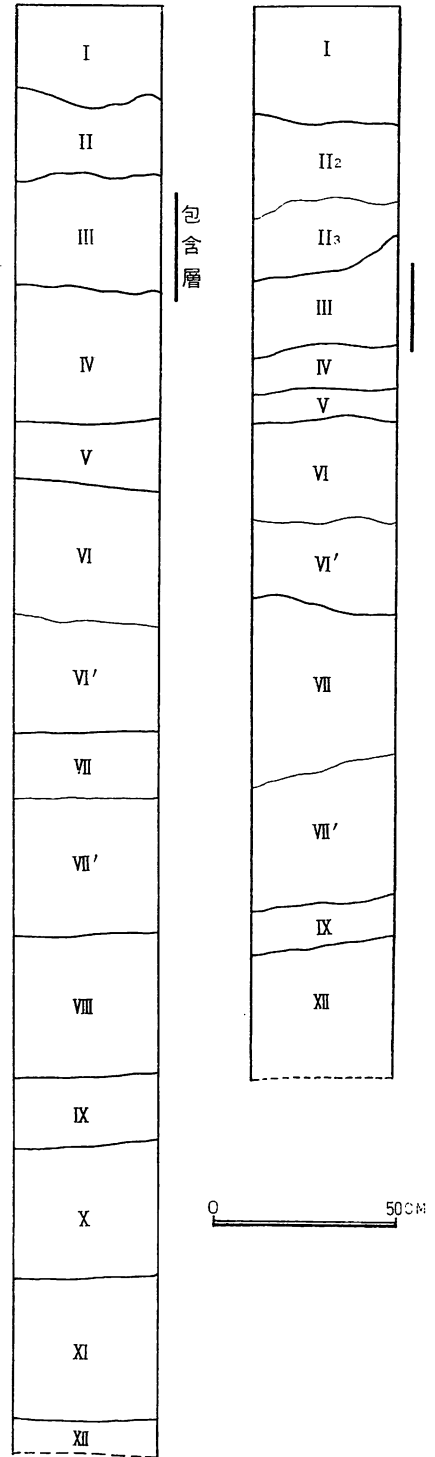
(表3) 第2地点の石器群と出土層位

層		表	I	II	III	IIIa	IIIb	IIIc	IIId	IV	計
細石核	Rh.			1		4	4	1			10
	Ob.					1					1
細石刃	Rh.	3	1	4		11	3	3	3		28
	Ob.		1	3		4	3	1	2		14
ナイフ形石器		1		1		4	2	1	1	1	11
搔器・削器		1		2	1	3	1			1	9
彫器						1	1		1		3
石錐						1					1
尖頭器		1					1	1			3
磔器		1		1		1		1			4
敲石						1	2				3
使用痕・二次加工割片		8		13		23	24	14			82
石核		2		1		4					7
剥片		37		24	1	64	42	17	11	5	201
砕片		4		3		13	12	5	3	6	46
計		58	2	53	2	135	95	44	21	13	423
土器片				5							5
石鏃				1	1						2

(Rh…流紋岩、Ob…黒耀石)

第1地点

第2地点



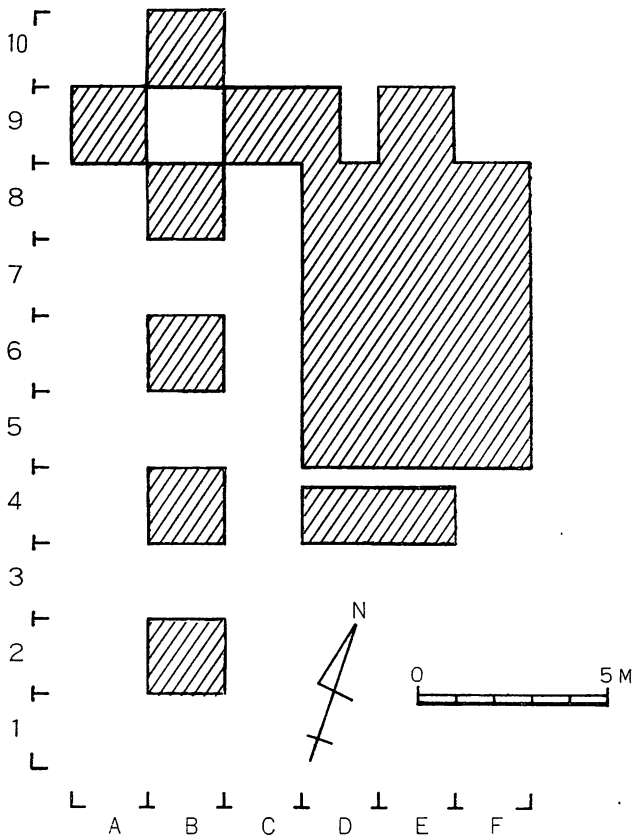
第5図

船野遺跡第1地点と第2地点の層序

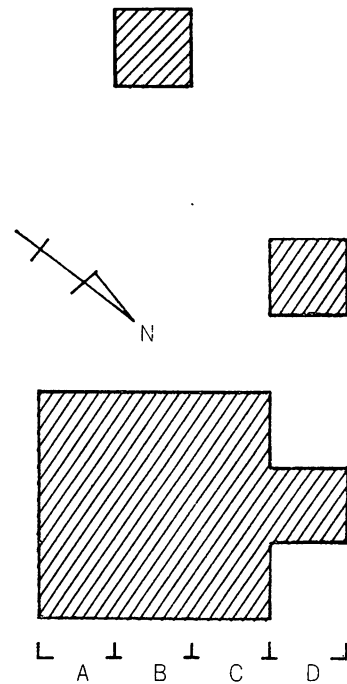
ったF-6・7Gの西側のD-4～8G、E-4～8G、それにF-5・8Gの12ヶ所を実施した。調査区として設定されていなかった北側および東南の緩斜面については予備調査の際とさらに2回の本調査の折に総計14ヶの1㎡ないし50㎡のテストピットを設けて遺跡の拡がりを追った。その結果、いずれのピットにも良好な状態は望めなかった。遺物の出土状況で示めされているように二次にわたる調査によって船野第1地点の主要な部分はほぼ完掘したものと考えられる。

第2地点の東西に延びる台地は南と東は道路で、さらに北側も崖によって切られている。調査区は北東より南西に向かって16m、それに直交する8mを設定し、北東より1・2～8、南東よりA・B～Dと2㎡のグリッドを設けた。第一次調査の際B-2G、およびB-8G、の発掘を行なった所、B-8Gでの階無に近い状態なのに対しB-2Gは遺跡の中央部を予想させたのであった。その結果に基づきB-2Gを中心にA-1～3G、B-1・3G、C-1～3GとさらにD-2・5Gを加えて都合12グリッドの調査を実施したことになる。予想通りA-2・B-2・B-1Gを中心に有望な包含層が認められた。北西は急傾斜な土層の堆積であり遺物はほとんどなく、南西の平坦な台地の続きも表面採集および試掘の結果でも遺物を得ることができなかった。さらに東側の道路の切通しでも石器類が少数発見されたにとどまり、結局遺跡の拡がりは第1地点以上に極めて限られた小範囲である事が明らかにされた。(第6図・第7図)

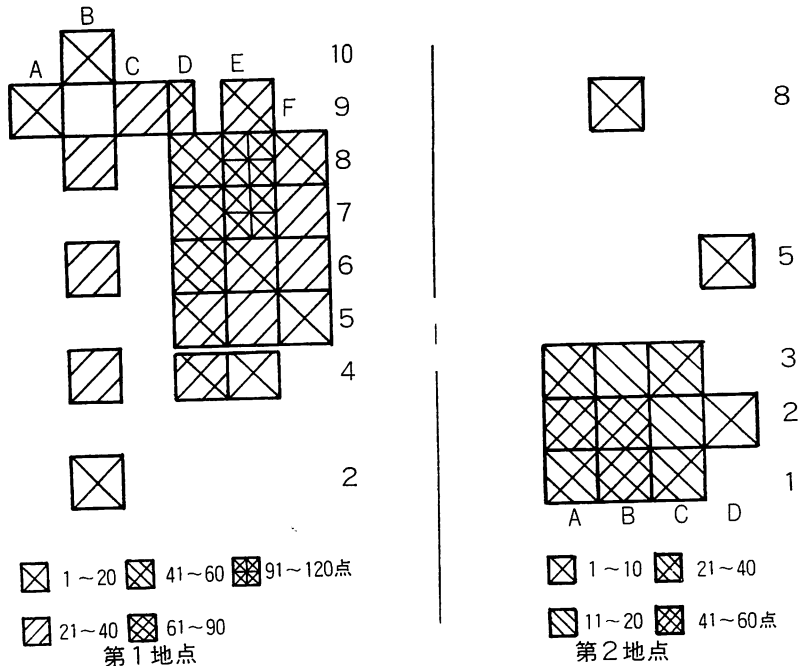
第 1 地 点



第 2 地 点



第6図 船野遺跡(第1・2地点)グリッド設定図



第7図 III層における遺物出土頻度

石器群の出土層位 第1次調査ではプライマリーと考えられたIII層の遺物包含層をIII層上面より起伏・傾斜を考慮して10cm毎にIII a～III d層と分層発掘を行なってIII層内での遺物出土状況の観察に注意を注いだ。その結果、石器群はIII b層に最も多く見られ、次いでIII c・III a層、さらに減少しながらもIII d層、とIV層上部まで出土することが把握された。第二次・第三次の調査においては5cm毎にIII a面～III h面と細分を行ない一つの面としての把握を試みたのである。遺物の出土数のみから観察すれば第1地点ではIII d面に最も多く、次にIII e・III c面の順で、III d面とIII f面がほぼ同数出土しており、この状況は第一次の10cm毎の結果と全く符合している。文化層の把握の上で礫群は一つの示唆を与えるものとして注目されており、船野遺跡の第1地点においても第三次調査の際面的に石器群が最も集中したグリッドのIII f面よりIII g面にかけて礫群が出土し生活面を推定する上での大きな根拠が与えられたのである。礫群と石器群包含の層位的関係では礫群の10cm前後上位に石器群が集中して出土したIII e面が位置している。最近各地で発見されている遺跡における遺物と礫群の層位的観察において、礫群より上位5～10cm前後に遺物が最も集中的に出土する状況が確しかめられつつある。すなわち礫群より軽い石器群が霜などによる凍土・融解の現象によって生活面より遊離したと推定され極めて自然な現象と考えられている。船野遺跡の主要な包含層であるIII層中におけるこの状態は文化層の安定性を示唆しているものと考えられる。さらに礫群に近接する南と北において隅丸長方形をした小さな堅穴状の遺構が出土している。この遺構はIII層下面（III g面）においてIII層の暗褐色が明るみを帯びる面において全体の明確なプランを検出し得たがその一部はIII eおよびIII f面で発見されており、礫群の面と符合するのである。先土器時代の堅穴状の遺構については問題が多いだけに慎重な態度で望まなければならないであろうが、礫群と共に当時

の生活面を考察する上での一つの資料と考えられるであろう。

一方第2地点における石器群の出土状況についてやはり5cm毎の分層発掘による石器群を出土数より眺めることにする。石器群が最も集中したのはⅢa面とⅢb面であり、次にⅢc・Ⅲd・Ⅲe面の順序で深くなるにつれて減少している。すなわちⅢ層上部に包含層の主体が想定され、第1地点より上位に生活面が考えられるのである。仮に船野上層として第1地点と一応区別をしておきたい。第2地点の包含層の状態を示めず資料として2グリッドのⅢa層とⅢc層中に包含されていた細石核と細石核再生剥片が接合できたのである。これは本来Ⅲa層とⅢc層が一つの文化層として存在していた事を示唆し、さらに第2地点における包含状態がプライマリーな事を物語っていると解釈されよう。

Ⅲ層とⅣ層（明褐色ローム層）の境は凹凸が見られ不整合な堆積を示めている事は先に述べた通りであり、第1、2地点共にその境界およびⅣ層上部において、若干の石器群が出土している。すなわち第1地点においては礫群下面からⅣ層上部にかけて、ナイフ形石器1、二次加工ないし使用痕の観察される剥片6、石核1、それに剥片・碎片が6、第2地点ではナイフ形石器1、搔器1剥片・碎片11が出土しているのである。一つの石器文化として把握するには石器の組成が充分でなく、しかも全体的に数が少ないこともあって、Ⅲ層上層ないしⅢ層中層との遺物の対比も行なえない状態である。たゞ細石刃・細石核が階無である事を重視して、また第1地点では礫群の下位からの出土である事を考慮して第1・2地点共に船野下層文化の存在する可能性があるかと判断しておきたい。

第Ⅱ層の第一オレンジ層および褐色土層中から先土器時代の遺物と混在した状態で石鏃（黒耀石・流紋岩製）11点と縄文式土器（無文・条痕文）40余点が出土しており、Ⅲ層およびⅣ層上部においては全く認められない。

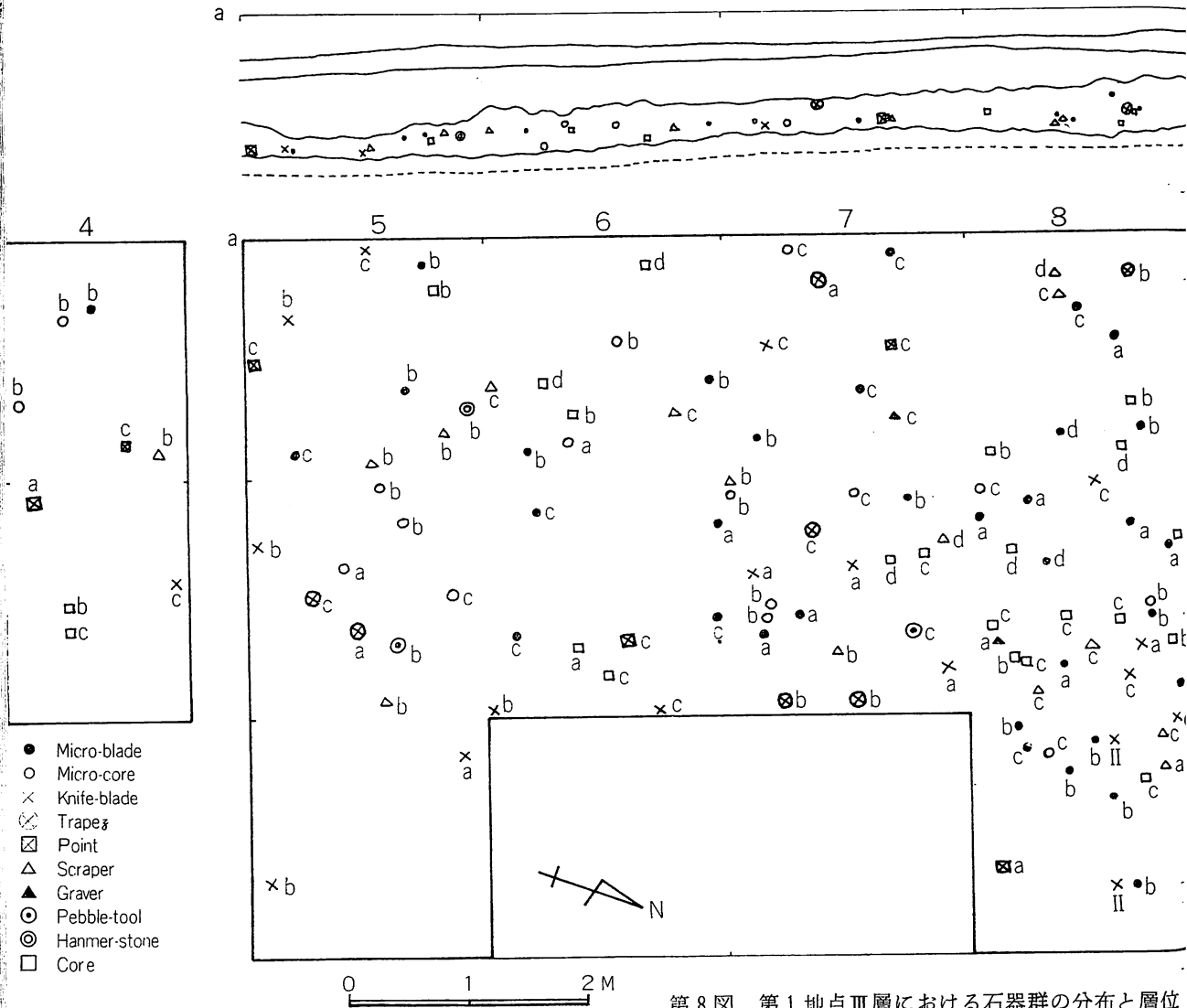
以上の様に船野遺跡第1・2地点共にⅢ層からⅣ層上部にかけて石器群が包含されており、その出土状況から第1地点ではⅢ層中部とⅢ層下面～Ⅳ層、第2地点はⅢ層上部とⅢ層下面～Ⅳ層にそれぞれ包含層の主体が予想され、層的に細分される可能性の一端が示めされていると思われる。遺物の種類・数および層位的関係については表2・3にまとめた通りである。

第1地点・第2地点それぞれのⅢ層中における遺物の出土数は第1地点の発掘面積が第2地点の約2倍近くであるが遺物では3倍余り出土しており、第1地点に、より集中したあるいは長期間にわたる生活が予想されるであろう。Ⅱ層とⅢ層における出土の関係は表1で見ると第1地点ではⅡ層中よりⅢ層の半数近くの石器類が出土しているのに対し第2地点では約1/6程度と少ない。これは第2地点が台地の末端に占地しているためこれまで畑地としてほとんど利用されることなく荒地として今日まで放置された為であろう。これに対して第1地点は畑地として現在も使用され、特に第1次調査で発掘を実施した遺跡の南西側ではゴボウ等の作付が以前行なわれたらしく、いずれのグリッドも数はあまり多くないがⅢ層を上回る石器類がⅡ層中に浮いた状態で出土している。一方第1地点の中心部と考えて第三次調査を行なったD・E・F-4～8GではⅡ層中の遺物は少なく、Ⅲ層中の1/6～1/6と第2地点と同様なあるいはそれ以上良好な状況を示めしているのである。この事から第1地点で石器類が最も集中した調査区は後世の攪乱が最少限に止められた包含層の安定性を

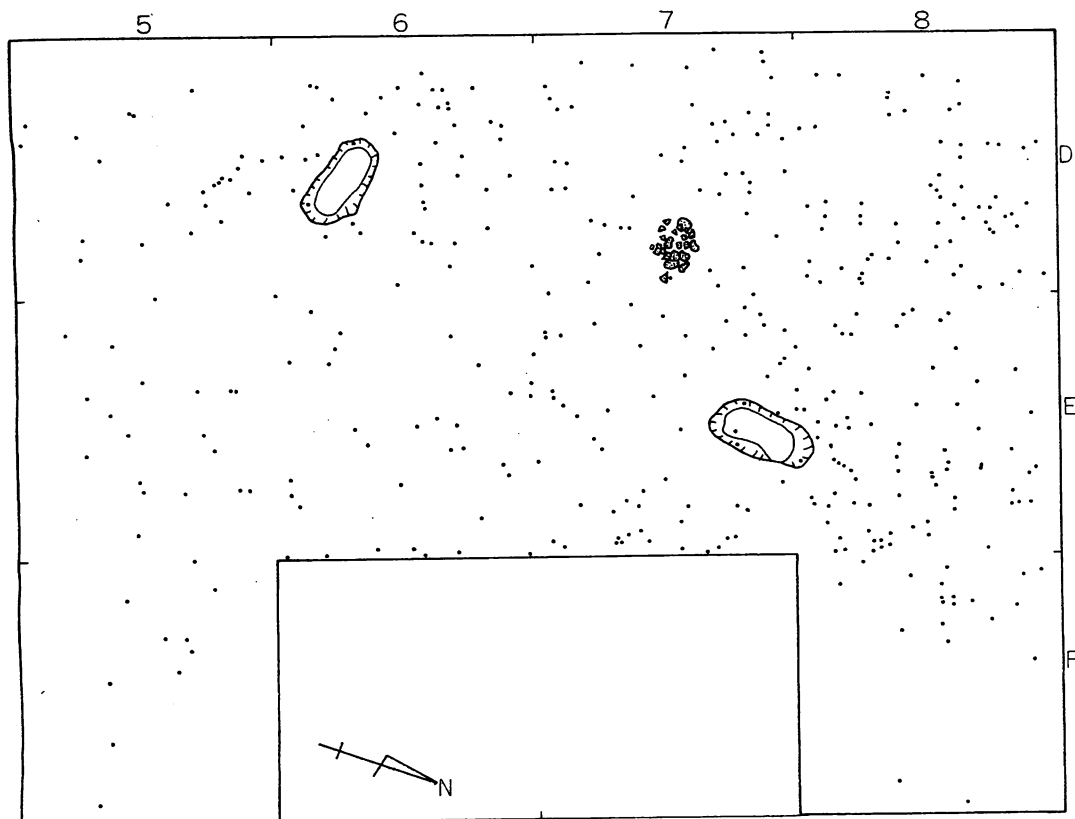
物語っていると言えよう。

石器群の平面的分布 両地点の遺跡の拡がりについては先に触れたので、ここでは第7図と第8・9図を資料として石器群の平面的分布を観察することにしたい。

第1地点の中心的存在と考えたD~F-5~8Gにおいて、一ヶ所の礫群と二ヶ所の隅丸長方形の堅穴状遺構の周辺において石器群のまとまりを検出することができた。すなわち石器および石核、剥片・碎片共にE-7・8Gに最も集中し、次いでD-6・7・8・9Gにおいて顕著な出土が見られるのである。その拡がりの大きさは南北約7m、東西約5mの楕円形の範囲に集中する傾向が窺がえ、一つのブロック（ユニット）を構成しているものと推定される。この一定の拡がりの内にあって、北側寄りにナイフ形石器と石核、それに剥片・碎片が集中するのに対し、細石核・スクレイパーは反対の南側で比較的まとまった出土状況を示めている。細石刃はほぼ全域に分布しているが、多少北側への片寄りが窺がえる。台形様石器は第1地点より10点を得ており、表採の1点を



第8図 第1地点Ⅲ層における石器群の分布と層位



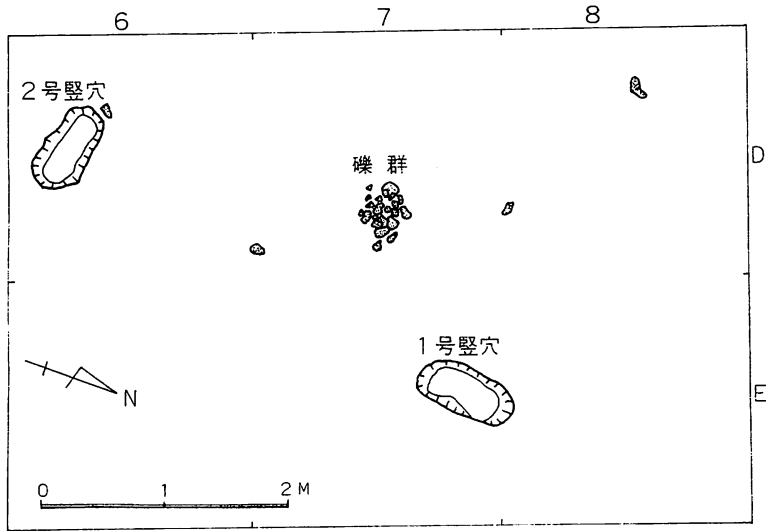
第9図 第1地点Ⅲ層における剥片類の分布

除く9点はいずれもD～F-5～8GのⅢ層中において出土しているのである。以上の様な大まかな傾向の把握は可能である。しかし特定の石器のみが一ヶ所に集中する、あるいはある種の石器の特別な機能・用途を示唆する状況は認められないようである。

第2地点における石器群の平面的分布ではA-2・B-1・B-2G³を中心に南北7m東西4mのほどの長楕円形に比較的遺物が集中する傾向を把握できた。この範囲内ではほぼ全面にわたって出土しており特に意味のある状況は観察されなかった。急激な斜面に続く北西側は石器群が極端に少なくなっており、北東および南東はそれぞれ道路の切り通しによってカットされている為、先の拡がりは東南へ幾分拡大される可能性が残っている。

遺構 第1地点のⅢ層中に礫群1ヶ所と竪穴2基の遺構と推定されるものが発見された。(第10図)

礫群 第1地点のD-7Gの東側中央部において、拳大の円礫・角礫が約60×45cmの範囲にまとまって出土した。この礫群はⅢf面より顔をのぞかせはじめ、下面は西側に若干の傾斜をもちながらもほぼⅢg面におさまっている。礫群の最西端には他の礫の丁度2倍位の大きさを有する礫が存在し、断面で明らかなように深く落込んでいる。礫群の周辺および下面は特に掘り込んだ痕跡は観察されなかったし、焼土・炭化物などの遺存も認められなかった。礫は流紋岩と安山岩質のものに限られているようであり、一部には火を受けたらしく表面が赤褐色に変質しそれらは他の礫に比べて



第10図 第1地点の礫群と竖穴



第11図 礫群の平面および断面図（第1地点）

脆弱で割れているものも存在している。この礫群の性格を判断し得る具体的な遺存状態は観察されなかったが、石器群が周辺に集中する傾向を示している事も考慮して人為的なものと判断した。以下の事も遺構として認定した理由につけ加える事ができよう。Ⅲ層の暗褐色ローム層中には本来礫の混入が認められないのにこの礫群の周辺のみやはり拳大の円礫・角礫が散在し、それらが礫群と同じレベルを有し一つの生活面を示唆すること、さらに石器群の面的な拡がりも礫群の周辺に集中する反面、礫群直上の包含層においてはほとんどみられないことなのである。(第11図)

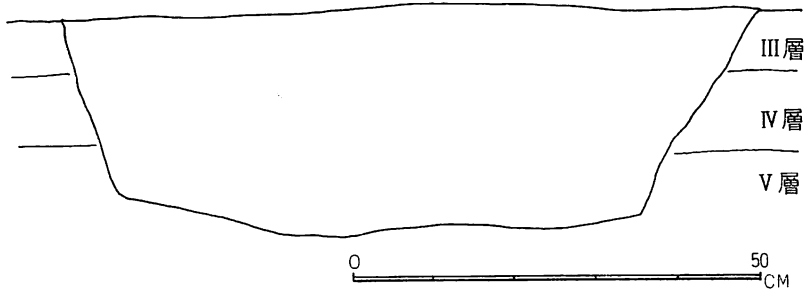
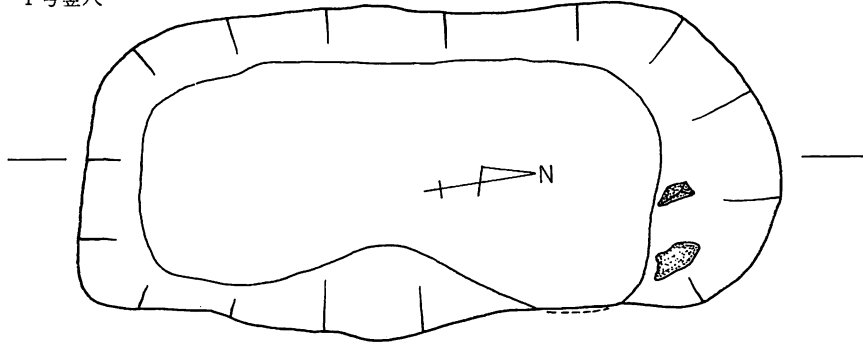
堅穴状遺構 礫群に近接する南と北において不定形な隅丸長方形を呈する堅穴が出土している。北側を1号堅穴、南のそれを2号堅穴と仮称してその状況を述べることにする。(第12図)

1号堅穴は南北(N-9°-E)に主軸をとり、上面で85cm、下面は64cmとやや傾きを有して掘り込まれており、北側の斜めの壁面で拳大より幾分小さい礫が出土している。東西の最大幅は40cmを測る。堅穴の形状は南側では隅丸長方形を呈するのに対し、北側はゆるやかな弧状を形成している。現壁高は28cmを測るが、これは掘り込み面の全体が明確に確認されたⅢ層下面(Ⅲh面)からの深さであり、実際はその一部が認められたⅢf面からと考えられるので10cm近くをプラスしなければならないであろう。堅穴は約20cmの明褐色ローム層(Ⅳ層)および第Ⅴ層の橙色ないし黄褐色を呈する第二オレンジ層の途中まで掘り込まれている。

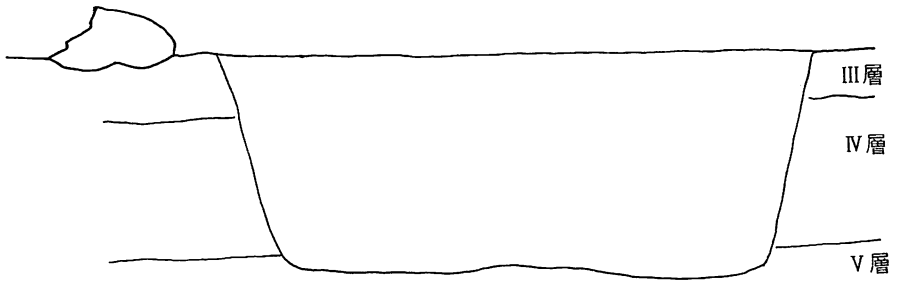
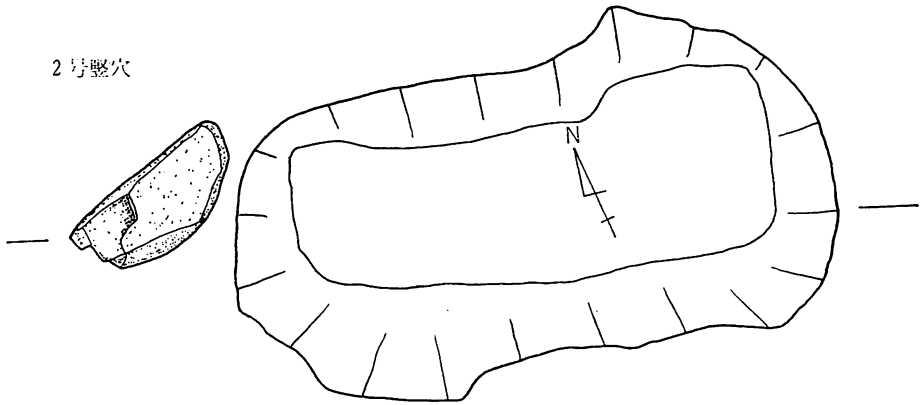
2号堅穴は礫群の南に位置し、長軸をほぼ東西(N-68°-E)の方向にとっている。外形は78×39cm、下面は62×20cmを測る大きさである。形状は1号に比べてやや不定形であるが、やはり隅丸長方形と見なすことができよう。掘り込み面は1号のⅢ層下面より5cmほど上位において全体のプランを確認したが、それでも部分的な輪郭の露出を考慮に入れればやはり5~10cm近くをプラスして35~40cmの壁高を想定しなければならないであろう。堅穴はⅣ層を抜きⅤ層の上部に達している。なお2号堅穴の西壁に接する位置に20×11cmの細長い角礫が存在する。

以上のような形状を示す1・2号堅穴状遺構の埋土は主要な包含層である暗褐色ローム層に比較してやや黒味を帯び、土質は若干粘性が弱いという違いが指摘できる程度である。このためⅢ層下面で褐色の度合いが明るみを増すⅢ層下面において始めて全体のプランが確認できる状況であった。この堅穴状遺構の時期決定では可能な限り慎重な観察を重ねたのであった。特にⅢ層上面ないし、Ⅱ層からの掘り込みの可能性の存否に注意を払ったが、埋土の色調・土質が異なり、Ⅲ層上部において全く土層の変化は認められなかった。また埋土中からも堅穴の下面においても土器片・石鏃などの遺物が全く発見されなかった。さらに堅穴周辺の上において堅穴内の土層である明褐色粘土層や一見して識別できる橙色をした第二オレンジ層のブロックを全然認めることができなかった。一方、二基の堅穴遺構の掘り込み面がⅢ層下部すなわちⅢf~Ⅲg面からであり、これは近接する礫群および散在する礫のレベルと全く符合するのである。また石器群が周辺に集中する傾向があり、その反面遺構の上面及び上位では少量しか出土してなく、しかもそれらの数点は傾斜を有する堅穴の壁面に付着した状態で発見されているのである。この二基の遺構の性格について全く不明と言わざるを得ない段階で遺構として認定するのに問題はあがあるが、先に述べた事を考慮してⅢ層中部出土の石器群に伴うものと判断しておきたい。

1号竪穴



2号竪穴



第12図 第1地点の竪穴

3 遺 物

石器の種類 船野遺跡の第1地点および第2地点発見の石器類の種類と層位別の出土数は先に挙げた表2・3の通りである。

船野遺跡を特徴づける石器群では第1地点・第2地点共、Ⅲb層、Ⅲa層にそれぞれ主体をもつ黒耀石製および流紋岩製の細石刃・細石核の存在である。なほ細石核の数に比較して細石刃が少ないことはその用途を考える上で注目されるのであろう。

ナイフ形石器もかなりの数にのぼり、第1・第2地点で都合48点を数える。しかもそれらのナイフ形石器のほとんどが2～4cm内におさまる小形のものであり、層位的にはⅣ層上部からⅢ層上面までにわたっており、Ⅳ層上部の2点をのぞいた他はいずれも細石刃に伴っているのである。ナイフ形石器と細石刃・細石核の共伴は船野遺跡における石器文化の一つの特徴を端的に物語っているものと考え重視したい。

尖頭器と認定した石器は全部で15点発見されているがナイフ形石器との区別が明瞭でないものが存在し、ナイフ形石器の機能を考察する上で一つの問題提起がなされているようである。

石器の器種の判断で苦慮したものとして各種のスクレイパーと局部的な二次加工を有する剥片がある。使用痕の観察される剥片との関連も考えなくてはならないであろう。また石核の最終的な段階と考えられる残核と礫器についても判断に迷うものが存在し、実際礫器として転用したと推定される石器も見うけられるのである。

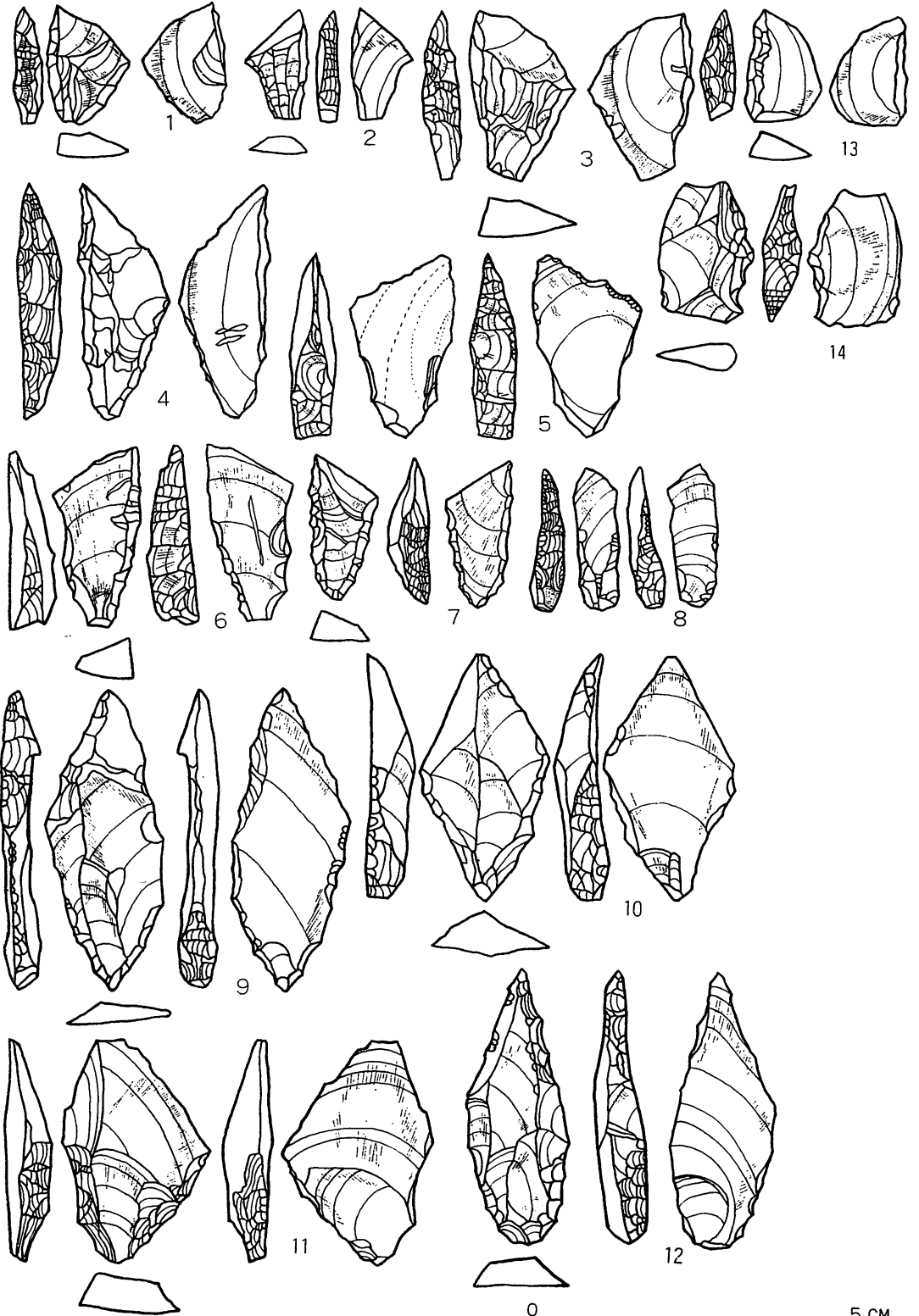
第1地点および第2地点における石器の組成は台形様石器をのぞけば基本的に一致すると見なされるが、ナイフ形石器や細石核の形態や石材の点などはその差異として指摘できる。

石器類の材質 船野遺跡における石器・石核・剥片の大部分は無斑晶流紋岩で占められている。流紋岩の供給源については船野遺跡の北東に流れる一ツ瀬川の上流に所在する尾鈴山に求めることができる。細石刃・細石核ではかなりの数の黒耀石が用いられている。ナイフ形石器や尖頭器ではバリエーションが見られるがやはり流紋岩製のものが多く、他に黒耀石・チャアート・頁岩・安山岩質などの石材が少量づつ使用されている。スクレイパー・二次加工の剥片・使用痕のある剥片、石核など比較的大形な石器類は圧倒的に流紋岩が利用されている。黒耀石は秀明度が強く介在物の見られない淡黒色の良質のものと、黒色で介在物が多く含まれる質の悪いものとの二種類が少くとも利用されている。良質の黒耀石について霧島産と推定され、後者のそれは鹿児島県の上場遺跡の近くに産するものと極めて類似している。黒耀石その他の石質・原産地については将来顕微鏡観察やその他の化学的方法を駆使して決定されなければならない。

ナイフ形石器（第13図～第15図、表4）

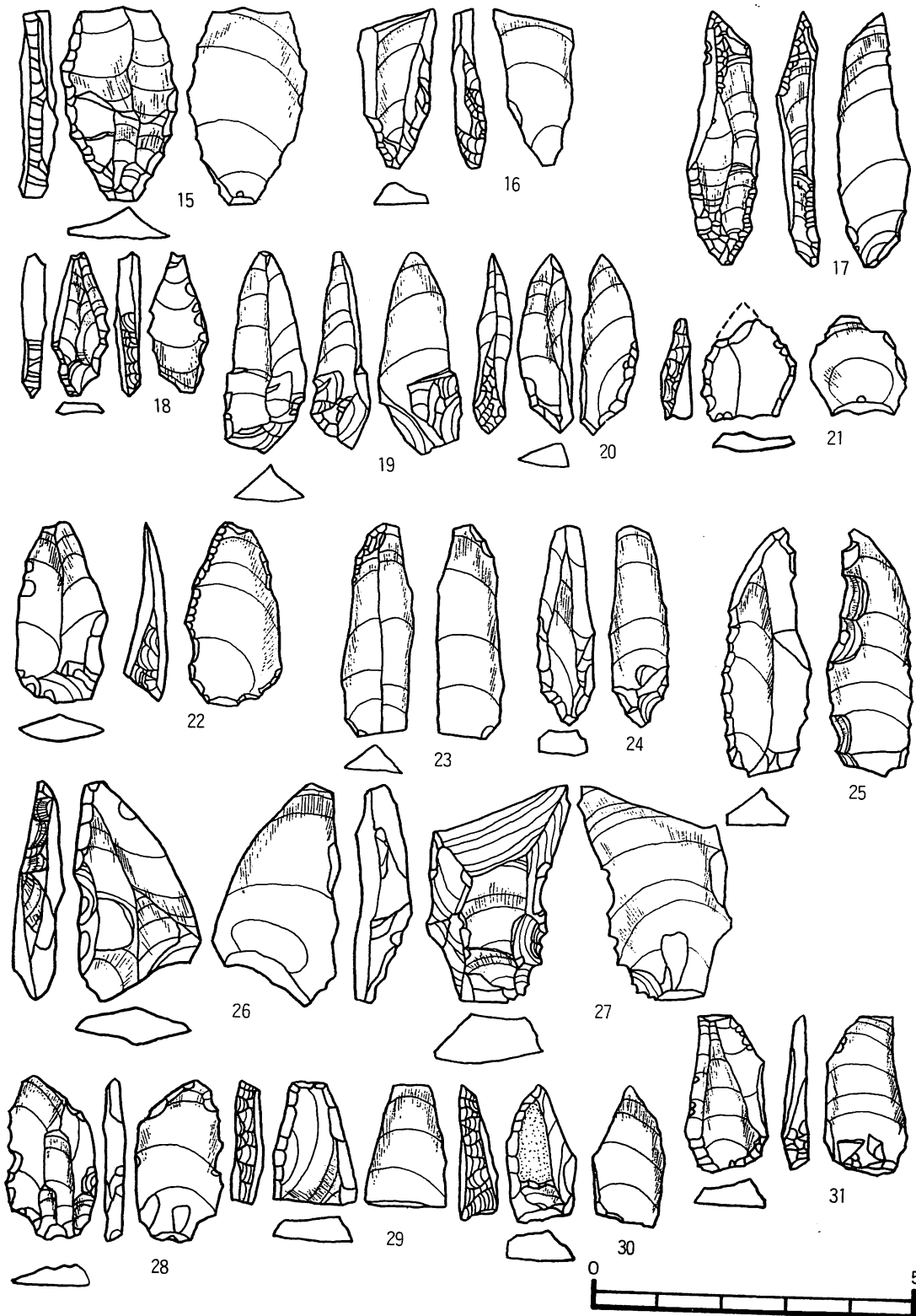
船野遺跡出土のナイフ形石器の素材は石刃に近い形態を有する縦長剥片を用いたもの（a・b類と横に長い剥片を使用したもの（c類））とに大別することができ、それらはさらに形態およびブランテイングの部位によって細分することが可能である。

a 1類（6～8） 小形でブランテイングは剥片の両側辺に直角に近い角度で主要剥離面より丹

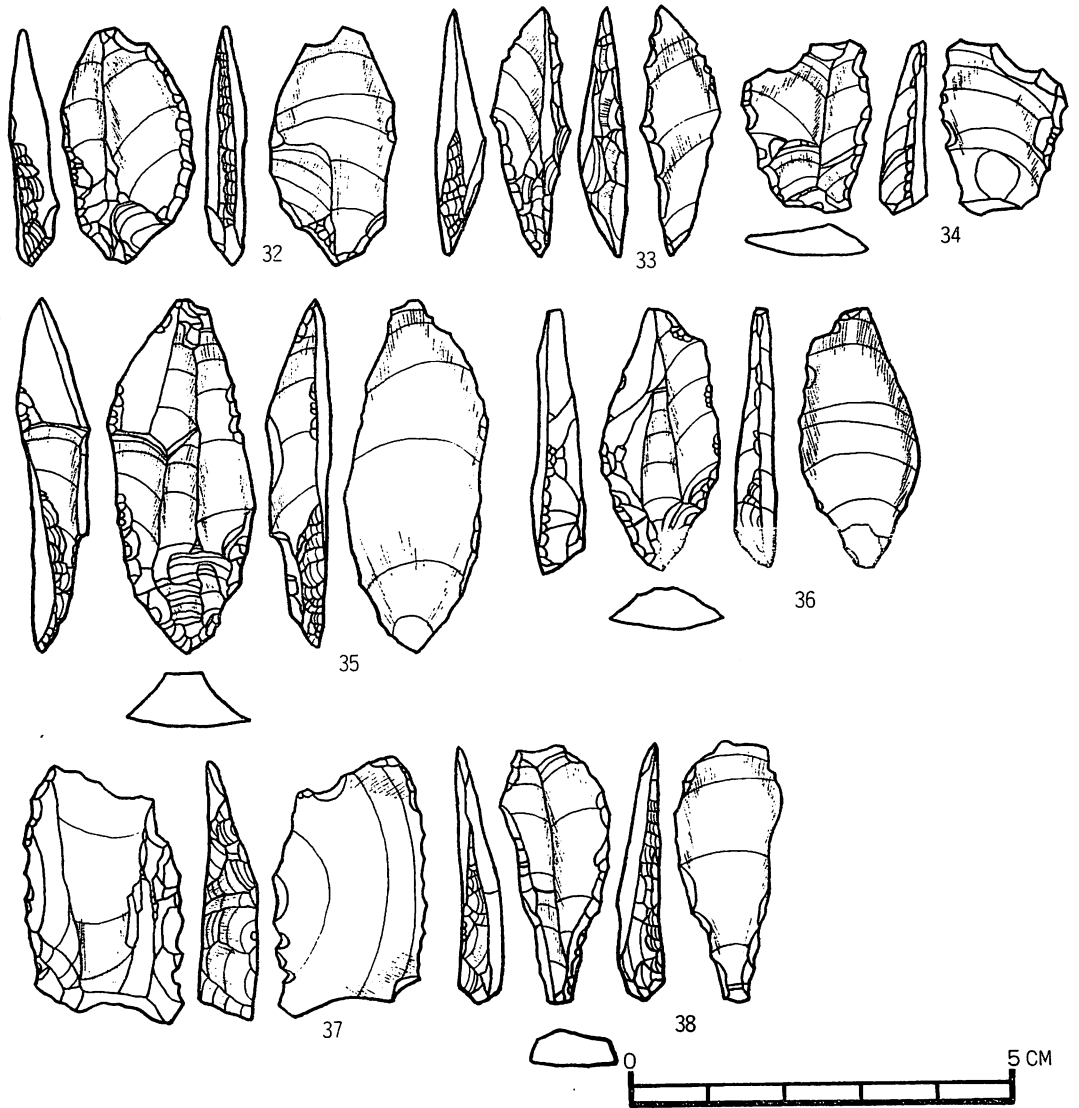


第13図 ナイフ形石器 (第1地点)

0 5 CM



第14図 ナイフ形石器 (第1地点)



第15図 ナイフ形石器（第2地点）

念に施こされている。全体の形状は三角形を呈しており、一側辺の延長上に鋭い先端部を有している。7をのぞく残りの2点は剝片の打面側を基部としている。

a 2類（9・12・32・33・35・36） 4 cm前後で当遺跡のナイフ形石器では大形のグループを形成している。二次加工の調整は基部の両側辺に集中する傾向が窺がえ、剝片の打面は除去され、尖頭状の基部を有する。先端部はナイフ形石器のほゞ中央に位置しており、全体の形は細長い菱形ないし柳葉形を呈する。先端部の角度はa 1類よりさらに鋭角で、刃部の長さも長くなっている。

b 1類（19・20・22～25・28・31） a類と同様石刃に近い縦長剝片を素材に用いているがその加工は基部あるいは先端部のみ僅かに施こされており、素材の形状がほとんどそのままの形で残されている。剝片の打面側を基部として使用しているため、先端部は細長く尖る形を呈している。

(表4) 船野遺跡出土のナイフ形石器 (図版一覧表)

地点	グリッド	層位	石材	長	幅	図版
第1地点	1	B-4 II	Ch	19	14	c 1類 13
	2	A-9 II	Ob	18	15	"
	3	B-2 IIIa	Ch	28	17	"
	4	E-9 IV	Rh	40	16	"
	5	F-6 IIIa	Ch	25	16	"
	6	F-5 IIIb	"	32	14	a 1
	7	表 採	Rh	19	13	"
	8	F-8 IIIc	Ob	25	7	"
	9	表 採	Rh	50	18	a 2
	10	B-10 III d	"	41	22	"
	11	E-8 IIIc	Sh	38	24	"
	12	F-5 II	Rh	47	17	"
	13	E-9 III d	"	18	13	c 2
	14	E-6 IIIc	Ch	23	16	"
	15	表 採	Rh	32	19	a 2 14
	16	E-9 III d	"	27	12	"
	17	D-5 IIIc	"	43	11	"
	18	F-6・7 IIIb	"	24	10	b 2
	19	表 採	"	34	14	b 1
	20	D-7 IIIc	"	31	11	"
第2地点	21	E-7 IIIa	Sh	17	15	b 2類 14
	22	C-9 II	Rh	31	15	b 1
	23	E-4 IIIc	"	36	11	"
	24	表 採	"	34	10	"
	25	表 採	"	42	13	"
	26	D-7 II	"	35	23	b 2
	27	E-8 IIIc	"	38	24	"
	28	E-8 IIIa	"	28	15	b 1
	29	F-6・7 II	"	21	14	b 2
	30	B-2 IIIb	"	24	12	"
	31	D-5 IIIb	"	27	13	b 1
	32	A-2 IIIa	"	31	18	a 2 15
	33	A-2 IIIa	"	30	11	"
	34	表 採	"	24	17	b 2
	35	A-2 IIIb	"	51	20	a 2
	36	B-1 IIIb	"	35	17	"
	37	A-2 IV	"	36	21	c 2
	38	A-3 IIIc	"	37	15	a 2

Ch…チャアート Ob…黒耀石(単位mm)
Rh…流紋岩 Sh…頁岩

b 1類の大半は先端部が極くわずか欠損している。

b 2類 (18・21・26・27・29・30・34) 縦長剥片を用いているが上記の分類に該当しないものを一括した。素材の形態ならびにブランティングの個所も一定でなくそのため形態上の差異が著しい。21・26・27・34はづんぐりした形を呈し、基部には大きな打面を残している。

c 1類 (1～5) 横長の剥片を素材に用い、剥片の打面側をナイフ形石器の長い方の一側辺として利用している。ブランティング両側辺に沿って施こされており、短い斜めの刃部を形作っている。全体の形状は三角形を呈し、先端・基部共に尖頭状をなす形の整った小型のナイフ形石器の一群である。4はIV層上部から出土している。

c 2類 (13・14・37) 横割ぎの剥片を素材に選択していることはC 1類と同様であるが、ブランティングが剥片の打面だけに施こされている点で異なる。それ故全体の形状は半月形ないし長方形に近く、刃部は剥片の鋭いエッジを利用している。37は主要剥離面からのみの調整に対し、13・14は両面から行なわれている。打面は完全に除去されている。37はIV層上部より出土。

a類・c類のナイフ形石器とb類とではその製作上・形態上の差異があまりにも明瞭であり、b類の中にはナイフ形石器とするのに躊躇するものも存在し、a・c類とb類を一括してナイフ形石器として分類するには問題があるようにも思える。

両地点のナイフ形石器

以上6類に分類したナイフ形石器を地点毎に対比を行ってみると興味ある事実が指摘でき、両地点の差異が認められる。すなわち第1地点では6類全てが存在するのに対し、第2地点ではa 1類およびc 1類が全く出土していないのである。a 1類とc 1類とでは素材の使い方での基本的な違

いはあるが、完成された形態では極めて類似している。両者ともほぼ三角形の形状を呈し、大きさは2.5cm 前後に集中する小型のナイフ形で石器である。第1地点のみで見られるた a 1 類・c 1 類はⅢ a・Ⅲ b・Ⅲ c 層とそれにⅣ層上部においてそれぞれ出土しており、層位的に特に限定された層の指摘はできないようであるがその大半は細石刃（核）に伴っている。

一方 a 2 類は両地点のⅢ層中より12点出土しており、船野遺跡のナイフ形石器の主体的存在を予想させ、さらに細石刃・細石核と確実に共伴することが明らかである。

材質の面では第1地点のナイフ形石器は流紋岩以外に、黒耀石・チャアート・頁岩が用いられているのに対し、第2地点では全て流紋岩製である。特に第1地点のみで出土している a 1 類・c 1 類ではむしろチャアートが多く流紋岩と黒耀石が残りの半数づつを占めているのである。石材の選択の違いも両地点における差異を想定させる一つの資料と考える。

第1地点のみで見られる特徴的な小形のナイフ形石器はその石材と共に、黒耀石製の半円錐形細石核を主体とする細石刃に伴うものと考え、両地点における出土状況を加味して、第2地点の流紋岩製ナイフ形石器・細石核（刃）に若干先行するものとして、時間的な違いを考えておきたい。

台形様石器（第16図、表5）

第1地点より10点の台形様石器が出土しており、1点のみ表採で残りは全てⅢ層中から発見されている。素材の剥片を横位置に用いた a 類と縦位置に用いた b 類と素材の利用の仕方によって大きく分類することができ、それぞれ後の加工および形状にも関連しているようである。

a 1 類（1・2・9） 全体の形状がほぼ三角形を呈するもので、ブランテイングは両側辺に認められるがその一側辺は剥片の打面ないしその近い部位を利用している。

a 2 類（4・6・10） 刃部と反対の一端が丸味を有するように二次加工が施こされている点で a 1 類とは対照的な形状をなす。4 は刃部をのぞく周辺の表裏に加工が施こされ半月形を呈するのに対し、6 は剥片の打面側の表裏に集中的な二次加工が認められる。10 は両者の中間の様子を示めている。6・10 共に介在物の多い黒耀石製である。

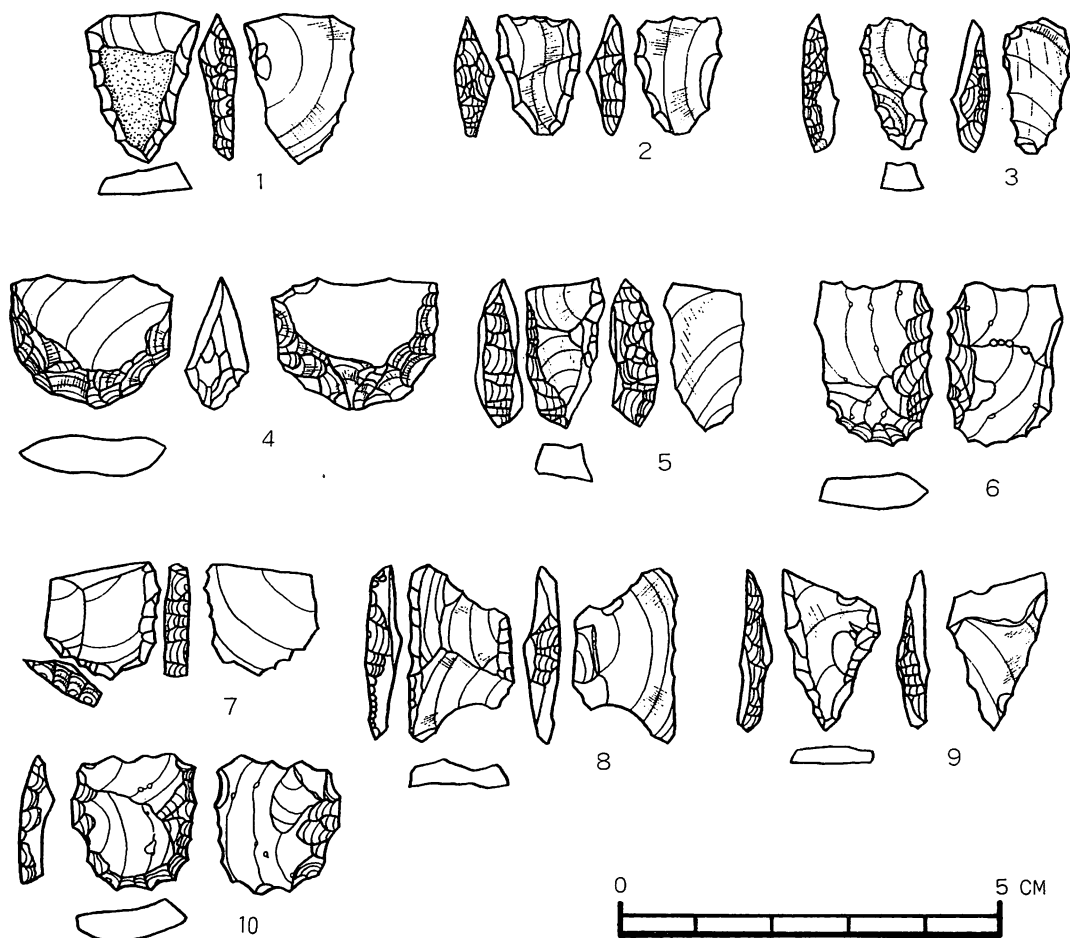
a 3 類（7・8） 台形様石器の基本的な条件とかけ離れており、7 については欠損している事とも合いまって一層問題は残る。8 は形状の点では難点はあるが製作手法については a 類に共通する特長を具備している。

b 1 類（3・5） 剥片を縦位置に使用していることに起因してか、a 類に比べて刃部の幅が狭くて縦に細長い三角形に近い形状を有する。ブランテイングは両側辺共に丹念に施こされている。全体的に a 1 類と分類したナイフ形石器に極似しており、両者の関連性を如実に示めす石器と見なすことができよう。

（表5）船野遺跡出土の台形様石器（図版一覧表）

地点	グリッド	層位	石材	長	幅	図版		
第1地点	1	表採	Ch	21	14	a 1 類	16	
	2	F-6・7	Ⅲ Rh	17	12	〃		
	3	D-7	Ⅲ a	〃	17	8		b 1
	4	D-8	Ⅲ b	〃	20	24		a 2
	5	F-6・7	Ⅲ	〃	21	11		b 1
	6	E-7	Ⅲ b	Ob	22	15		a 2
	7	E-7	Ⅲ b	Rh	15	15		a 3
	8	E 5	Ⅲ a	Ch	25	14		〃
	9	E-5	Ⅲ c	Rh	20	15		a 1
	10	E-7	Ⅲ c	Ob	18	17		a 2

（単位mm）



第16図 台形様石器（第1地点）

以上の台形様石器は全て第1地点の出土であり、第2地点では一点も発見されてなく両地点における石器組成の中で著しく異なる。石材の面では流紋岩製6点、残り4点はチャアートと黒耀石が各2点となっており、他の石器との違いが指摘できる。むしろ先に述べたナイフ形石器のa1類、c1類の石材の選択と共通する状況を示めしており、第2地点との差異が認められるのである。

台形様石器についてはナイフ形石器との関連が常に問題にされているが、その共伴関係については第1地点の調査結果で台形様石器がナイフ形石器、台形様石器に類似した小型ナイフ形石器、それに細石刃・細石核の古いタイプに伴うと判断できる。

細石刃（第17図・第18図、表6）

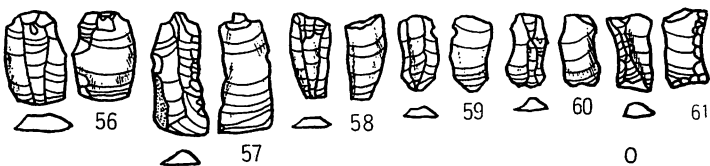
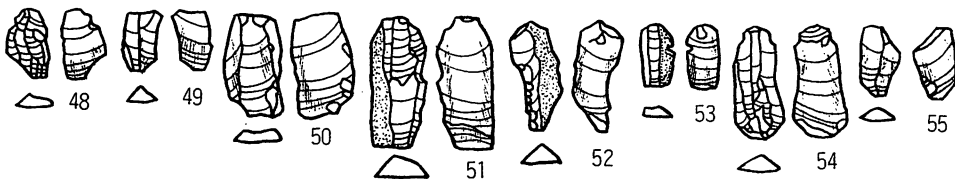
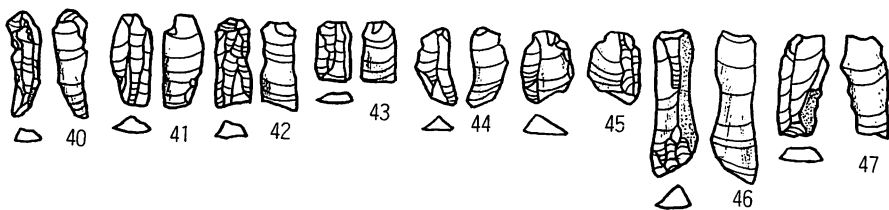
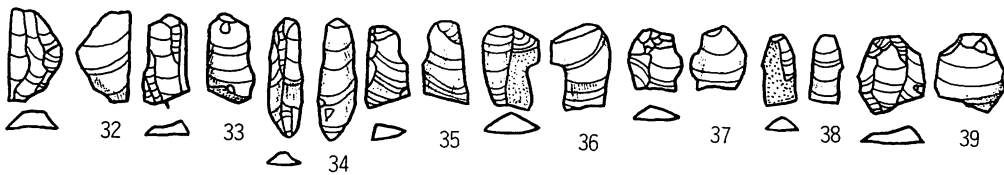
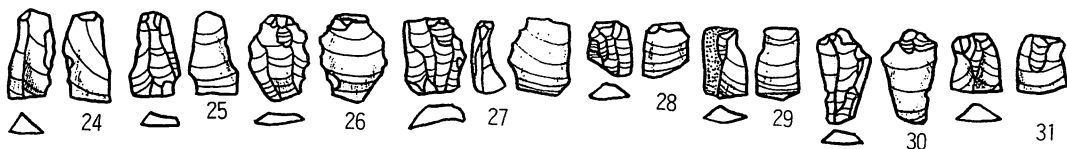
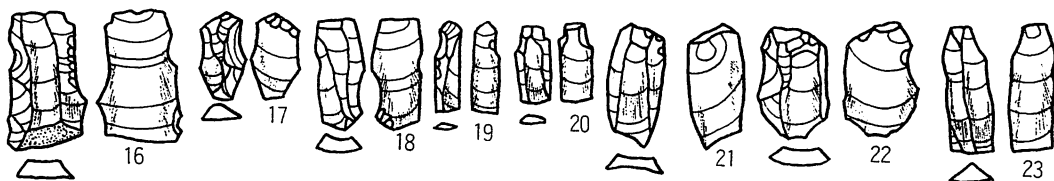
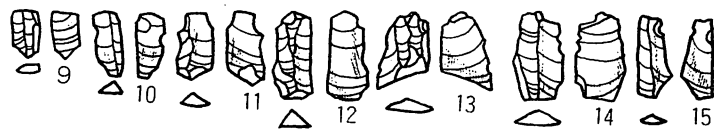
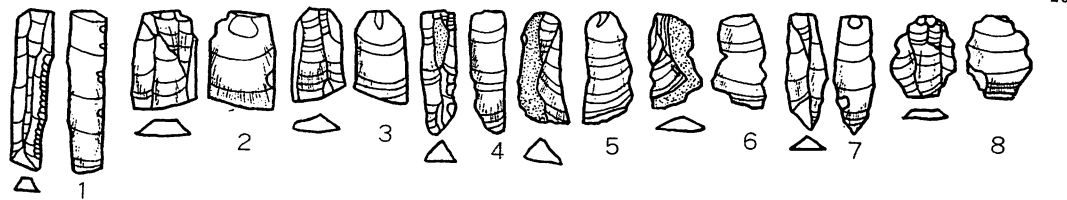
船野遺跡の石器文化を代表すると考えられる細石刃は第1地点で87点、第2地点で42点それぞれ発見されている。

Ⅲ層内での細石刃の出土は両地点共にⅢa層よりⅢd層にわたって発見されているが、第1地点ではⅢb層に最も多く、次にⅢa層でありⅢc層にもある程度出土している。第2地点ではⅢa層に集中しており以下の層では極端に少なくなっている。この出土の状況は両地点における他の石器類に共通しており、船野遺跡の第1地点・第2地点の石器文化の重要な組成の一つをなしていることが明らかである。すなわち第1地点で各種のナイフ形石器・台形様石器や尖頭器その他の石器に共伴し、第2地点でも台形様石器をのぞく他の石器群に伴っているのである。

細石刃の石材は両地点で異なっている。第1地点は87点のうち73点が黒耀石で残り14点が流紋岩であるのに対し、第2地点では流紋岩が最も多く27点、黒耀石が14点、チャート1点となっておりこれは当然の事ながら細石核も第1地点は黒耀石が多く第2地点では流紋岩が勝っている。なお第1地点の細石刃・細石核の黒耀石は淡黒色で透明度の高い良質なものがばかりで、鹿児島の上場遺跡近くに原産地をもつ介在物の多い黒色のものは使用されていない。

船野遺跡発見の細石刃は他の遺跡の細石刃で普遍的に見られるように打面から尖った先端までの所謂完形品は極端に少なく、第1地点では87点のうち7点、第2地点は42点のうちその約1割の4点のみである。最も数量の多いのは第1地点では頭部であり、第2地点では頭部と中間部が同数出土している。この細石刃の部分の在り方で、第1地点と第2地点の違いは両地点の主体を占める石材の違いに関連していると見なされる。すなわち黒耀石製の細石刃は長さ・幅ともに流紋岩製のそれより下まわっているのである。第1地点出土の黒耀石製細石刃の完形品の長さは平均14.6mmで、完形品以外の長さの平均は12.3mmを測り、その差は極めて小さいのである。2～3mmという差は細石刃の幾分彎曲気味の尖った先端のみを折（切）断しての利用が考えられる。その結果当然ながら基部の細石刃の数が多くなるのである。一方流紋岩製の細石刃では完形の長さが20.2cmで、それ以外の平均の長さは12.1mmを有している。この8mm前後の長さの違いが中間部の数を増加させているの推測される。この事は黒耀石製の細石刃では先端のみを折（切）断した二分割による使用が主体を占め、一方流紋岩製では二分割と三分割の両者による使用法が考えられる。長さに関連する幅でも流紋岩製のものが大きく、7mm前後に集中し、次に8mm 6mmの順であるのに対し、黒耀石製では6mmが最も多く5mmと6mmがほぼ同じ数見られる。全体の形状については先に挙げた数値でも明らかのように黒耀石製の細石刃は長さに対して幅があり全般にずんぐりしたものが顕著である。流紋岩製のそれは細長い形の整ったものが多く見られる。

細石刃の半数以上には使用痕と考えられる小さな刃こぼれや一側辺に沿っての微細な二次加工の施こされたものが観察される。細石刃に見られる二次的な痕跡は、表2・3で示めた様に細石核の数に比較して細石刃の数が少ない事とも関連して主要な道具として実生活で使用されていた事を示唆している。



第17図 細石刃 (第1地点)

(表6) 船野遺跡出土の細石刃 (図版一覧表)

	グリッド	層位	石材	長	幅	図版		グリッド	層位	石材	長	幅	図版				
第 1 地 点	1	表探	Ob	22	5	17	第 1 地 点	48	D-6	III b	Ob	10	5	17			
	2	"	"	15	7			49	D-6	III b	"	8	4				
	3	E-8	II	"	13			7	50	E-7	III b	"	14		7		
	4	D-8	II	"	17			4	51	D-8	III b	"	18		7		
	5	"	II	"	15			5	52	E-7	III b	"	15		5		
	6	E-8	II	"	12			7	53	E-8	III b	"	9		3		
	7	C-9	II	"	15			5	54	D-4	III b	"	16		7		
	8	E-8	II	"	16			7	55	E-7	III b	"	10		5		
	9	C-9	II	"	7			3	56	E-6	III c	"	13		8		
	10	D-8	II	"	9			3	57	E-6	III c	"	17		7		
	11	E-8	II	"	9			5	58	D-5	III c	"	11		5		
	12	D-7	II	"	12			5	59	D-7	III c	"	10		4		
	13	E-6	II	"	11			6	60	F-8	III c	"	10		4		
	14	D-8	II	Rh	12			7	61	E-6	III c	"	11		5		
	15	B-6	II	"	12			4	18	第 2 地 点	62	A-2	II		Rh	25	9
	16	B-10	III a	Ob	19			10			63	D-5	I		"	21	5
	17	B-2	III a	"	12			6			64	表探	"		16	8	
	18	B-6	III a	Rh	15			6			65	"	"		16	6	
	19	B-6	III b	Ob	13			3			66	B-3	II		Ob	15	6
	20	B-8	III a	Rh	11			4			67	A-2	II		Rh	12	7
	21	B-8	III b	"	16			8			68	C-2	II		Ob	9	5
	22	F-6・7	III b	"	16			9			69	D-5	I		"	9	6
	23	B-8	III b	"	18			6			70	B-1	II		"	10	8
	24	B-6	III b	"	13			5			71	表探	"		Rh	12	6
	25	E-8	III a	Ob	12			6			72	C-1	III a		"	23	7
	26	B-2	III b	"	13			8			73	A-2	III a		"	13	7
	27	B-10	III a	"	11			8			74	B-1	III a		"	12	7
	28	E-6	III a	"	7			5			75	A-3	III a		Ob	9	5
	29	D-8	III a	"	10			5			76	A-2	III a		Rh	11	5
	30	D-6	III a	"	13			7			77	A-1	III a		Ob	18	6
	31	D-4	III a	"	8			6			78	B-3	III a		Rh	17	8
	32	E-8	III a	"	12			6			79	A-2	III a		"	16	6
	33	D-5	III a	"	12			7			80	A-1	III a		"	11	6
	34	E-8	III a	"	16			4			81	A-1	III b		"	6	8
	35	D-5	III b	"	11			5			82	A-2	III b		Ob	8	5
	36	F-8	III a	"	12			8			83	B-1	III a		Rh	13	6
	37	E-7	III a	"	9			7			84	D-5	III b		Ob	9	5
	38	E-8	III a	"	10			4			85	A-1	III a		Rh	12	7
	39	E-8	III a	"	10			8			86	A-3	III b		Ob	14	7
	40	D-8	III a	"	14			4			87	A-2	III c		Rh	22	7
	41	F-8	III b	"	13			5			88	C-3	III d		"	22	7
	42	F-8	III b	"	12			5			89	B-1	III d		"	14	6
	43	F-8	III b	"	9			5			90	C-3	III d		"	10	5
	44	F-8	III b	"	11			4			91	B-2	III d		Ob	10	4
	45	D-9	III b	"	10			7			92	A-2	III c		"	9	5
	46	D-5	III b	"	20			6			93	A-2	III c		Rh	15	7
47	E-8	III b	"	14	7												

(単位mm)

細石刃の部位、最大長、最大幅

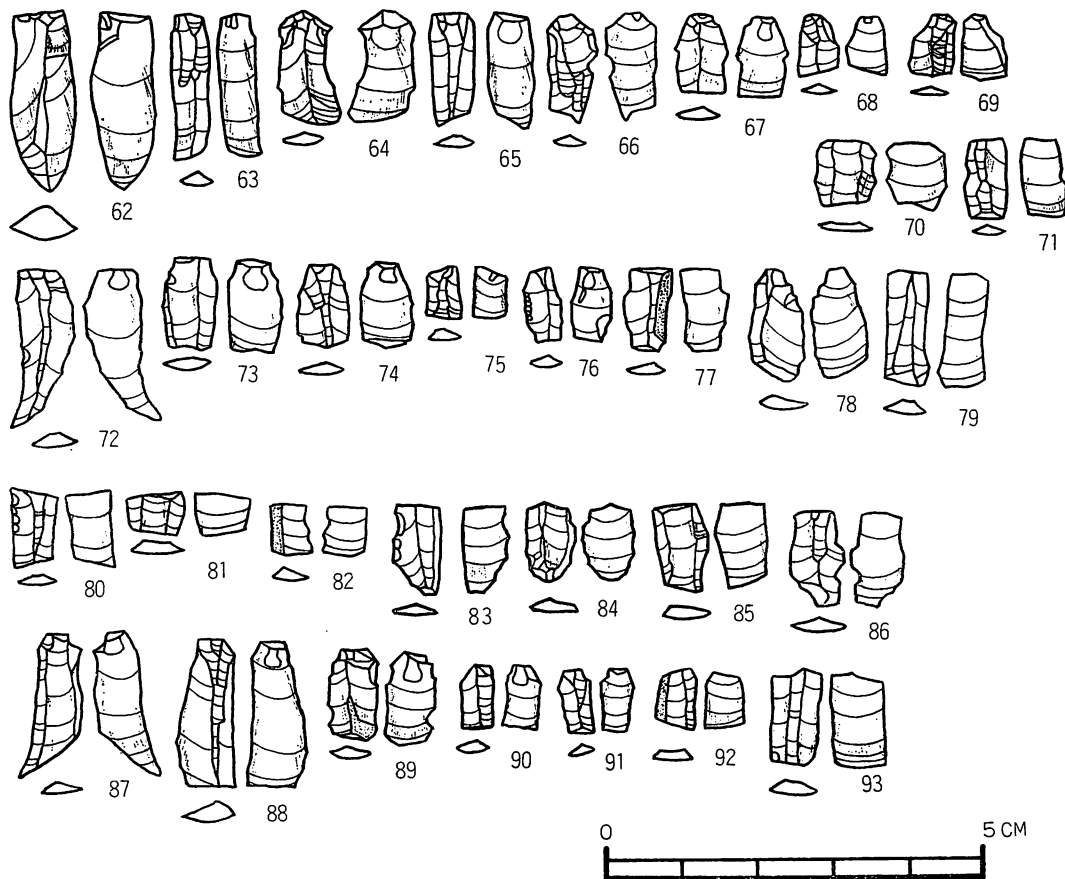
部 位 (点数)		完形	基部	中間部	末端部	
第1地点	Ob	7	41	18	7	73
	Rh	0	8	6	0	14
第2地点	Ob	0	5	7	2	14
	Rh	4	12	9	2	27
	Ch			1		1

最大長 (平均)			
	完 形	完 形 以 外	
第1地点	Ob	14.6	12.3
	Rh	0	15.5
第2地点	Ob	0	10.0
	Rh	20.2	12.1

(単位mm)

最大幅 (点数)		10	9	8	7	6	5	4	3 mm
第1地点	Ob 基部		1	3	8	12	11	3	3
	Ob 中間部	1	1		3	3	5	5	
第1地点	Rh 基部	1		3	2	1	1		
	Rh 中間部			1	3	1	1		
第2地点	Ob 基部			1	1		3		
	Ob 中間部			1	3	3			
第2地点	Rh 基部	3	2	5	2				
	Rh 中間部		3	2	3				

(Ch…チャート)



第18図 細石刃 (第2地点)

細石核 (第19～24図、表7)

船野遺跡では前に述べた細石刃の剝離を行なった細石核が総計39点出土している。この中には細石核として明確に判断し得ない様なやゝ難点のある資料と3点の石核再生剥片が含まれている。

第1地点では小形の黒耀石製の細石核が多く19点存在し、流紋岩製のそれは約5割の9点である。これに対して第2地点では流紋岩製の細石核が10点出土しており、黒耀石製の細石核は僅か1点のみである。

Ⅲ層内における出土の状況は他の石器類と同様、第1地点では17点のうちⅢb層に最も多く11点残り6点がⅢa層とⅢc層に各3点出土しておりⅢ層中部に集中して発見されている。第2地点ではⅢa層で5点、Ⅲb層4点、Ⅲc層1点という状態であり、Ⅲ層内の上部に集中する傾向がみられる。以下、両地点の細石核を流紋岩製と黒耀石製に大別して分類を行ってみる。

a 1類 (1・2・9・10・12・15～17) これは以前「九州における細石器文化—細石核の分類と編年試論—」の拙稿でB—I型(船野上層)として分類したものである。まず礫の一端に打撃を施こして打面を作り、これを利用して横方向からの加撃によって細石核の母型となる厚みの剥片をとるのである。この剥片の主要剝離面は細石核の打面として利用されると共に、側面調整の為の主要な剝離を行なう際にも用いられている。細石刃剝離は母型とした剥片の打面側かあるいは先端部に施こされる。横に長い剥片ではその両側辺に沿って細石刃の剝離が行なわれている。打面の調整は原則として行こなわれていないが、17の1点のみに調整剝離が施こされている。この石核の側面の形状は長方形に近いものが一般的であり、槌状剝離を二方向に有するものでは方形に近い形を呈している。槌状剝離が施こされている正面は比較的幅が広く、「逆かまぼこ形」「逆三角形」その中間的な「逆台形」を呈するものに分けることができる。正面の厚味のあることをのぞけば全体的には舟底形細石核に比較的類似した形態を有していると言うことができる。

a 1類(B—I型)の細石核は第2地点の主体を占めており、11点のうち黒耀石製の1点と石核再生剥片3点をのぞくと全てこのa 1類ということになる。

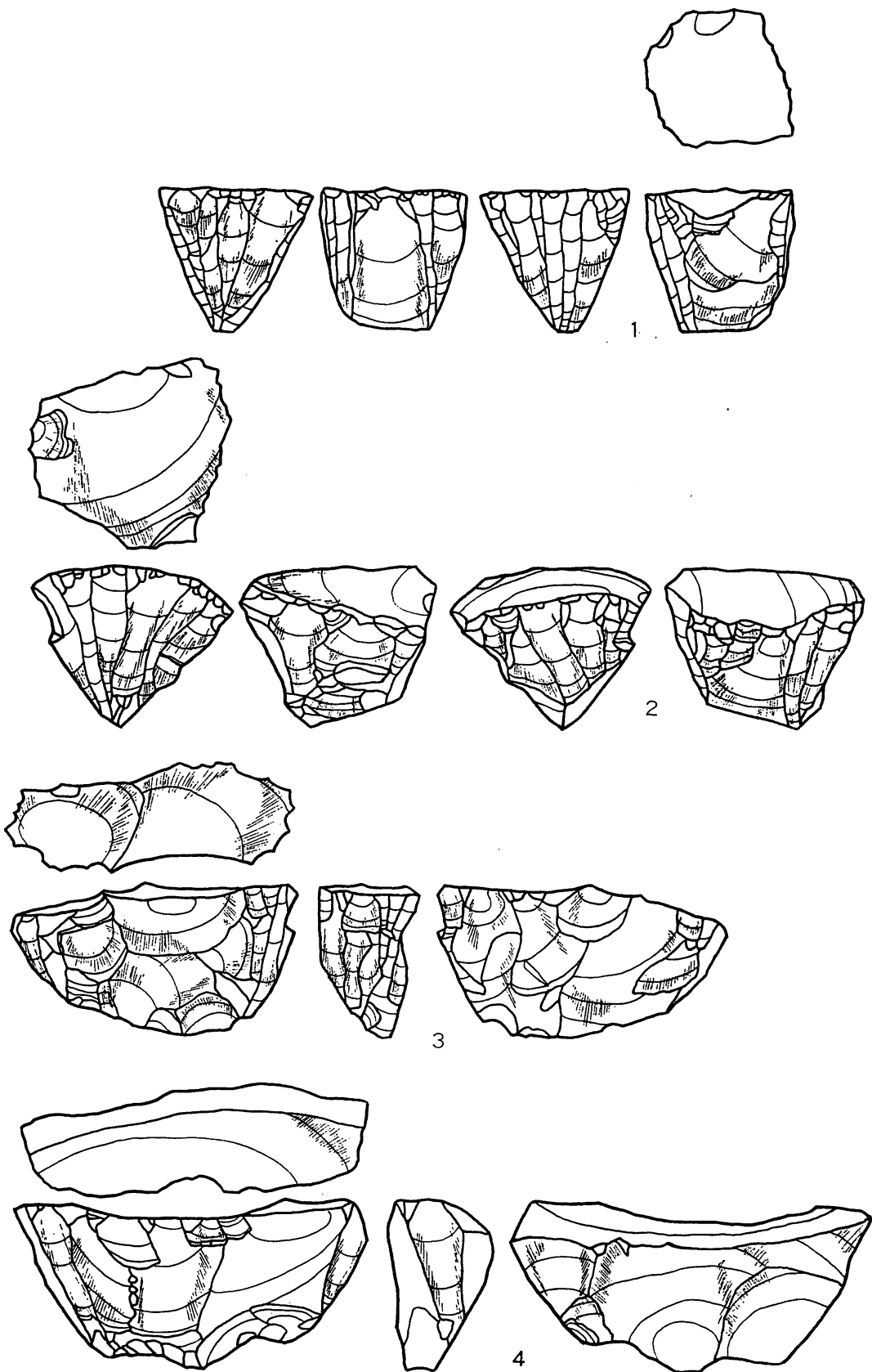
石核再生剥片3点のうち11はa 1類の10と接合することが確認され、12・13も全く同様である事からa 1類の再生剥片と判断できる。

a 2類 (3・4)

基本的にはa 1類と共通すると思われるが、母型作出の過程で、厚味のある剥片(?)に再び大きな一回の剝離を施こしている。しかしながら平担打面であることはa 1類と同様である。側面の調整剝離は上・下から丹念に施こされており、a 1類に比較して正面の幅が薄くなっておりより舟底形に近い形態を有している。側面調整は打面作出後になされていることからB型に入りしかも厚味のある剥片を利用すると推定されるのでa 1類と同様B—I型に分類されるであろう。

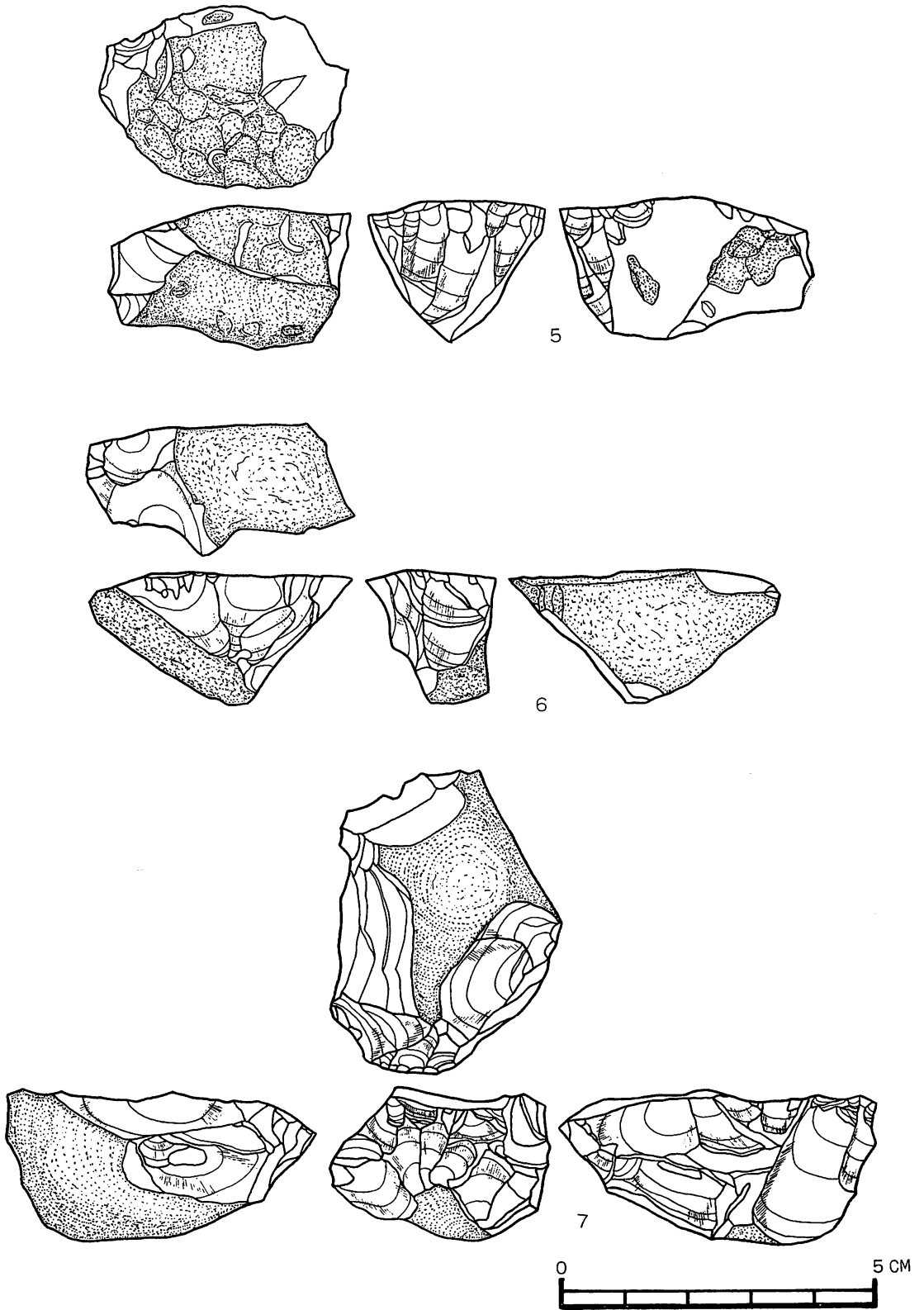
a 3類 (5～8)

流紋岩の比較的細長い小礫を素材にしている点にa 1・2類と異なる。打面の剝離は極めて部分的であり側面の調整も雑で、大部分に表皮を残している。槌状剝離は礫の短い辺の一端にほどこされている。全体の形状は側面調整が充分に行なわれていない事もあって礫の形に左右されている

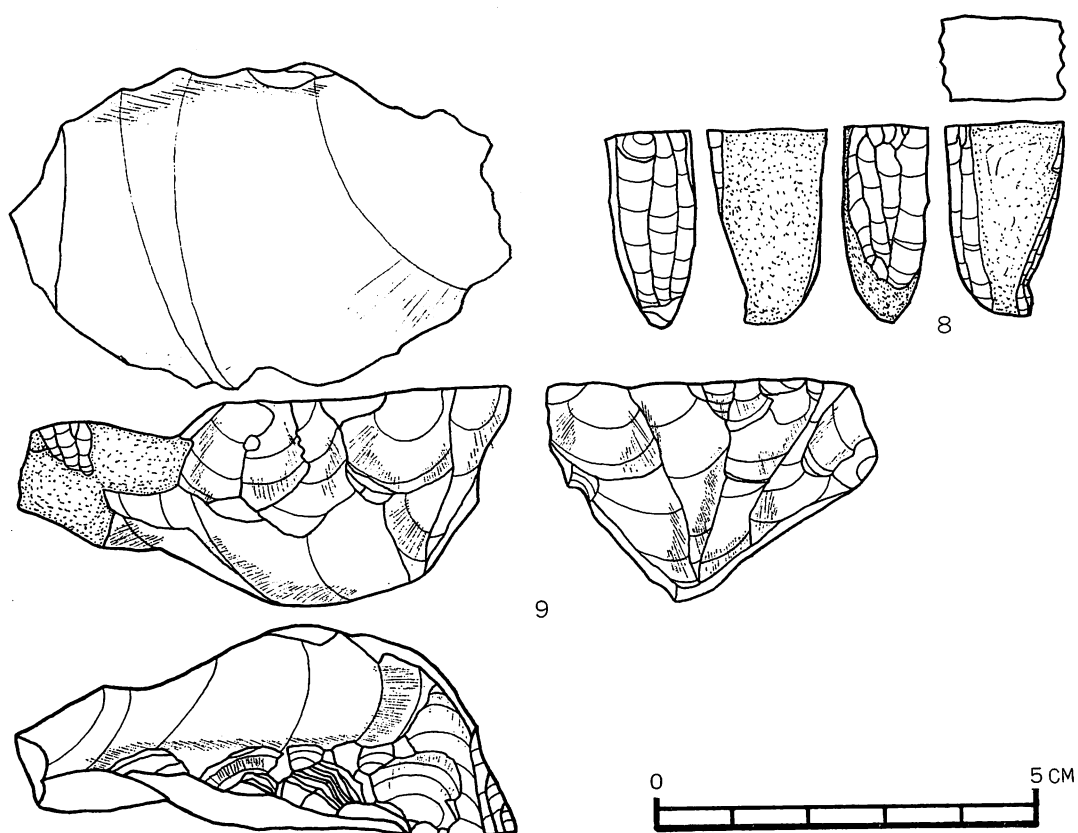


第19図 細石核 (第1地点)

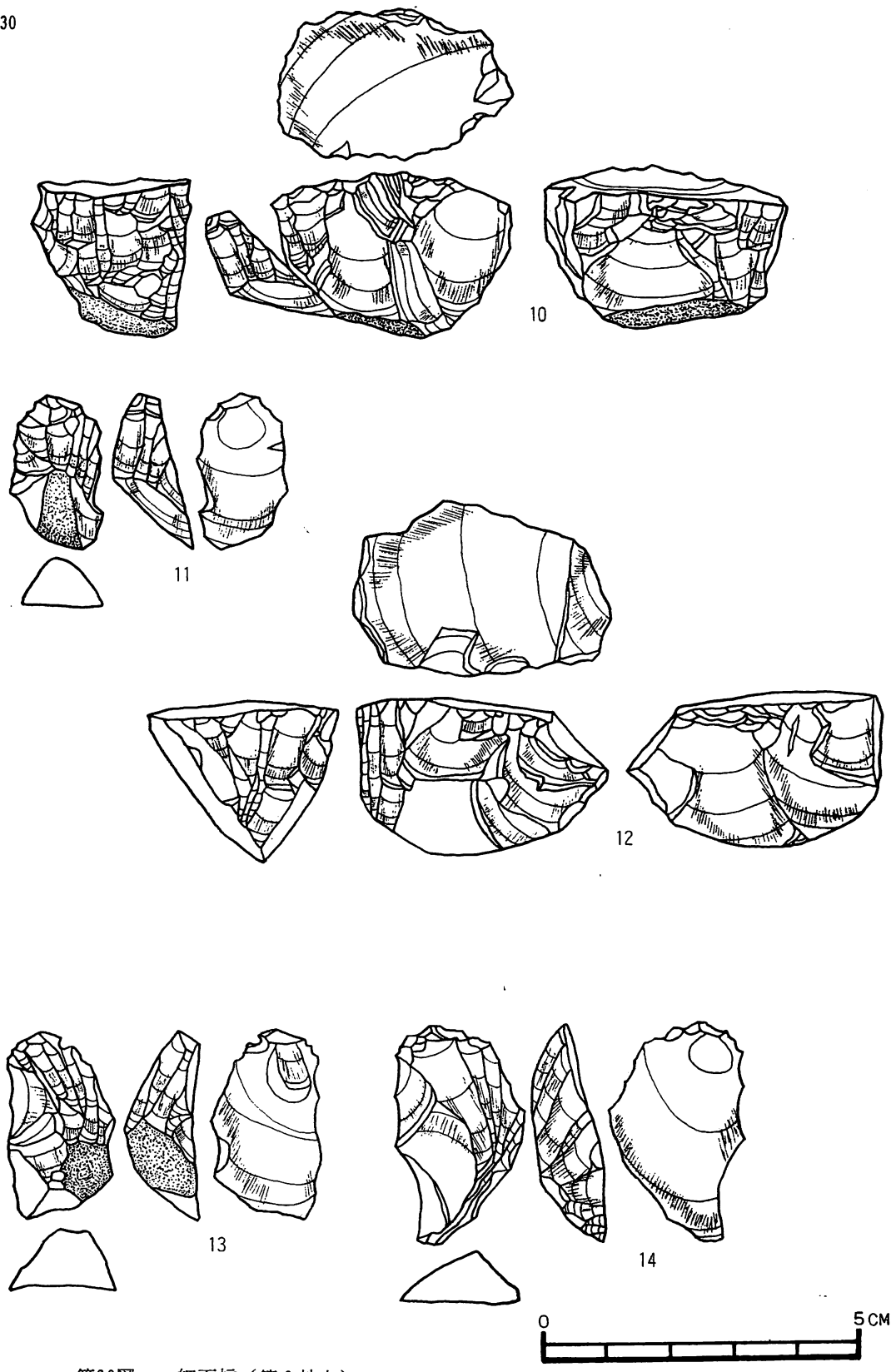
0 5 CM



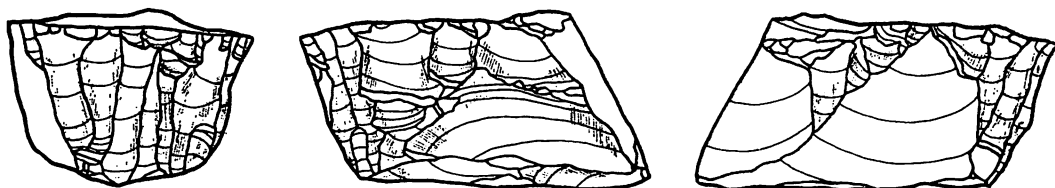
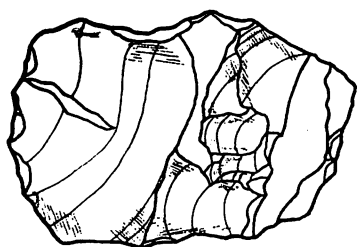
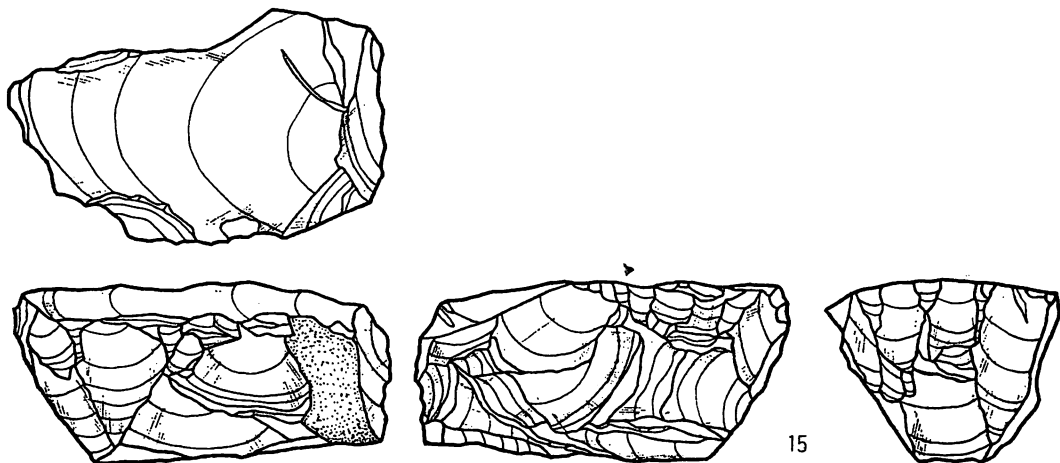
第20図 細石核 (第1地点)



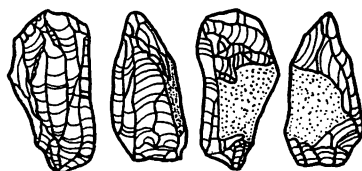
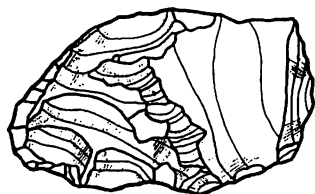
第21図 細石核（第1地点）



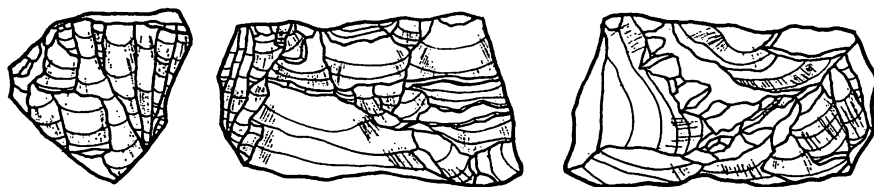
第22図 細石核 (第2地点)



16



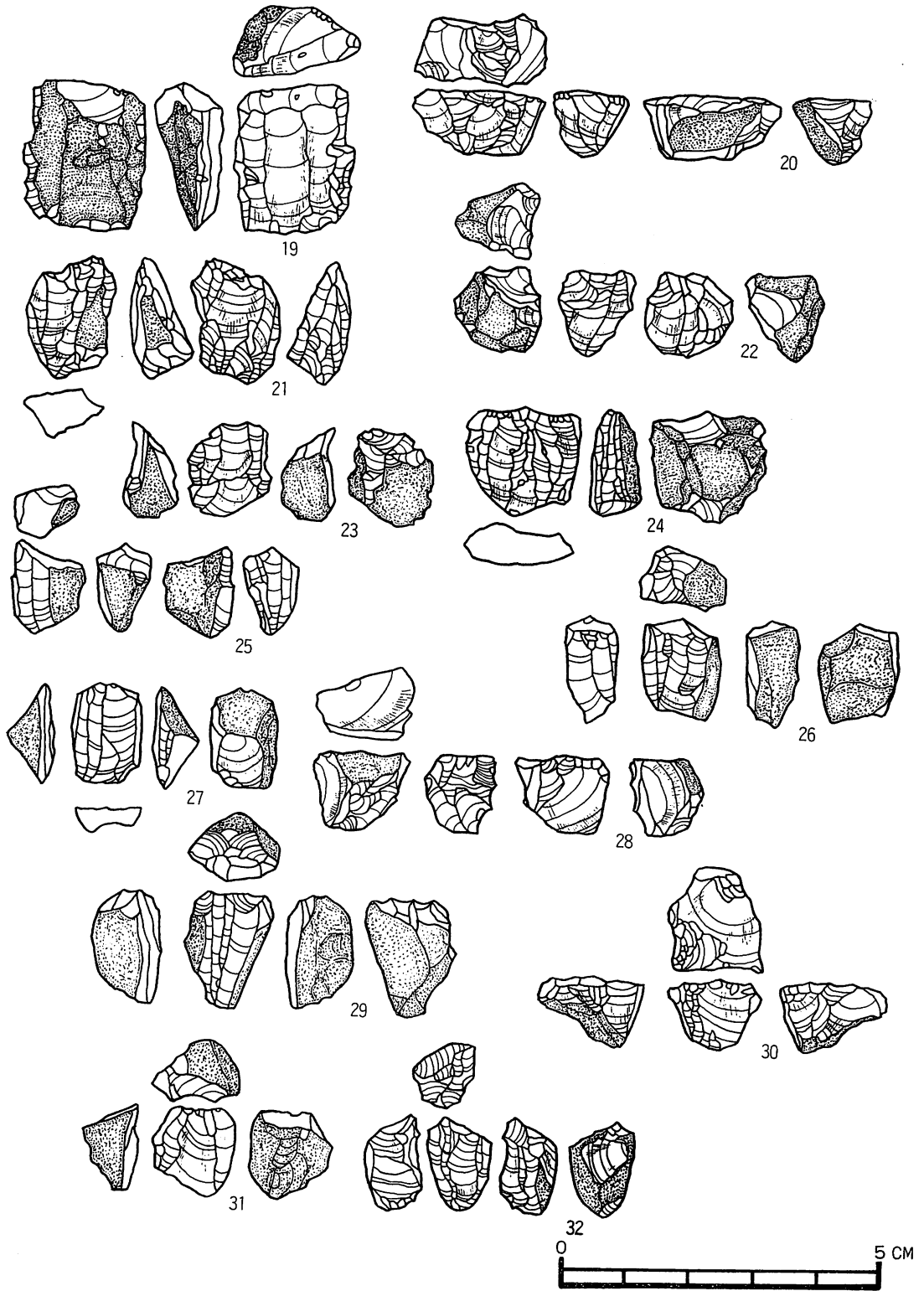
18



17



第23図 細石核 (第2地点)



第24図 細石核〔黒耀石製〕（第1地点）

(表7) 船野遺跡出土の細石核 (図版一覧表)

	グリッド	層位	石材	幅	高さ	長さ	図版													
								グリッド	層位	石材	幅	高さ	長さ	図版						
第1地点	1	表	採	R h	22	22	22	a 1 類	19	第2地点	17	B-2	Ⅲ b	R h	21	24	42	a 1 類	23	
	2	表	採	〃	29	25	30	〃	〃		18	A-1	Ⅲ a	O b	11	22	10	b 1	〃	
	3	D-4	I	〃	15	23	43	a 2	〃		19	表	採	O b	18	21	11	b 1	〃	24
	4	D-5	Ⅱ	〃	16	27	55	〃	〃		20	E-4	Ⅱ	〃	11	11	22	〃	〃	〃
	5	A-9	I	〃	30	24	40	a 3	〃		21	D-9	Ⅱ	〃	13	19	8	〃	〃	〃
	6	B-4	Ⅲ b	〃	22	23	45	〃	〃		22	E-5	Ⅱ	〃	12	14	14	〃	〃	〃
	7	D-4	Ⅲ c	〃	38	25	53	〃	〃		23	E-5	Ⅲ b	〃	14	15	9	〃	〃	〃
	8	D-6	Ⅲ a	〃	12	27	16	〃	〃		24	E-7	Ⅲ b	〃	18	18	18	〃	〃	〃
	9	E-7	Ⅲ b	〃	42	29	67	a 1	〃		25	E-8	Ⅲ b	〃	9	14	12	〃	〃	〃
第2地点	10	B-2	Ⅲ c	R h	24	24	36	接合 a 1	22	26	E-5	Ⅲ a	〃	8	15	13	〃	〃	〃	
	11	C-3	Ⅲ a	〃	再生剥片	〃	〃	〃	〃	27	D-6	Ⅲ b	〃	11	17	8	〃	〃	〃	
	12	B-1	Ⅲ a	〃	30	26	39	a 1	〃	28	D-4	Ⅲ b	〃	12	13	15	〃	〃	〃	
	13	A-1	Ⅲ a	〃	再生剥片	〃	〃	〃	〃	29	E-5	Ⅲ b	〃	14	19	11	〃	〃	〃	
	14	A-2	Ⅲ b	〃	再生剥片	〃	〃	〃	〃	30	表	採	〃	15	12	17	〃	〃	〃	
	15	A-1	Ⅲ b	〃	31	25	50	a 1	23	31	E-5	Ⅲ c	〃	13	15	9	〃	〃	〃	
	16	B-2	Ⅲ b	〃	34	22	47	〃	〃	32	E-6	Ⅲ b	〃	10	14	9	〃	〃	〃	

(細石刃剥離面の最大幅・高) (単位mm)

が、その形態の共通性を挙げるとすれば側面観がやゝ長方形に近い事が挙げられる。8は扁平な円礫の一端が平坦な摂理面で形成されているものを素材にして、摂理面を打面に利用し短辺の両端にフルウティングを施している。

このa 3類は先の分類に従えばB-Ⅱ型に含まれるものであるが、素材に平坦な一面をもち幅の狭い細長い礫を使用して、打面にほとんど剥離を行わず、自然面や摂理面をそのまま活用して短辺の一端に樋状剥離を行う方法はB-Ⅰ型に類似しており、B-Ⅰ型の祖形的な状態を示唆するものように考えられる。

b類 (18~32)

黒耀石の小さな礫を素材した細石核で、やゝ問題のあるものを含めて20点発見されており、そのうち19点は第1地点であり、第2地点出土の黒耀石の細石核は18の1点のみである。細石刃の項で述べたように黒耀石製の細石核は第1地点を代表するものであり、一方では第2地点との差異を端的に物語るものでもある。第2地点の1点は両者の関連を考察する上での貴重な資料と言えよう。

一見バラエティに富んでいるようであるが細石刃剥離の過程では全て共通しており、先の分類に従えばB-Ⅱ型のカテゴリーで把握できるものとする。形態のバリエーションは素材となった礫の形状と細石刃剥離作業の過程での進行状況に起因するのであろう。

第1地点で多量に出土しているb類の細石核の観察を行なってみる。素材となった礫のほとんどが2cmを大きく上回ることはない小さなものを使用しており、打面の調整は原則として樋状剥離面より背面の方向へ大きく行なわれており、その後細石刃剥離を施す際に再び調整のための小さな剥離を加えている。打面と樋状剥離面とのなす角度は細石刃の剥離作業が進んでいるものでは背面に向かって鋭く傾斜しており、初期の段階と考えられる細石核では90°に近い角度を有するという傾向が窺える。樋状剥離面はほぼ一面に限られている様であるが、一部側面におよぶものも見られる。

側面の調整は打面の方向から施行されるのが一般的であるが、横、斜方向からの剝離も存在している。石核の一部に例外なく表皮を残しており、その部位がこの石核の背面を形成している。これらの特長はいずれもB-I型に共通するものと見なすことができる。

最後にⅢ層内におけるb類の出土状況をつけ加えておきたい。この黒曜石製の細石核も例外でなくⅢb層に最も多く、続いてⅢc層、Ⅲa層の順序で出土しており、Ⅲd層およびⅢ層下面・Ⅳ層上部においては全く出土していない。

以上4類に分類した船野遺跡出土の細石核はB-I型とB-II型として把握できこの二つのタイプは細石核変遷の上で最も初期(第I期)の段階に位置づけられるものと考えている。

両地点の細石核 第2地点の主体をなすa1類と第1地点にほぼ限って出土しているb類との両者の関係については以下のような予測を持っている。地点を異なって両者に大きな違いが見られる事からまず先後関係が存在するであろう。次にa1類に観察される素材の選択と活用の方法、すなわち意図する大きさの母型を剝片という形で入手し、さらに剝片の打面を細石核の打面として利用する技術は舟底形細石核での製作手法と類似した要素を含んでいると考える。また第1地点におけるb類とa3類の両者には共通する面が指適でき、特にa3類はa1類の祖型的なタイプの可能性を具備していると推測するのである。これらの事からb類はa1類に先行する細石核であると考えられる。b類とa1類の両者がわずかな比率でもって共存することは互いに近接したあるいは一部分重なった状態での先後関係と思われる。細石核における以上の様なあり方から両地点の関係は、b類が主体を占める第1地点がa1類を出土している第2地点に先行するものとの考えられる。しかしながら第1地点におけるa1類・a3類の存在、また第2地点におけるb類の出土は両地点の時間的に近接してしかも極めて密接な関連性を予想させるのである。細石核の形態および技術から推測される両地点の関係は細石刃・細石核のⅢ層内における出土層とも一致しているだけに一段とその可能性は高いと判断される。

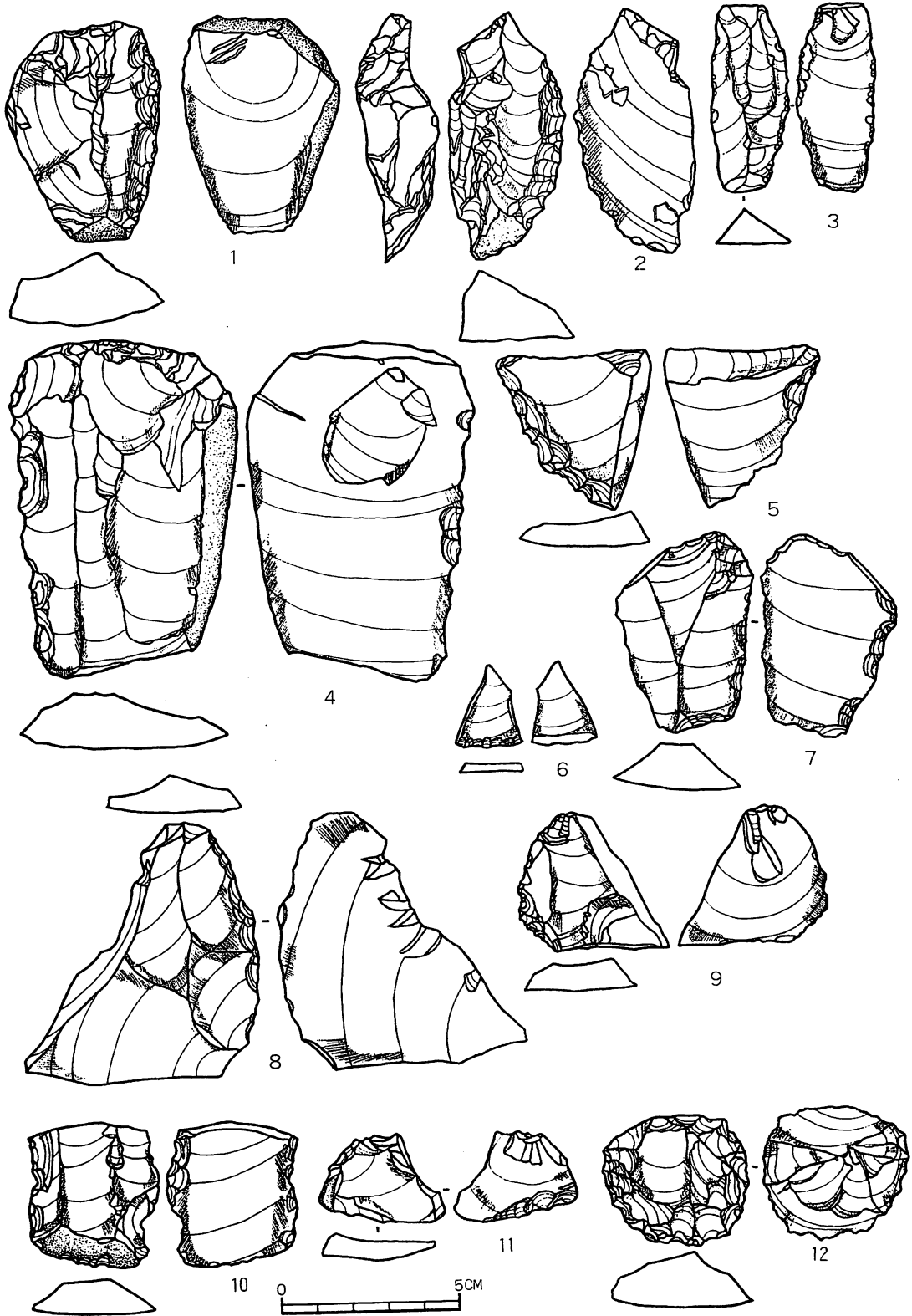
搔器・削器(第25・26・28図、表8)

比較的大形で厚味のある剝片の一側辺あるいは周辺に沿って二次加工の剝離が施こされ刃部を形成している石器を搔器・削器として一括した。第1・2地点のⅢ層から39点出土している。これらの石器は素材の剝片の形状および二次加工の状態から四類に大別できる。

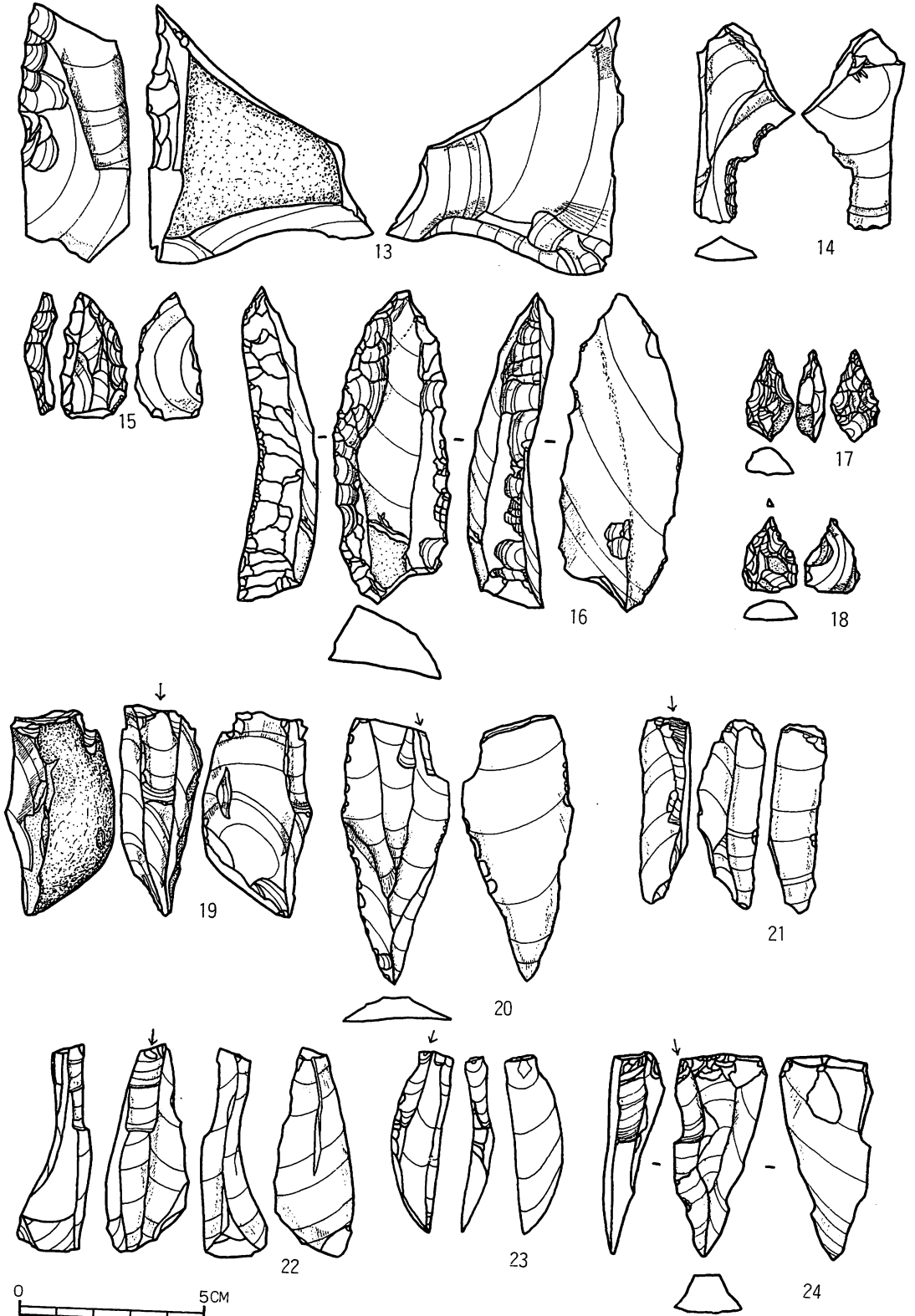
a類 1・2・5はa類の典型的な石器でいわゆるサイドスクレイパーであり、剝離面は一定した大きさを有して一側辺に並列している。この他にも縦長剝片を素材としたほぼ長方形を呈する形の整ったものが存在するが、先の3例に比べると刃部への二次加工の剝離が不揃いでしかも断続的に施こされている。

b類 数量は少ないが打面側をのぞいた周辺に入念な二次加工を施こして刃部を形成しており一般にエンドスクレイパーと呼称されるもので、12・42はその好例とされよう。

c類 素材とした剝片の不定形な事もあいまって全体の形状に斉一性がみられず、刃部形成のための二次加工も粗く断片的である。二次加工のある剝片のカテゴリーで検討されるべき資料とも思われ、二次加工の部位および形状を剝片の形態と共に分析する必要を痛感するのである。



第25图 搔器·削器 (第1地点)



第26图 搔器·石锥·彫器(第1地点)

(表8) 船野遺跡出土の搔器・削器、石錐、彫器、尖頭器 (図版一覧表)

地点		グリッド	層位	石材	長	幅	厚	図版		
第1地点	1	搔器	表 採	R h	57	43	20	a類 25		
	2		表 採	"	68	34	21	"		
	3		表 採	"	53	22	10	"		
	4		E-7	III b	"	94	64	16	"	
	5		B-4	III c	"	45	44	10	"	
	6		表 採	"	23	19	3	c		
	7		E-9	II O b	54	38	13	a		
	8		D 9・10	II R h	71	56	10	c		
	9		E-9	III d	"	39	36	9	"	
	10		D-9	III b	"	42	37	10	a	
	11		D-5	III b	"	25	35	6	c	
	12		F-6・7	III	"	36	41	15	b	
	13		D-8	III d	"	70	61	30	c	
	14		D-8	III c	"	54	25	7	"	
	15		表 採	"	34	18	7	d		
	16		D-6	III c	"	84	30	19	"	
第2地点	37	搔器	A-2	III a R h	56	42	9	a 28		
	38		B-2	III a	"	58	27	6	"	
	39		A-1	III b	"	44	34	17	b	
	40		C-3	III a	"	74	40	13	a	
	41		D-5	III	"	55	27	5	"	
	42		C-2	II	"	29	33	10	b	
	1	17	石錐	B-4	III b R h	12	24	7	26	
		18		B-4	III b	"	20	19	5	"
	第1地点	19	彫器	表 採	R h	56	30	22	a類 26	
		20		F-5・6	II	"	70	30	5	"
21			A-9	II S h	50	13	17	"		
22			D-7	III c R h	55	22	10	b		
23			D-6	III R h	50	14	6	"		
24			E-8	III a	"	56	24	15	"	
2		43	彫器	A-2	III R h	53	17	7	b 28	
		44		C-3	III b	"	47	21	9	a
1		25	尖頭器	F-8	II R h	43	16	8	a 1 27	
		26		B-6	II	"	50	16	13	a 2
		27		B-4	III b	"	38	10	9	" 2
		28		B-4	III c C h	47	18	13	a 1	
		29		E-4	III a R h	48	15	10	a 2	
		30		F-6・7	III C h	50	18	18	b	
	31		F-8	III a R h	29	16	10	a 2		
	32		B-2	III c	"	50	18	18	" 2	
	33		E 6	III c	"	69	19	12	" 2	
	34		D-5	III c S h	61	21	14	" 2		
	35		E-6	III c R h	46	19	20	" 2		
	36		D-4	III c	"	48	18	7	b	
2	45	尖頭器	表 採	S h	34	13	12	a 2 28		
	46		A-3	III c R h	84	35	13	a 1		

(単位 mm)

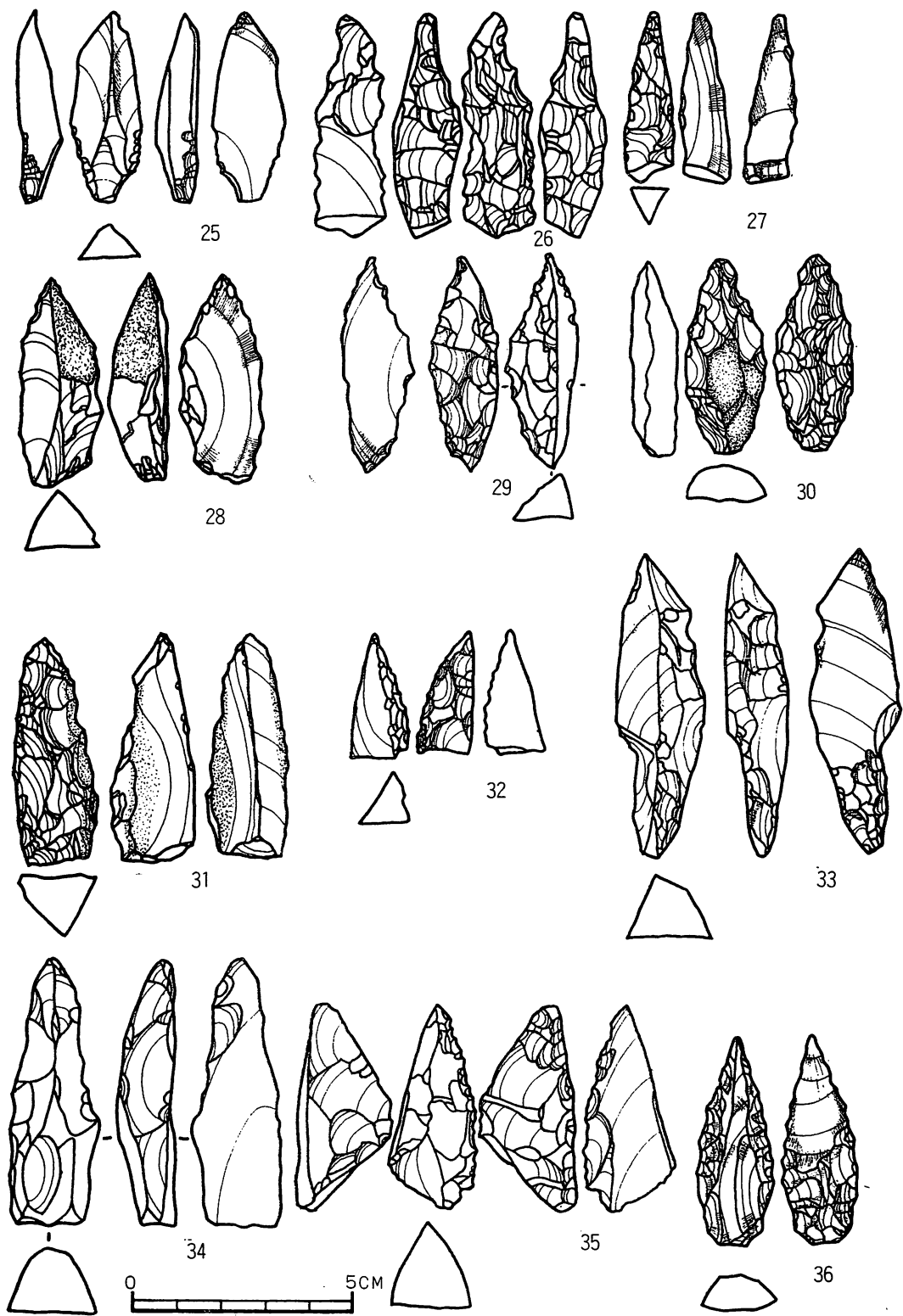
d類 第1地点から出土しており、その形状は尖頭状を呈し、二次加工の剝離は両側辺に沿って施こされている。15は典型的な横剃ぎの剝片を素材に用い二次加工は打面側の一側辺に集中している。スクレイパーとすべきかナイフ形石器として取扱うかその判断に苦慮する資料である。16は大形で厚味のある不定形な石器で、その両側辺に施こされている剝離は整然としており、尖頭状に近い形態に仕上げられている。比較的大形な石器である搔器・削器の石材のほとんどは流紋岩が用いられている。

石錐 (第26図、表8)

第1地点のIII層より2点、第2地点の同じ層から1点と3点の石錐が出土しており全て流紋岩製の小形の石錐である。両面共に加工を施こして先端部が菱形をなすもの(17)と片面のみに二次加工が集中し先端が三角形をなすもの(18)とが存在する。先端から基部に向かって4mm前後までの稜に擦痕が観察されしかもその下端で極めて僅かであるが段がみられる。

彫器 (第26・28図、表8)

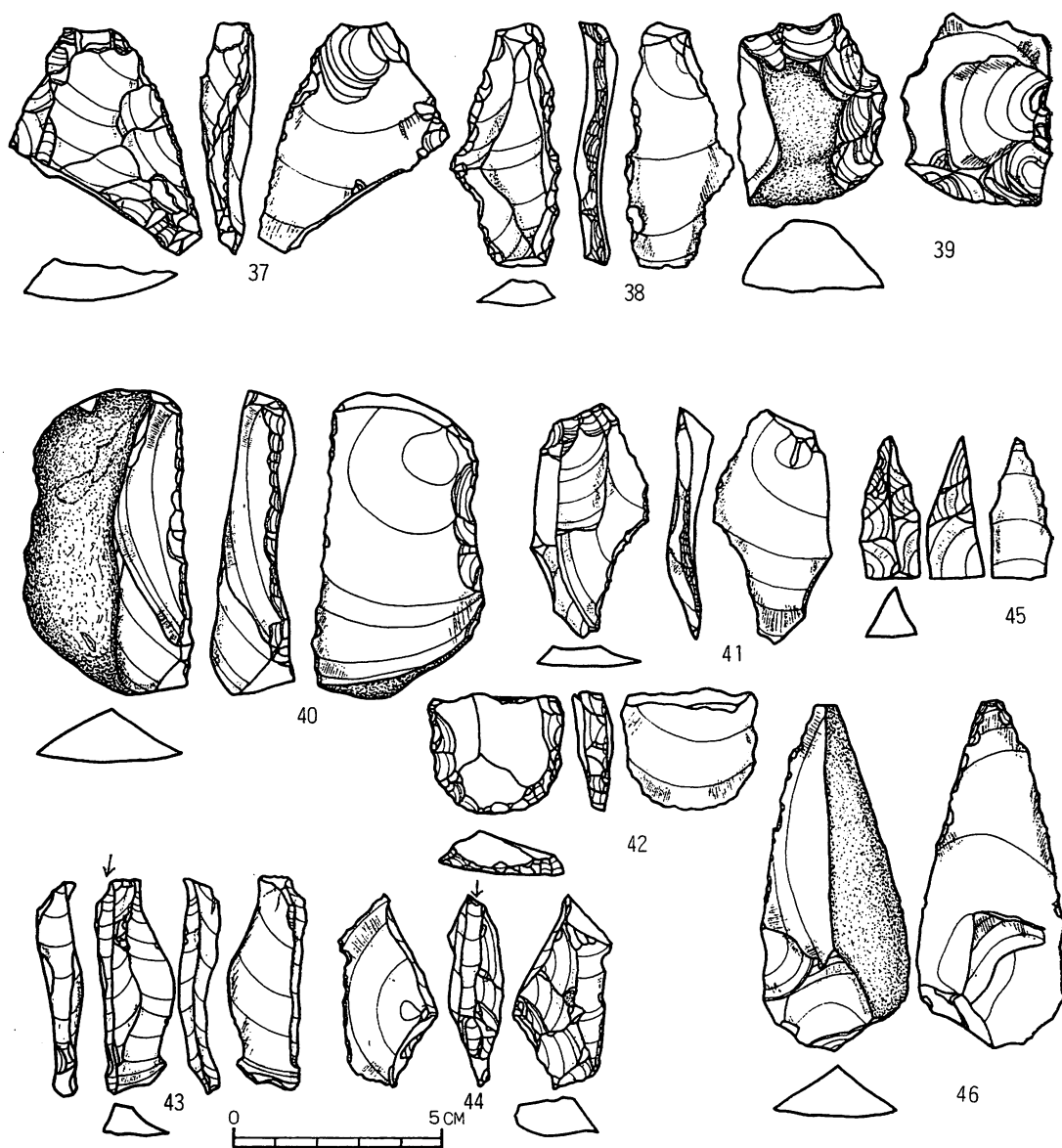
第1地点から7点、第2地点から3点出土しており、彫刻刀面以外は二次加工が施こされていない単純な形態に統一されている。彫刻刀面のみが剝片の一端に施こされている単打彫刻刀に分類される資料である。彫刻刀面作出の打面の状態から大きく二類に分類できる。



第27图 尖頭器 (第1地点)

a類 (19・20・21・44) 剥片の一端に一回の剥離による切断もしくは折断によって彫刻刀面形成のための打面を作り、その端に1～2回のフルウティングを施して彫刻刀面を作出している。そのフルウティングは剥片の打面方向からのものと、逆に末端方向からのものとが見られる。44は横剥ぎ剥片の先端近くから打面に向かって彫刻刀面が形成され、打面と交わる部位に鋭い角度を作り出しており、この部位に顕著な擦痕が観察され、彫器の使用部位を示めす一つの好例と言える。

b類 (22～24・43) 剥片のもつ平坦打面をそのまま彫刻刀面作出の打面として利用している点でa類と異なる。打面の一端に加えられた打撃が剥片の先端まで及んで彫刻刀面を形成しているもの



第28図 搔器・削器・彫器・尖頭器 (第2地点)

と、途中でステップフレイキングをなすものが見られる。

尖頭器 (第27・28図、表8)

兩地点で15点出土あり、素材・形態それに製作手法には多様性が見い出せるが、それらは三類に大別できると考える。

a 1類 (25・28・46) 横断面が三角形を呈し、全体の形状が細長くほぼ三角形に近い形の剥片を素材に基部あるいは先端部にのみ僅かな加工が施こされたものである。鋭い先端およびそれに連なる刃部は素材に選んだ剥片の形状が最大限に活用されている点に特徴が指摘でき、*「剥片尖頭器、*と呼称するが妥当であろう。

a 2類 (26・27・29・31~35・45) 縦長あるいは横長の剥片で横断面形が三角形を呈する事は a 1類と同様であるが、全般的に厚味を有する剥片を素材に用いている。二次加工は三側面のうち一側面に集中するものと、二側面におよぶものがあり、剥離面の形状は一定でなく一見して粗雑な感じを受ける。折損品が大半を占めるため全体の形態を把握し難いが全長は7cmを大きくうまわることはないであろう。この a 2類は原則として三つの稜を形成していることから、*「三稜尖頭器、*と呼んでおき、a 1類とは区別しておく。

b類 (30・36) 比較的扁平で横断面が凸レンズ状に近い形態を有するもので、その加工は両面ないし半両面加工として把握できる。30はチャート製で、先土器時代に存在する尖頭器に最も類似しており、全体の形状は木葉形を呈し全長は4cm余の小形の尖頭器である。36は縦長の剥片を素材に打面側を尖頭器の基部に用い、主要剥離面に二次加工を施こしている。尖頭部は基部とは逆の面に加工が集中している。

礫器 (第29図、表9)

第1・2地点において礫器と考えた石器が16点出土している。礫器については残核とさらに残核の再利用と考えられるものなどとの関連を考慮しなければならないこともあり、16点とした中には認定の困難なものが含まれている。これらの事を踏えても、細石刃・細石核とナイフ形石器とで代表される石器群の組成に礫器が確実に伴う事を示めている。*「chopper、*と呼称されている片刃の礫器 (**a類**)、両面に剥離が施こされている *「chopping-tool、* 両刃の礫器 (**b類**) それに両面に剥離の施こされているが b類に比べて二つの剥離面のなす角度が大きいもの (**c類**) などが存在する。特に c類は船野遺跡で出土している石核の一つのタイプを形成するもの、残核と類似した形態を有しており、両者の関連が検討されなければならないであろう。礫器の石材には流紋岩の他、サヌカイト・安山岩等が用いられている。

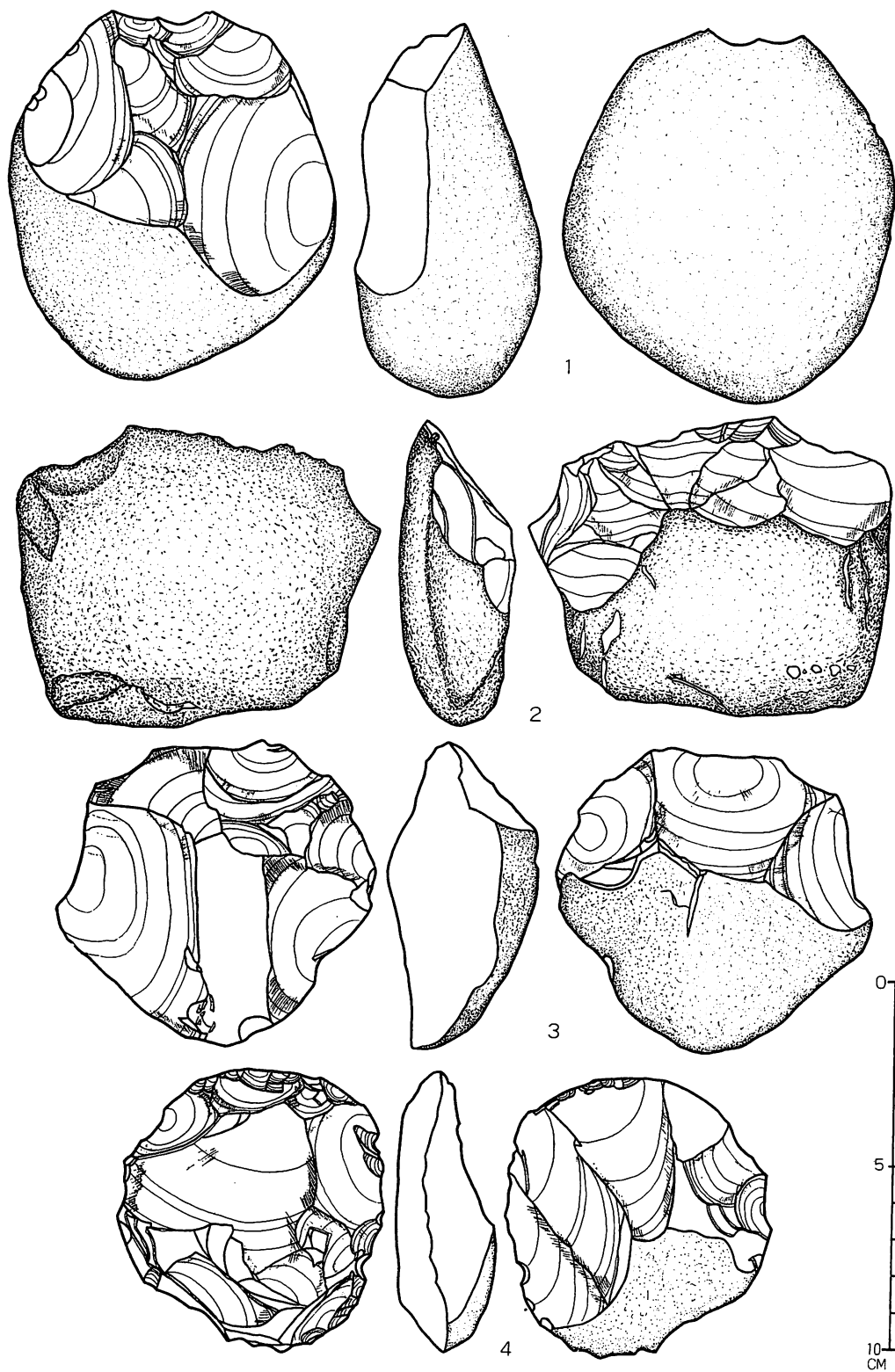
敲石 (第38図、表9)

第1・2地点のⅢ層中より敲石と考えられる石器が8点出土しており、そのうち2点は第1地点の礫群が出土した個所に近接した位置に出土している。打痕は円礫の一端部で顕著に見られる他、側面の一部でも断片的に観察される。

(表9) 船野遺跡出土の礫器・敲石
(図版一覧表)

		グリッド	層位	石材	長	幅	厚		図版	
第1地点	1	礫器	E-8	II	Rh	100	96	50	a類	29
	2		C-9	I	Sh	80	97	30	〃	
	3		D-5	IIIb	Rh	83	85	40	c	
	4		E-7	II	An	76	71	27	d	
第2地点	20	敲石	E-7	IIIc	Sa	162	47	47	592g	38
	22		D-5	IIIb	Rh	51	34	40	142g	
2	21	敲石	B-3	IIIb	Rh	72	50	34	120g	38

(単位 mm)



第29图 磔器 (第1地点)

剥片、使用痕のある剥片、二次加工の剥片（第30～34図、表10）

剥片 第1・2地点のⅢ層から剥片・碎片が712点出土しており、大きさは7～5cm、幅3cm前後のものが量的に最も多い。石質は他の石器と同様に流紋岩が全体の7割余りを占めており、他にサヌカイト、安山岩、それに少数でしかも小さな剥片・碎片でチャアート・黒耀石・頁岩・砂岩などが出土している。剥片の形状は先にあげた数値の様に縦長の剥片（**a**類）が全体の約7割近くを占めており、残りの3割強が横長剥片（**b**類）である。両者の剥片とも打面が比較的大きく残されており、打面の調整は一回の剥離による平坦打面より成っており、調整打面を有する剥片は例外的に認められる程度である。剥片の形状から大まかな分類を行なってみる。

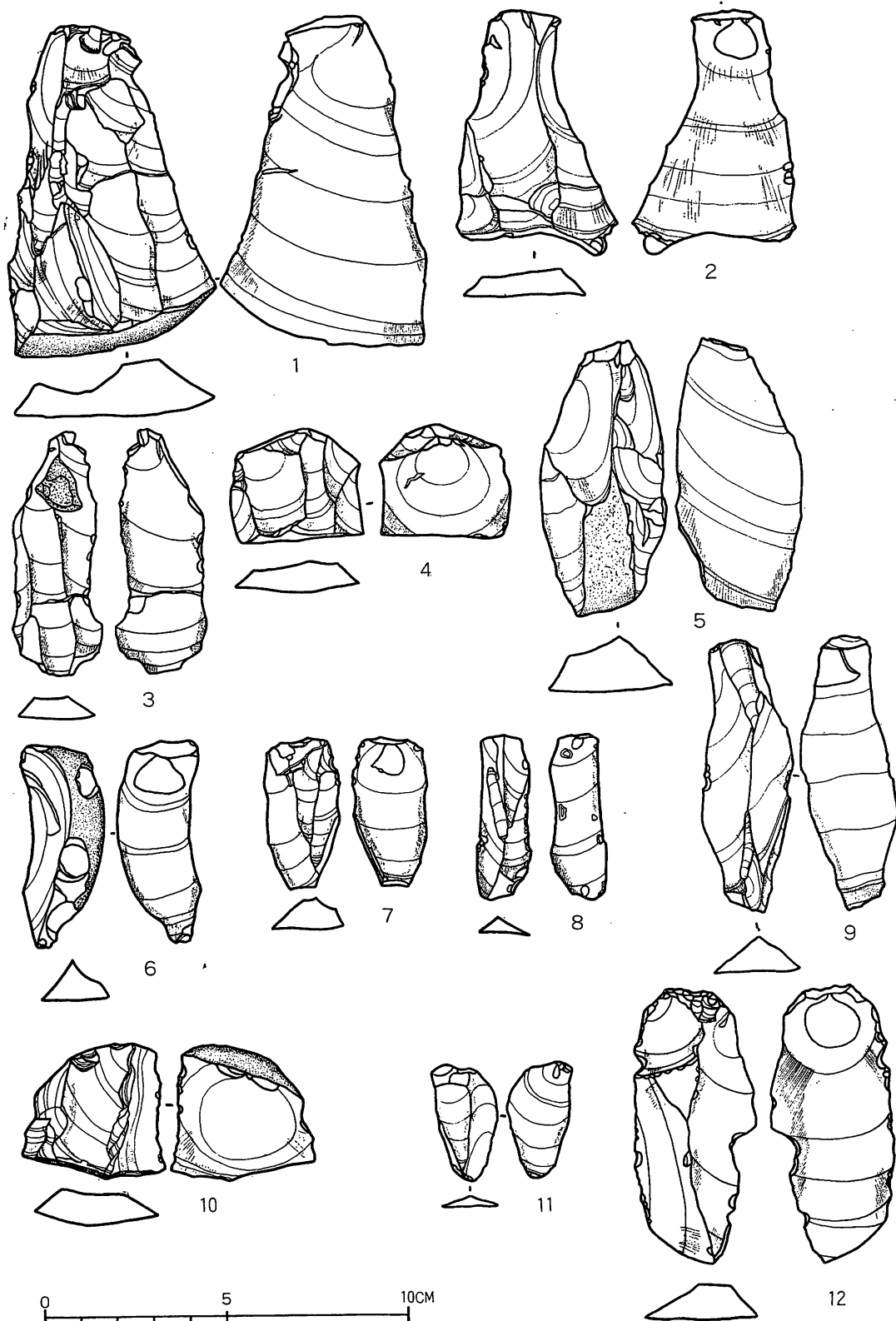
a 1類は打面と反対側の先端が尖り、しかもほぼ中央に位置する形の整ったもので、使用痕の観察されるものが多く、二次加工の剥離が部分的に施こされているものも見られる。**a 2**類は先端部の尖がる点は**a 1**類と同様であるが中央に位置せず一方に片寄って「ノ」の字状を呈する。長さの割に巾が広く幾分ずんぐりした形をしており全般的に大形のもが顕著である。局所的な小さな剥離が施こされているものもある程度認められ打面の大きい点もこの類の特徴と言える。**a 3**類は全体の形状では**a 2**類に共通するが、打面と反対側の一端が尖らず丸味ないし平坦な形を呈する。形の大きいものと小さいものとに大きく分離する傾向が窺える。

b類は横長の剥片で、打面から末端までの長さ比べて幅の方がより長いかほぼ同じ長さのものである。剥片の形状は先端に違いが見られ、末広がりのも（**b 1**類）、打面とほぼ同じ幅のも（**b 2**類）、尖って「ノ」の字を呈するもの（**b 3**類）などに分類できよう。横長の剥片は縦長の剥片に比べて絶対数が少ないことは前に述べた通りであり、二次加工のある剥片、あるいは使用痕の観察される剥片の率は極めて低いようである。また、この**b**類の剥片ではその一部に表皮を残している事が顕著な特徴として挙げ得る。この事は横長剥片を取る目的で意図的に剥離されたものの他、縦長剥片を剥離する過程での初期の段階の剥片が含まれている為と考えられる。

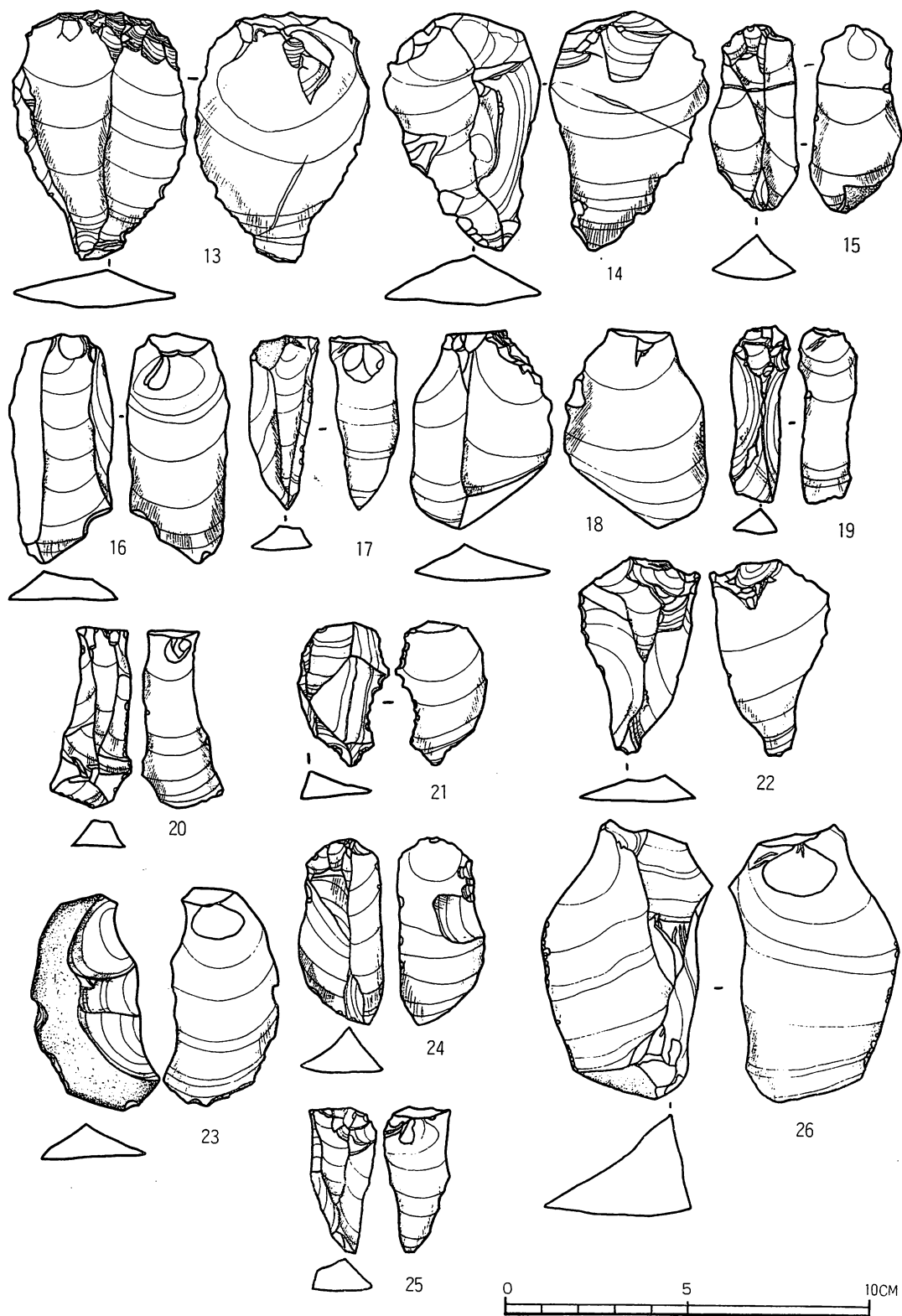
使用痕・二次加工の剥片 第1地点でのⅢ層出土の545点の剥片類のうち180点には剥片の一部に二次加工の剥離が部分的に施こされているか、あるいは使用痕と推定される痕跡が観察される。すなわち全ての剥片類の約32%には何らかの形で人為的な意図が加わっていると言えよう。第2地点では168点のうち61点で約36%とほぼ同率で利用されているのである。定型化された石器を上回る数の剥片類が当時の生活に何らかの形で参与していることが予想されるのである。

剥片の項で指摘した様に先端が尖り、細長い形の整った縦長剥片においては使用痕が顕著に観察されるのである。鋭い先端とそれに連続するシャープな縁辺は文字どおり「刃器」としての機能を与えることができよう。

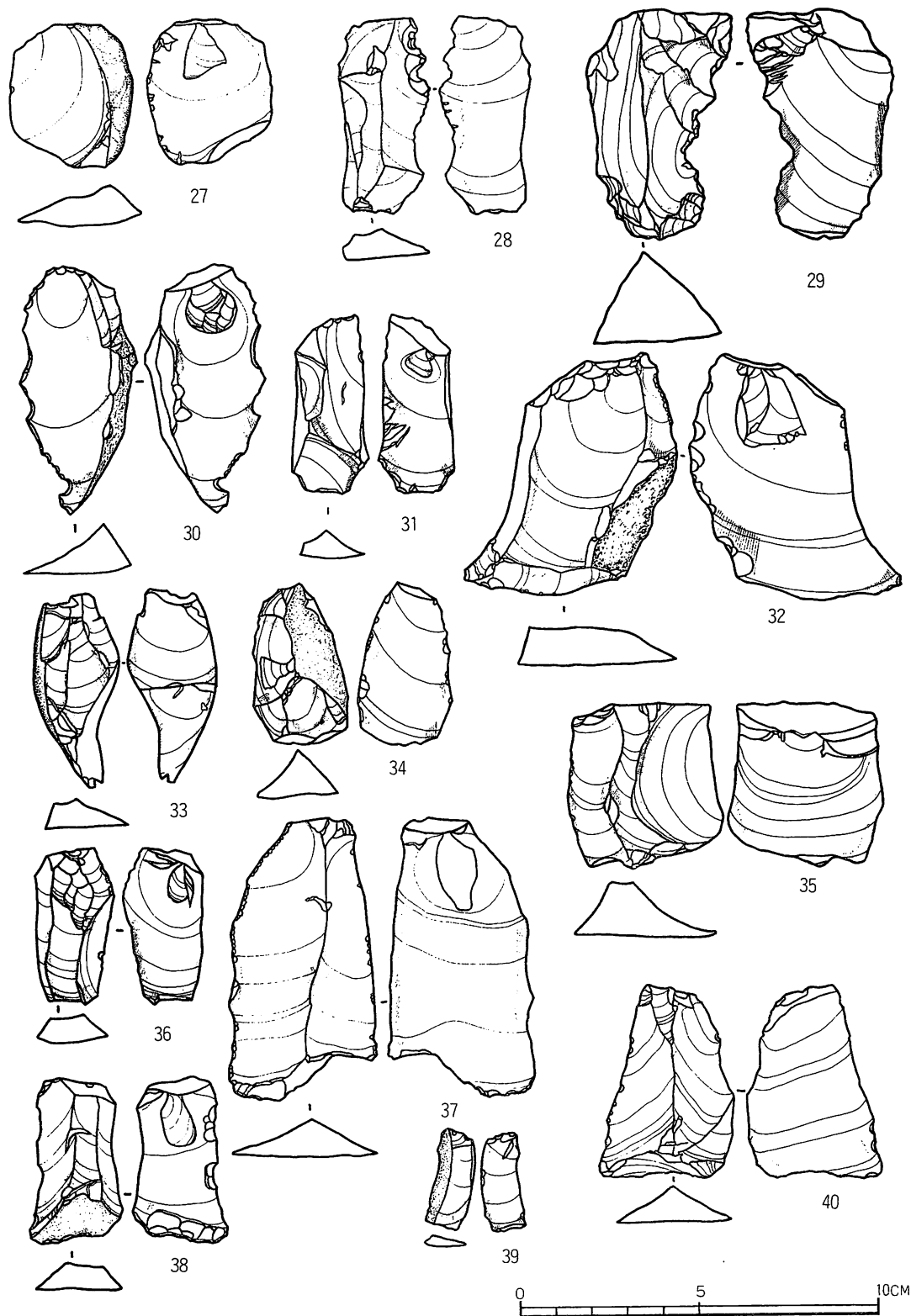
二次加工の剥片は剥片の一部に小さな剥離を局所的に施こしているが、その形態が一定でなく一つの器種として定型化されていないものである。共通した形状や製作手法の抽出は困難であるが、強いて行なえば剥片に施こされた二次加工の部位から二大別できそうである。すなわち剥片の側面の一部に認められるものと、打面と逆の一端に尖頭状ないし直線的な刃部と推定される部位を形成しているものとである。なお二次加工のある剥片石器での二次加工の剥離は刃部形成と保持のため



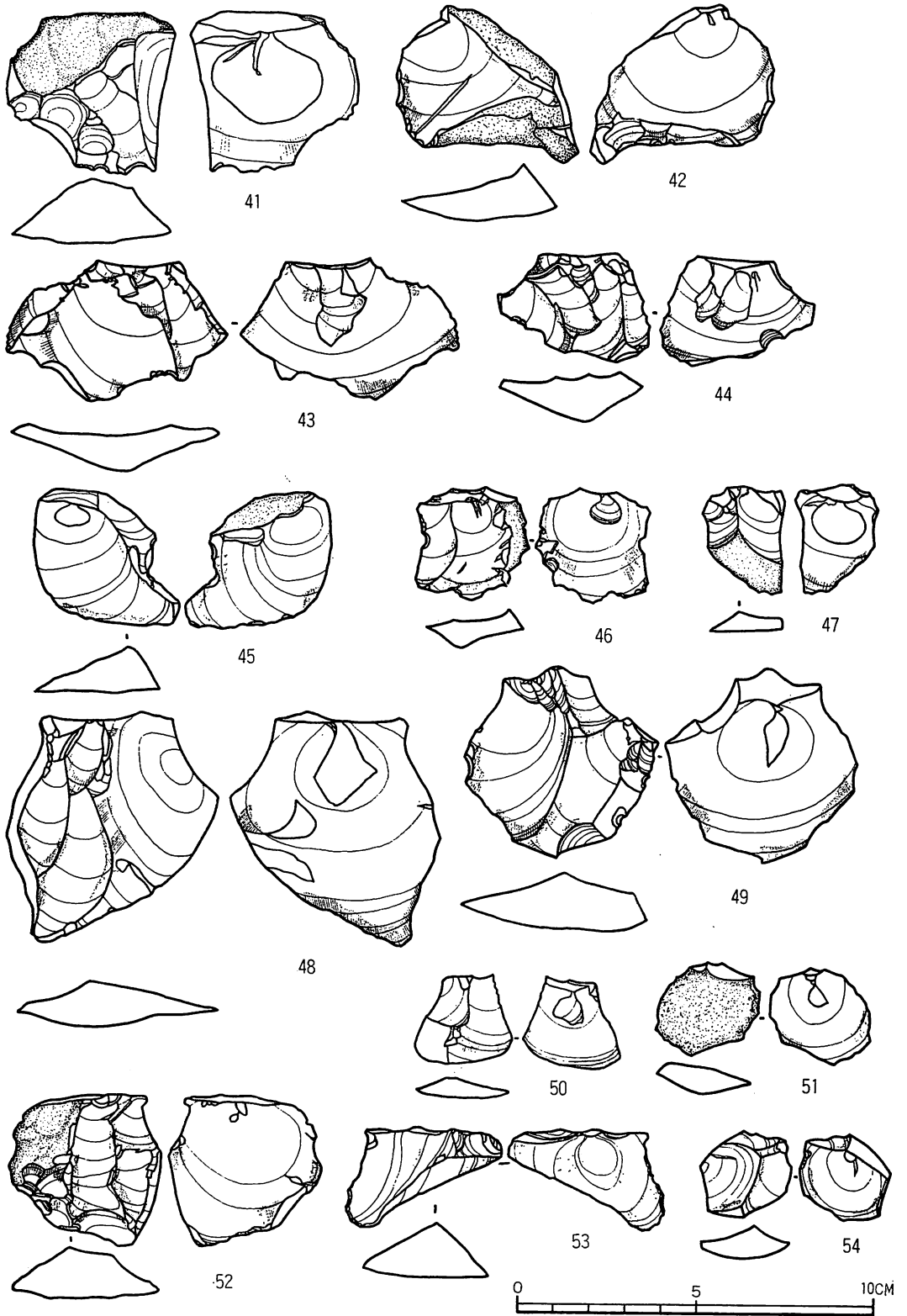
第30图 二次加工剥片·使用痕剥片·剥片(第1地点)



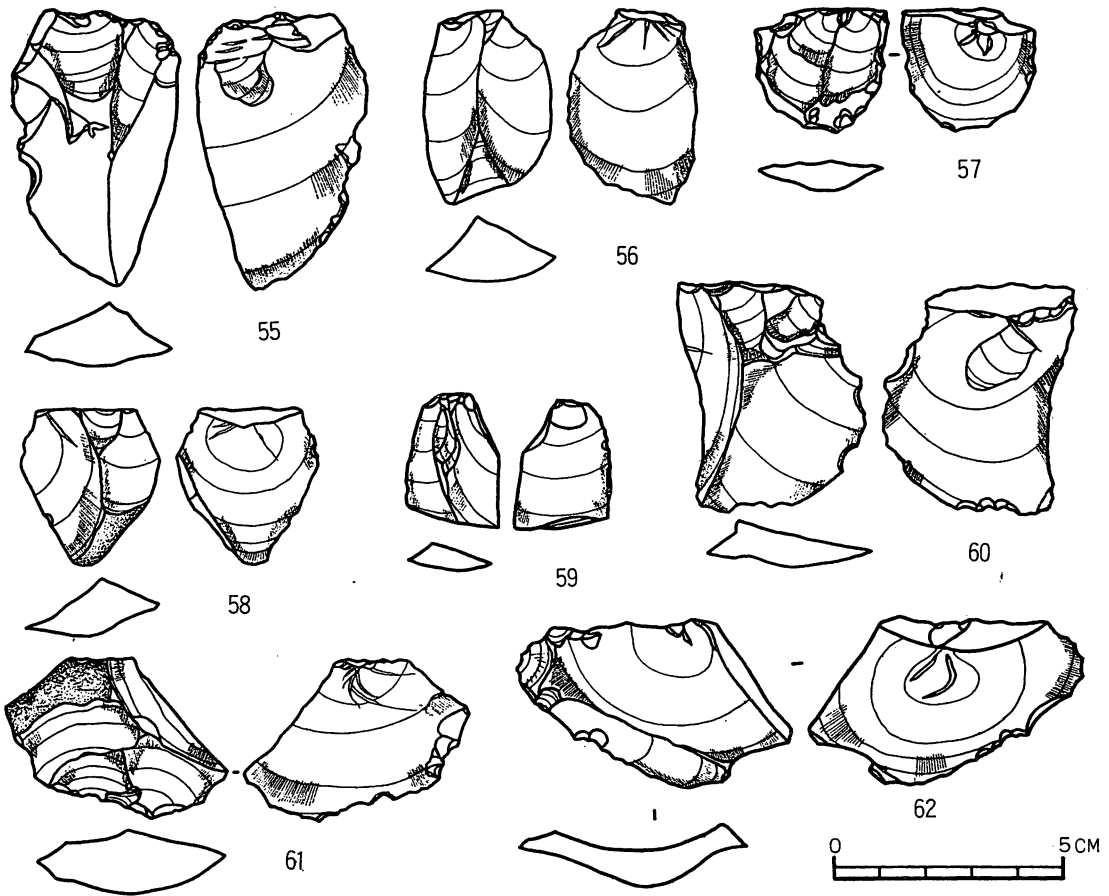
第31图 二次加工剥片·使用痕剥片·剥片(第1地点)



第32图 二次加工剥片·使用痕剥片·剥片（第1地点）



第33图 二次加工剥片·使用痕剥片·剥片(第1地点)



第34图 二次加工剥片·使用痕剥片·剥片(第2地点)

(表10) 船野遺跡出土の二次加工剥工・使用痕剥片・剥片 (図版一覧表)

地点		グ リ ット	層位	石材	長	幅	図 版	地点		グ リ ット	層位	石材	長	幅	図 版		
第 1 地 点	1	石核調整剥片	E-6	Ⅲ a	R h	91 57	30	第 1 地 点	32	二次加工薩片	D-5	Ⅲ b	R h	65 46	32		
	2	剥片	D-9・10	Ⅱ	〃	62 44			33	石核調整剥片	D-7	Ⅲ b	〃	55 25			
	3	使用痕剥片	B-10	Ⅲ a	〃	68 25			34	石核調整剥片	F-6・7	Ⅱ	〃	46 26			
	4	剥片	E-8	Ⅲ b	〃	31 36			35	使用痕剥片	D-4	Ⅱ	〃	46 43			
	5	石核調整剥片	D-4	Ⅲ a	〃	74 35			36	使用痕剥片	E-8	Ⅲ b	〃	44 22			
	6	〃	D-7	Ⅲ c	〃	56 20			37	使用痕剥片	D-4	Ⅲ a	〃	75 40			
	7	二次加工剥片	D-8	Ⅲ c	〃	41 20			38	二次加工剥片	F-5	Ⅲ b	〃	47 25			
	8	〃	D-4	Ⅲ c	〃	46 15			39	石核調整剥片	B-10	Ⅲ c	〃	23 10			
	9	剥片	D-6	Ⅲ b	〃	75 25			40	使用痕剥片	D-9	Ⅲ b	〃	52 34			
	10	使用痕剥片	D-7	Ⅲ	〃	37 39			41	石核調整剥片	E-7	Ⅲ b	〃	45 45			
	11	剥片	D 8	Ⅲ c	〃	32 18			42	二次加工剥片	B-4	Ⅱ b	〃	40 49			
	12	二次加工剥片	表 採	〃	〃	78 33			43	剥片	E-7	Ⅲ	〃	40 62			
	13	使用痕剥片	D-4	Ⅲ b	〃	70 46	31		44	剥片	D-7	Ⅱ	〃	31 40			
	14	二次加工剥片	F-8	Ⅲ a	〃	65 43			45	剥片	E-5	Ⅲ b	〃	36 32			
	15	使用痕剥片	B-4	Ⅲ c	〃	52 24			46	剥片	F-8	Ⅲ c	〃	31 30			
	16	剥片	D-8	Ⅱ	〃	64 25			47	剥片	E-8	Ⅲ c	〃	29 29			
	17	使用痕剥片	E-8	Ⅱ	〃	48 13			48	剥片	D-5	Ⅱ	〃	63 62			
	18	二次加工	D-6	Ⅲ b	〃	55 38			49	剥片	C-9	Ⅱ	〃	53 55			
	19	使用痕剥片	E-5	Ⅱ	〃	48 13			50	剥片	B-8	Ⅱ	S h	25 23			
	20	使用痕剥片	E-9	Ⅲ b	〃	50 22			51	石核調整剥片	D-8	Ⅲ a	R h	26 29			
	21	使用痕剥片	表 採	〃	〃	40 25			52	使用痕剥片	E-7	Ⅲ b	〃	44 42			
	22	使用痕剥片	E-7	Ⅲ b	〃	55 31			53	使用痕剥片	E-7・8	Ⅲ d	〃	28 39			
	23	石核調整剥片	E-8	Ⅲ c	〃	60 25			54	剥片	D-7	Ⅲ c	〃	25 25			
	24	二次加工剥片	B-4	Ⅲ c	〃	52 23			32	第 2 地 点	55	使用痕剥片	C-3	Ⅲ a	R h	60 46	34
	25	二次加工剥片	(試掘)	Ⅱ	〃	41 17					56	剥片	D-2	Ⅲ a	〃	42 28	
	26	使用痕剥片	E-7	Ⅲ a	〃	75 42					57	使用痕剥片	B-2	Ⅲ a	〃	22 23	
	27	使用痕剥片	E-5	Ⅲ b	〃	41 35					58	剥片	B-1	Ⅲ b	〃	34 31	
	28	二次加工剥片	D-5	Ⅲ b	〃	55 25					59	使用痕剥片	A-2	Ⅲ d	〃	29 21	
	29	二次加工剥片	F-6・7	Ⅱ	〃	65 40					60	剥片	B-3	Ⅲ a	〃	50 35	
	30	使用痕剥片	B-6	Ⅲ b	〃	70 32					61	二次加工剥片	A-2	Ⅲ c	〃	35 41	
	31	剥片	F-6・7	Ⅱ	〃	50 21					62	使用痕剥片	B-2	Ⅲ c	〃	37 51	

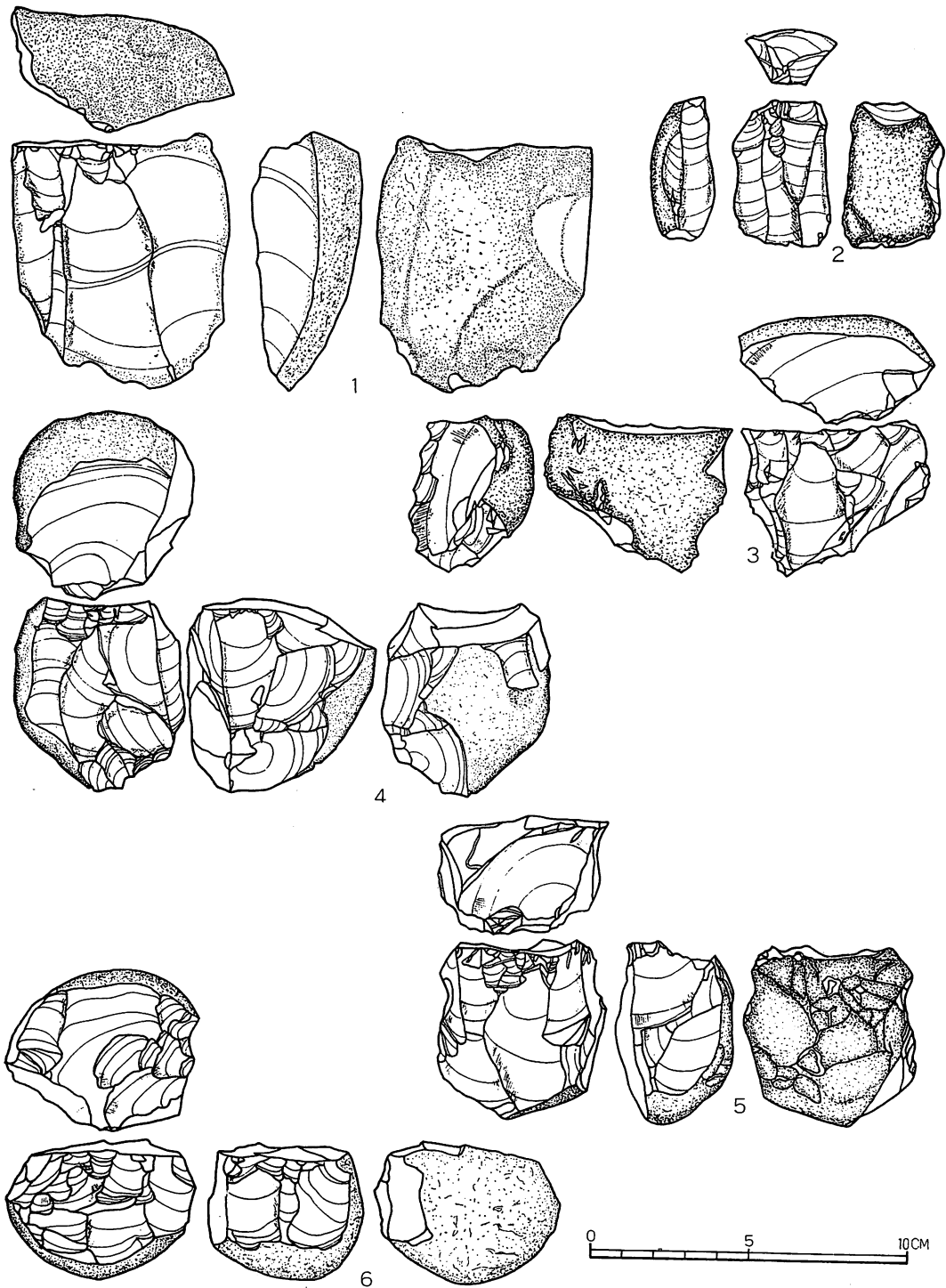
(単位 mm)

のものとの両者を考えなくてはならないであろう。

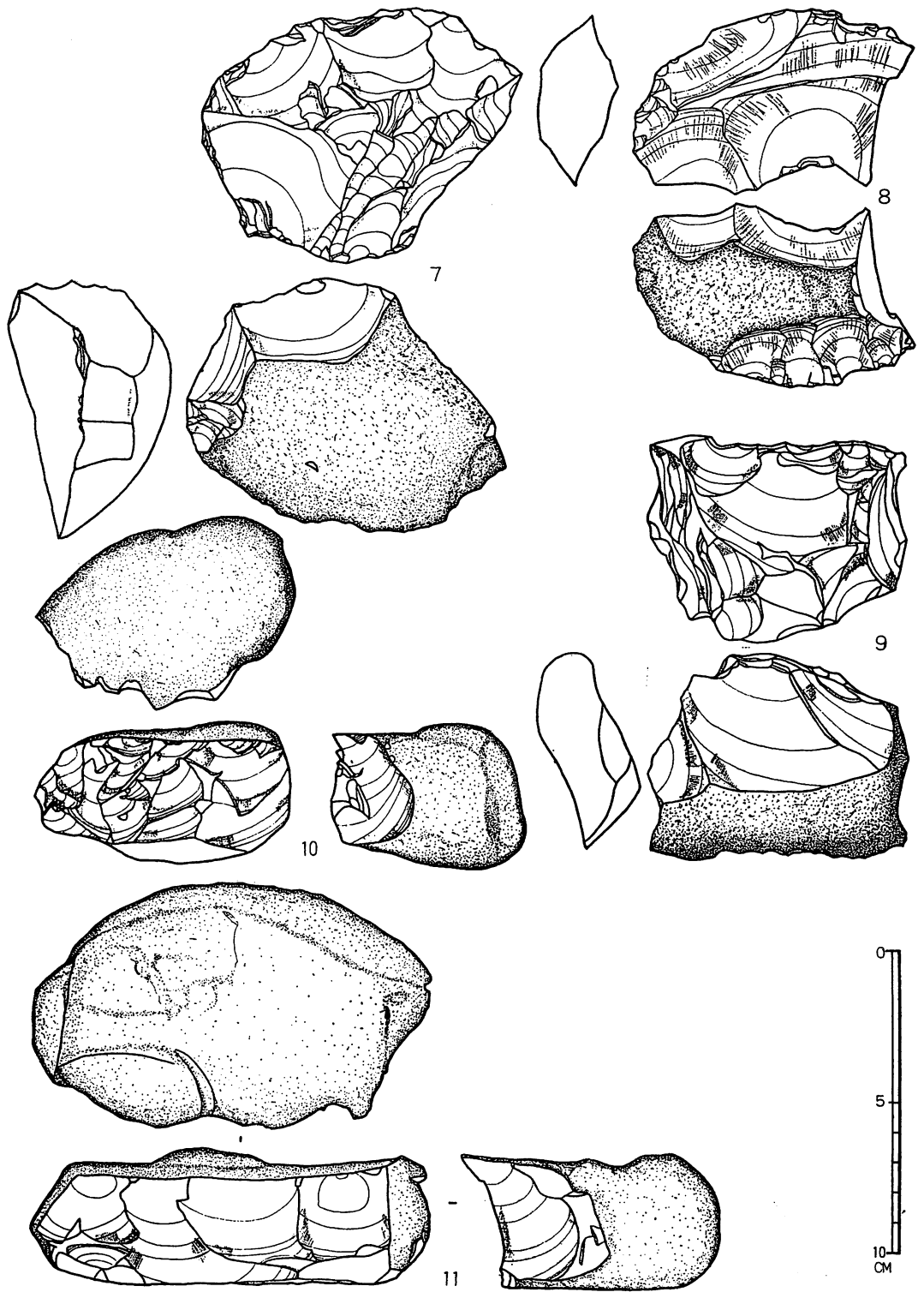
石核 (第35~8図、表11)

第1地点のⅢ層から22点、第2地点の同じ層より4点出土している。剥離の方法に幾種類か見られ、その形態も多様である。石質については当然石器や多くの剥片のあり方と一致して流紋岩が圧倒的に多く、他にサヌカイト、安山岩質のものが若干存在する。

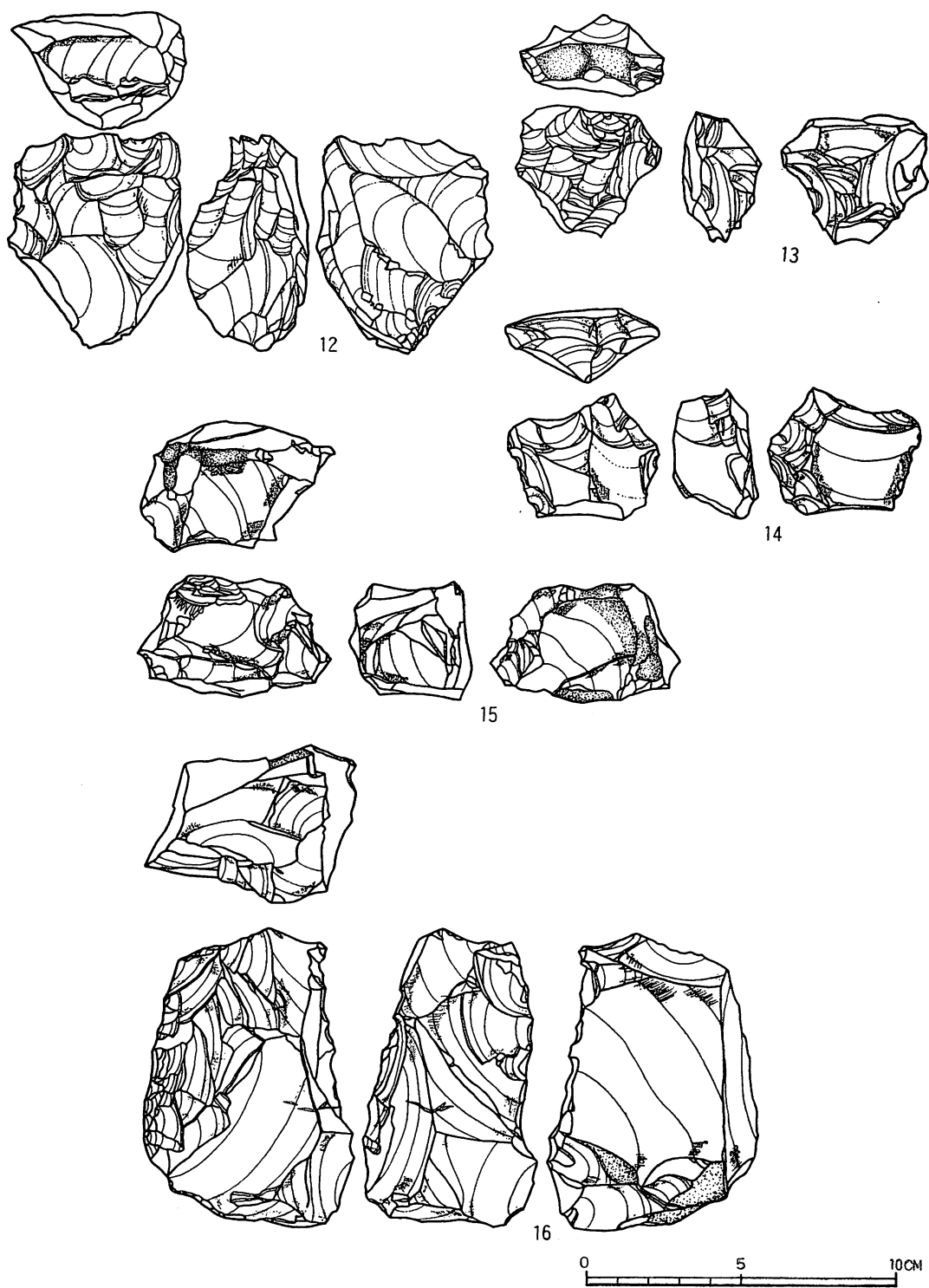
a類 (1~6・17) 縦長剥片を剥離した定型石核で、基本的な打面の状態は剥片剥離面の方向からの一回の打割によって形作られている。剥離は正面の一面に限られており、側面には調整のための横方向からの剥離が施こされているものも存在し、背面および背面から下端にかけて礫の表皮が残されている。主要な打面とは逆の方向から剥離された石核も認められる。6は第1地点Ⅲ層出土の石核で正面と側面で剥離が行なわれ、しかも側面の剥離を行った打面には調整が施こされている



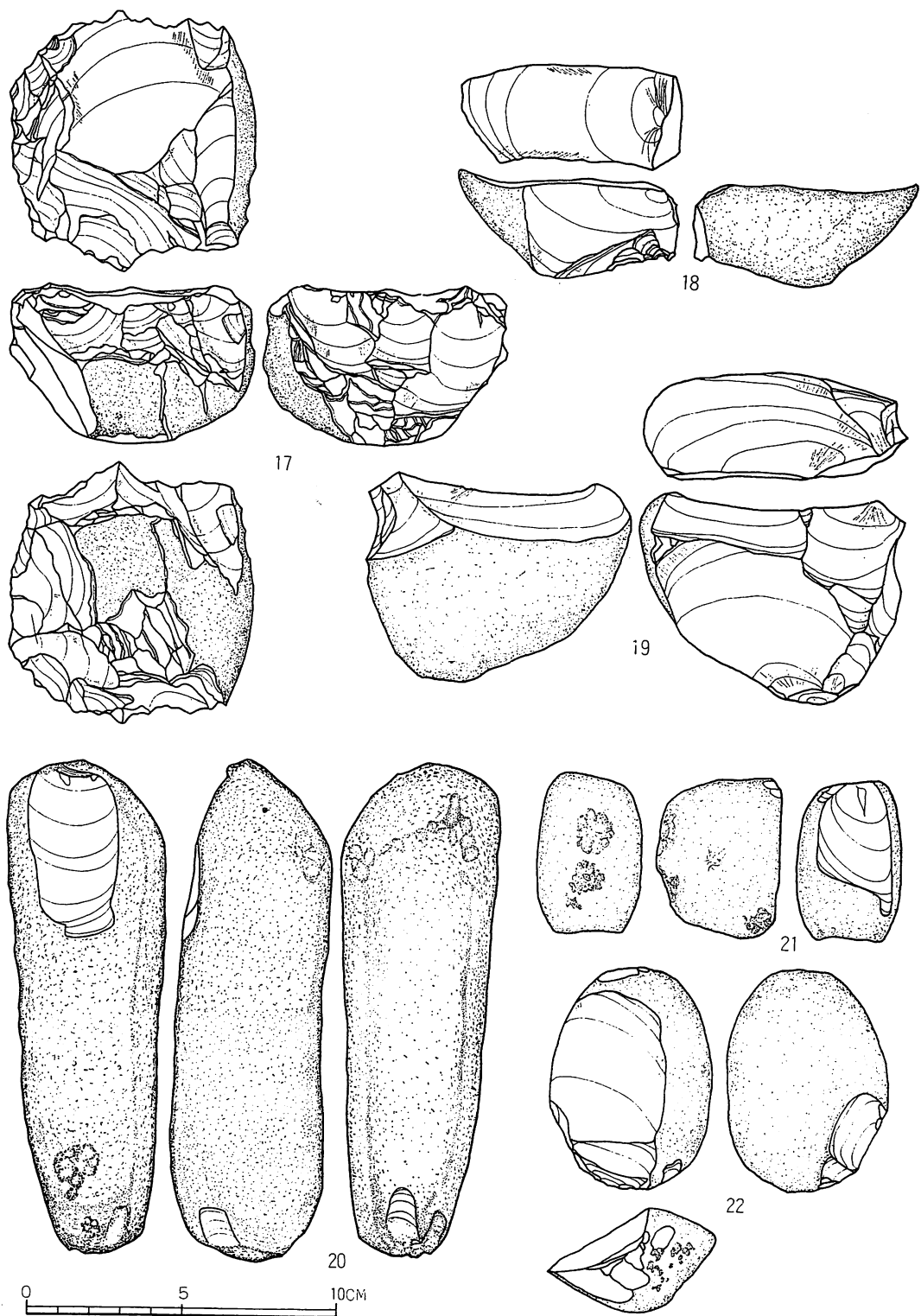
第35图 石核 (第1地点)



第36图 石核 (第1地点)



第37图 石核（第1地点）



第38图 石核·敲石(第1·2地点)

例である。17は大形で剥離面はやゝ不揃いで、打面の一部に小さな調整剥離が認められる。第2地点Ⅲ層出土の石核である。

b類（7～9）剥片の剥離作業に一定の過程が存在しているので定型石核と考えられる。a類と比較すると剥離された剥片の大きさ・形に斉一性を欠いている。b類では剥片の剥離面と打面の関係が決ってなく、打面と剥離面を交互に変えながら剥離作業を進めているのである。すなわち最初一つの面を打面として周辺の剥離を行い、次にはその剥離面を打面として前の打面に剥離を行うというように交互に繰り返して作業を続けるのである。その結果残核は一面（下端）の中央部近くに素材とした礫の表皮を残す形態をとるものと推測される。7・9はb類の残核と考えられ、*chopper, chopping-tool*としての転用が充分予想される。

c類（10・11）比較的扁平な円礫を横方向にすえ、その一端からそのまま剥離を施している。打面の大きさ（幅）によって縦に長い剥片と横に長い剥片との剥離が可能である。一方、剥片の中で打面に表皮を残す例は極端に少ないことから考察すれば船野遺跡における不遍的な石核とはなり得なかったであろう。

d類（12～16）不定形石核で打面と剥離面の関係、剥離の方向、大きさ等が全く一定してないものである。他の類の石核が石核の一部に表皮を残しているのに対し、このd類ではそれが認められず、16の1点のみに僅かに残っている程度である。

e類（18・19）細石核の母型と考えられる厚味を有する剥片である。18は円礫の一端に施こされた剥離面を打面として厚味のある剥片を取っており、この剥片の主要剥離面が細石核の打面として準備されている。その後主要剥離面よりの大きな剥離と逆の一端からの小さな剥離によって母型の片方の側面を調整している。この段階を経て次の細石刃剥離作業を打面と反対の一端から施こす事もできるが、当遺跡の細石核の場合は引き続き表皮の残されている一方の側面調整後に細石刃剥離を行なっている。19は比較的大形の円礫を横方向から打撃を加えて厚味のある平べったい剥片を取り、その後逆の一端から二回の剥離を施こし、二つの剥離面より成る稜線を打点として上面から打削を行なって一方の側面調整の第一段階を終了した時点での細石核の母型である。予想される次の過程は主要剥離面を含む三つの大きな剥離面からなる面を打面として側面の調整作業が繰り返されて所要の目的に達した後細石刃剥離作業に入るものと考えられる。18は細石核a1類の母型として19は同じくa1類ないしa2類の母型になるものと推測される。この2点は本来なら細石核の中を含めるべきであるが一回の槌状剥離も行なわれていない為、敢えて細石核と別に取扱った。

(表11) 船野遺跡出土の石核 (図版一覧表)

	グリッド	層位	石材	長	幅	厚	図版
第1地点	1	D-9 III d	R h	83	67	34	a類 35
	2	E-6 III c	〃	46	39	20	〃
	3	表 採	〃	45	58	37	〃
	4	E-8 III c	〃	62	54	60	〃
	5	E-9 III b	〃	52	58	37	〃
	6	E-8 III d	〃	43	60	59	〃
	7	C-9 III a	〃	85	106	50	b 36
	8	表 採	〃	57	79	25	〃
	9	B-2 II	S h	65	85	28	〃
	10	表 採	〃	46	84	64	c
	11	F-8 II	A h	45	132	71	〃
	12	D-8 III	R h	71	57	40	d 37
	13	E-9 II	R h	41	46	25	〃
	14	B-8 II	R h	42	49	26	〃
	15	B-4 III b	〃	35	62	38	〃
	16	E-9 III b	〃	96	67	55	〃
第2地点	17	B-2 III a	〃	51	78	78	a 38
	18	B-2 III b	〃	31	71	33	e
	19	A-2 III a	〃	64	82	34	〃

(単位 mm)

4 ま と め

最後にこれまでのまとめとして第1地点と第2地点の対比を各要素ごとに行い、両者の関係を考察し、さらに九州の先土器時代における位置づけを試みる事にする。

石器群の出土層位 第1地点ではⅢb層を主体にⅢ層c・Ⅲa層で石器群が発見されており、これらの石器群は1ヶ所の礫群と2基の竪穴状遺構を伴うものと考えられる。Ⅲ層中部に見られる文化層を「船野第Ⅱ文化層」と呼ぶことにする。礫群の下面からⅣ層上部においても断片的であったが石器群の包含層を確認できた。この文化層について「船野第Ⅰ文化層」と仮称しておく。

一方第2地点ではⅢa層を中心にⅢb層・Ⅲc層において石器群が発見された。Ⅲ層上部の文化層を「船野第Ⅲ文化層」とする。第2地点でもⅢ層下面よりⅣ層上部にかけて石器群が発見されているので第1地点と同様、「船野第Ⅰ文化層」として把握しておきたい。

石器の組成 第1地点の船野第Ⅱ文化層における石器群は黒耀石を主体とする細石刃・細石核と流紋岩の細石刃・細石核、各種の小型のナイフ形石器、台形様石器、尖頭器を中心的存在と見なすことができ、その他搔器・削器・彫器、石錐、礫器、敲石、それに石核、剝片・碎片が出土している。この中で、黒耀石製の細石刃（核）、ナイフ形石器のa1類・c1類と台形様石器は第Ⅱ文化層を特徴づける石器群である。

船野第Ⅰ文化層からの石器群は少ないが定型化された石器として小型のナイフ形石器とスクレイパーが挙げられる。

第2地点の船野第Ⅲ文化層の石器群の組成は流紋岩製の細石刃・細石核、黒耀石製の細石刃・細石核、小型のナイフ形石器、搔器・削器、彫器、石錐、礫器、敲石、石核、剝片・碎片である。この中で流紋岩製の細石刃・細石核と小型のナイフ形石器が代表する石器と見なすことができる。

石材 第1・2地点共に流紋岩が最も多く使用されているが、第Ⅱ文化層においては小型のナイフ形石器、台形様石器、尖頭器などには黒耀石・チャート・頁岩などが用いられており、これに対して第Ⅲ文化層では流紋岩に限られている。

以上が第Ⅱ文化層と第Ⅲ文化層の顕著な差異として抽出できるのである。

一方共通する最も大きな点は第Ⅱ・Ⅲ文化層共に細石刃・細石核と小型のナイフ形石器を共伴することである。

第Ⅰ文化層と第Ⅱ・Ⅲ文化層との対比は実際上困難であるが、第Ⅰ文化層では細石刃・細石核を保有していない点で最大の違いが指摘できる一方、第Ⅰ文化層と第Ⅱ文化層では共に同じタイプの小型のナイフ形石器を持つ点で共通しているのである。

これら三つの文化層は第Ⅰ～第Ⅲ文化層という順序で継起するとの見方は前に述べた種々の理由からである。

九州の細石器文化と船野遺跡 九州の細石器文化は一方では土器の出現と深い関連をもち、先土器時代の終末と縄文文化の起源を究明する上で重要な位置をしめている。他方では、細石器文化より古い時期に位置づけられているナイフ形石器や台形石器が共伴する可能性が示唆されるなど複雑な様相を呈しているのである。すなわちナイフ形石器や台形様石器が小型化の傾向をたどりながら

しかも豊富なバリエーションを持って細石器文化に認められるのである。しかもその在り方は、細石刃（核）、小型のナイフ形石器、台形様石器などの石器が単独で、あるいは共存して一つの石器文化を構成しており、いかにも先土器時代終末の複雑な文化を示めすような様相である。船野遺跡はまさにそうした細石器文化の一面を示めしている遺跡といえることができるのである。すなわち船野第Ⅱ文化層（船野Ⅱ）、第Ⅲ文化層（船野Ⅲ）共に細石刃（核）を軸にしながら、船野Ⅱでは台形様石器や小型で三角形のナイフ形石器を共存し、船野Ⅲでは小形のナイフ形石器を加えてそれぞれ細石器文化における一つの段階を示めしているのである。

船野遺跡の位置づけ 船野遺跡の各文化層を他の遺跡との対比、および先の論巧で試みた細石核の変遷（第Ⅰ期～Ⅳ期）を踏まえながらその位置づけを行ってみる。

船野Ⅱは南九州の先土器時代の代表的な遺跡である上場・石飛両遺跡の第Ⅳ層出土の石器の形態およびその組成に極めて類似している。また福岡県の峠山遺跡のB地点および長崎県百花台の中層の石器文化は台形様石器の存在から船野Ⅱと近い時期に位置づけられるであろう。

船野Ⅲは船野Ⅱの直後あるいは一部重複すると考えられ、石飛のⅢ層に対比でき、上場のⅢ層は細石核の形態に差異が指適できるので船野Ⅱに後行するものと思われる。船野Ⅲはむしろ長崎県の福井洞穴Ⅶ層と近い関係が想定される。

船野Ⅰは石器の出土が極端に少ないため石器文化の一つとしての位置づけは困難であるが、一応の考察を行ってみる。船野Ⅱとは細石刃（核）が存在していない点で大きく異なるが、ナイフ形石器の類似や出土層位を考慮すると接近した時期を考えて大過ないものと思われる。船野Ⅱに対比される上場・石飛のⅣ層ではそれぞれ先行するものとしてⅥ層が存在しており、小形のナイフ形石器や台形石器の技術・形態上でⅣ層とほとんど差異が認められなど言われている。その中において上場Ⅵ層では台形様石器の共伴が認められるのに対して石飛のⅥ層では欠けており、台形様石器の有無からすれば、石飛のⅥ層は上場Ⅵ層に先行することになるであろう。船野Ⅰは小型ナイフ形石器で観察される限りでは台形様石器の存在が予想され上場Ⅵ層と近い関係が示唆されるように思える。

以上の事から細石刃（核）との共伴が常に問題にされる台形様石器は、細石器文化の古い段階（細石器文化の第Ⅰ期およびその直前）に認められる石器と見なすことができよう。

これに対して小型のナイフ形石器は細石刃（核）が出現する直前でしかも台形様石器に若干先行する時期（たとへば石飛Ⅵ層）にあらわれ、船野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、上場のⅢ層と続き細石器文化第Ⅲ期までは確実に存在しているとの予測が可能と思える。峠山遺跡のA地点、百花台の上層がこの時期の遺跡と考えられる。隆起線文土器や爪形文土器を伴う第Ⅳ期については定かでない。

台形石器や小型ナイフ形石器と細石刃（核）の共存関係についてを特に問題として考察したが、今後、他の石器について細部の検討、分析を行って詳細に論じたいと考えているのでそのワンステップとして見ていただきたい。

船野遺跡第1地点中層の船野Ⅱ、第2地点上層の船野Ⅲは、台形様石器やナイフ形石器を伴う細石刃器文化として把握でき、しかもその初期の段階に位置づけられる石器文化であるとの結論を提出したい。

細石刃(核)
 台形様石器
 小型ナイフ形石器

九州の細石器文化と船野遺跡

遺跡名	船野	上場	石飛	峠山	百花台	福井
細化(の変遷) 細石編年核	I		VI層			
			VI層			
第I期	II	IV層	IV層	C地点	中層	
	III		III層			VII層
第II期		III層				IV層
第III期				A地点	上層	
第IV期						III層
						II層

引用・参考文献

- 富栴 憲治・戸沢 充則：唐津周辺の細石器Ⅰ～Ⅲ（考古学手帖14.16.18）1962年、1963年
 麻生 優：細石器文化（日本の考古学Ⅰ所収）1966年
 鎌木 義昌・間壁 忠彦：九州地方の先土器時代（日本の考古学Ⅰ所収）1966年
 鎌木 義昌・芹沢 長介：長崎県福井岩陰（考古学集刊3—3）1965年
 池水 寛治：鹿児島県出水市上場遺跡第一次調査報告書（考古学集刊3—4）1997年
 池水 寛治：熊本県水俣市石飛分校遺跡（考古学ジャーナル21）1968年
 明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団：概報月見野遺跡群 1969年
 池水 寛治：水俣市石飛遺跡（もぐら9号）1970年
 芹沢 長介：先縄文文化（考古学講座3所収）1971年
 杉原 荘介・戸沢 充則：佐賀県原遺跡における細石器文化の様相（考古学集刊4—4）1971年
 橋 昌信：九州における細石器文化—細石核の分類と編年試論—（考古学論叢1）1973年
 橋 昌信・他：峠山遺跡（福岡県文化財調査報告書第51集）1973年
 鈴木 重治：宮崎県岩土原遺跡の調査（石器時代10）1973年
 池水 寛治：鹿児島県上場遺跡発見の住居址（鹿児島考古9）1974年

船野遺跡発掘調査参加者

第1次調査（昭和45年10月）

二宮忠司、小倉正五、上村佳典、江本直、栗原孝之、蔵本聖子、宮崎真理、坂本嘉弘、牧尾義則

第2次調査（昭和46年7月）

二宮、江本、上村、蔵本、坂本、牧尾、藤田一夫、和田利徳、永松みゆき、志津友子、橋爪啓史
（立正大学）、長野真一（立正大学）

第3次調査（昭和47年3月）

上村、江本、蔵本、山野洋一、青崎和憲、牧野吉秀、坂本、藤田、和田、志津、平ノ内幸治、
梅山朋子

船野遺跡の三次にわたる調査では、地形地質については宮崎大学教育学部遠藤尚先生に特別ご参加をお願いして多くのご教示を得た。また南九州短期大学の鈴木重治先生（現同志社大学）には県内の考古学関係についてのご指導を仰いだ。この他、地本の別府大学史学科卒業生の野間重孝氏（現宮崎市教育委員会）安楽勉氏（現長崎県文化課）それに今田琴路氏には調査全般にわたってお世話をいただいた。

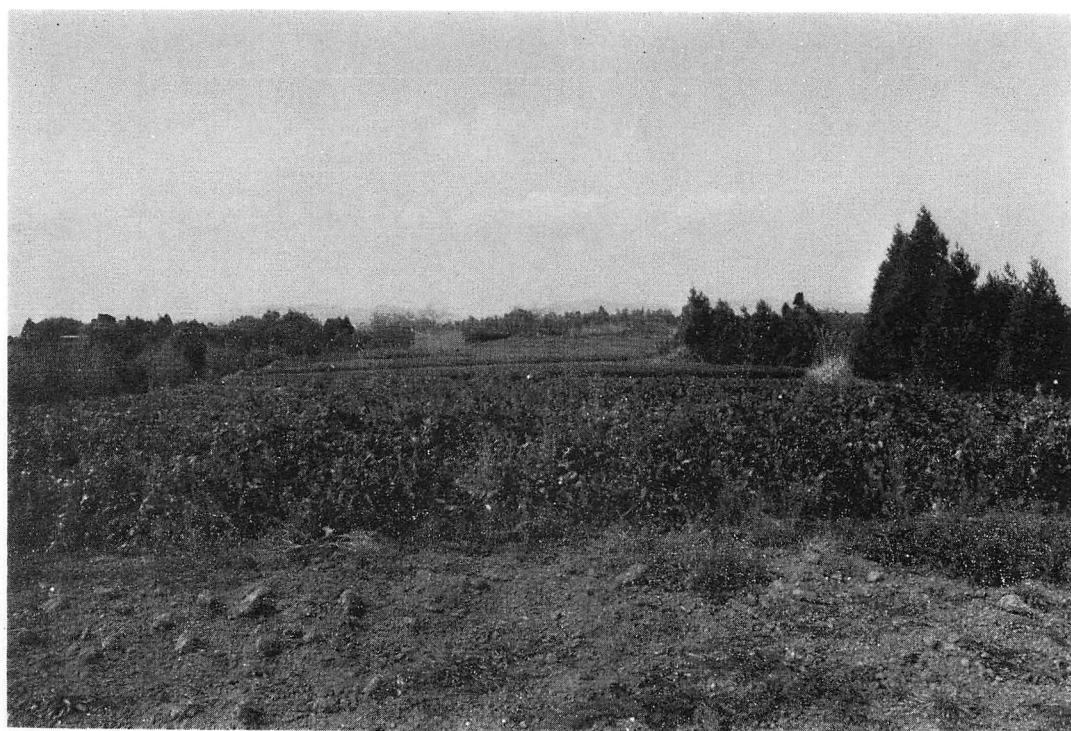
地本の佐土原町教育委員会および船野地区の方々には船野公民館を宿舎としてお借しいただいたのはじめ風呂や食糧の調達など多くのご迷惑をかけてしまった。

一方研究室の整理では発掘参加の学生全員がこれにあたり、それぞれの仕事を全うしてくれた。特に二宮（現福岡市文化課）、上村（現北九州市文化課）の両氏は先頭に立って整理を進めてもらった。

以上の人達の献身的な協力があって始めて、予想以上の成果を収めることができたのである。銘記して心から感謝の意を表したい。最後になってしまったが、別府大学考古学研究室の主任教授でいらっしゃる賀川光夫先生は終始温たかく見守っていただき、さらに多大なご援助を得た。心からお礼を申し上げたい。



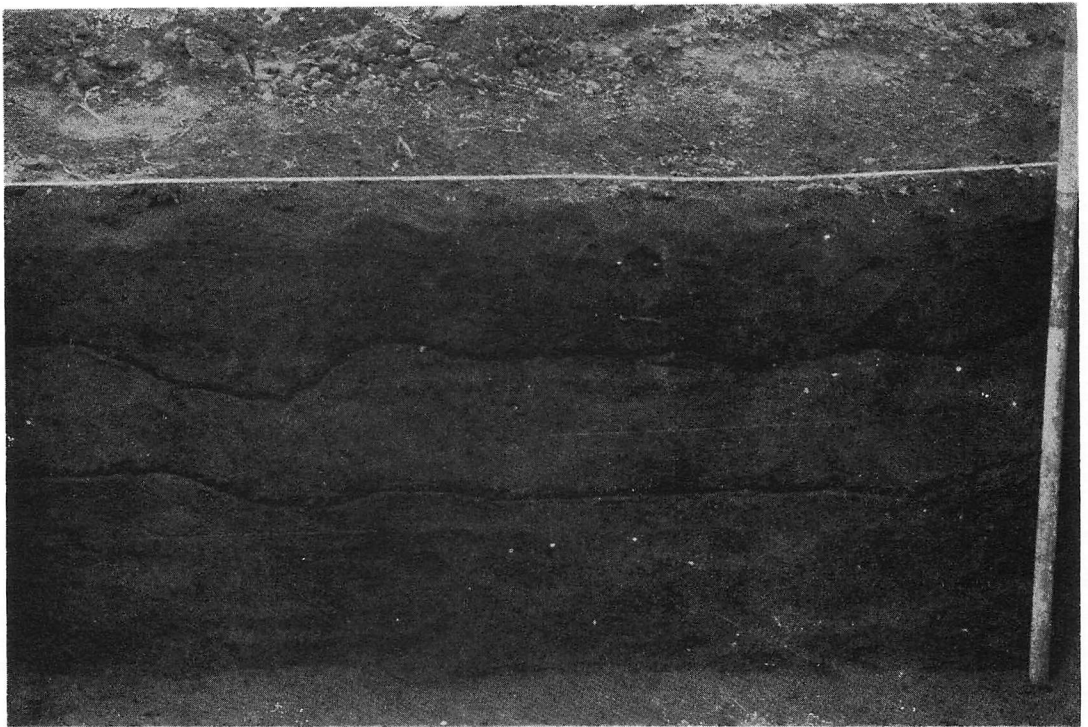
1 船野遺跡遠景（第2地点より第1地点を望む）



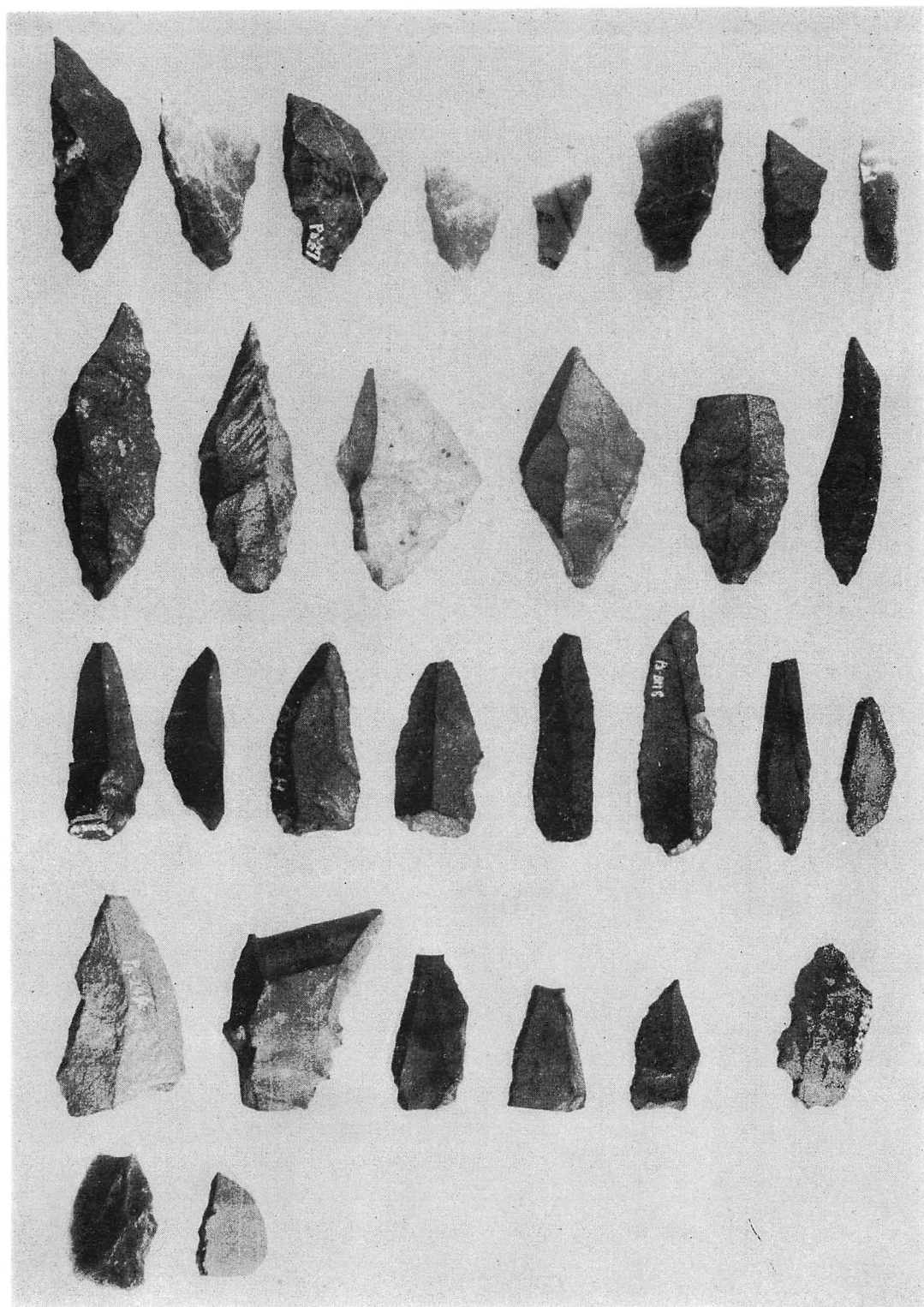
2 船野遺跡第1地点近景（東より）



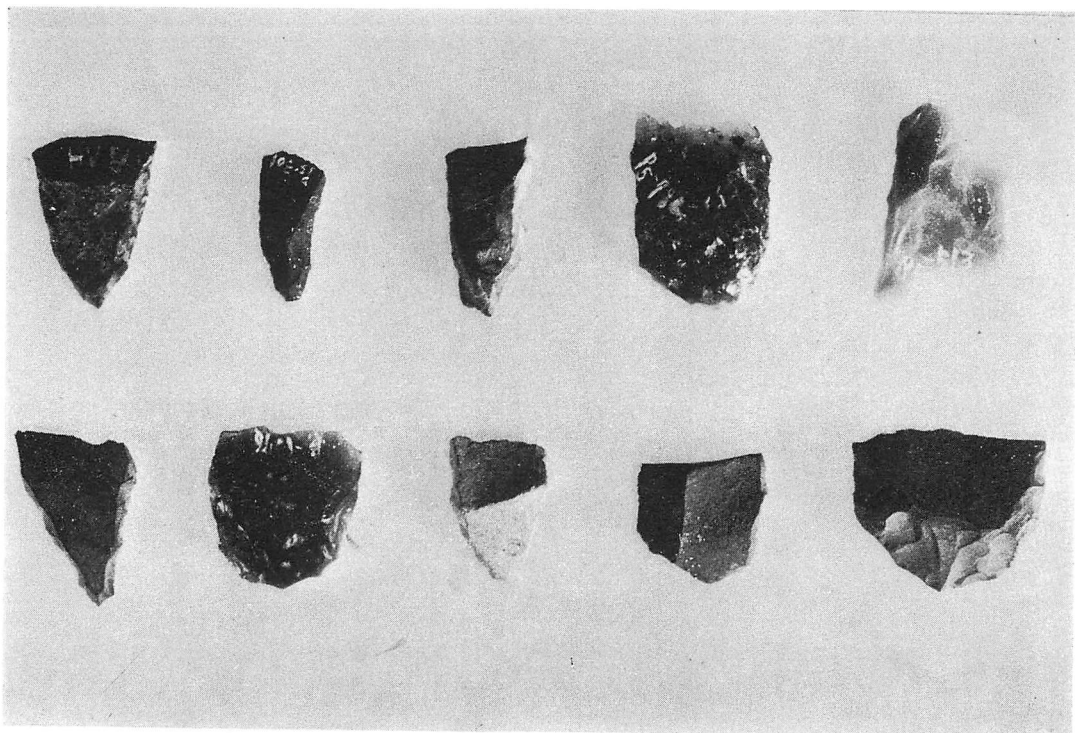
3 船野遺跡第2地点近景（東南より）



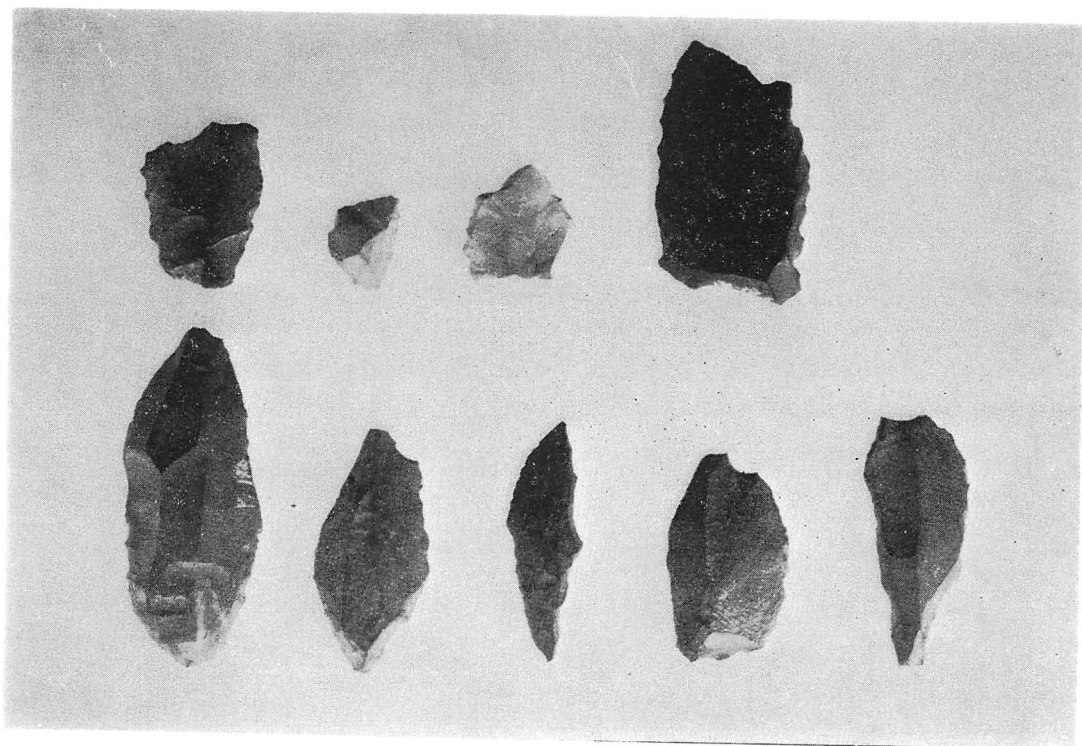
4 船野遺跡土層断面（第1地点）



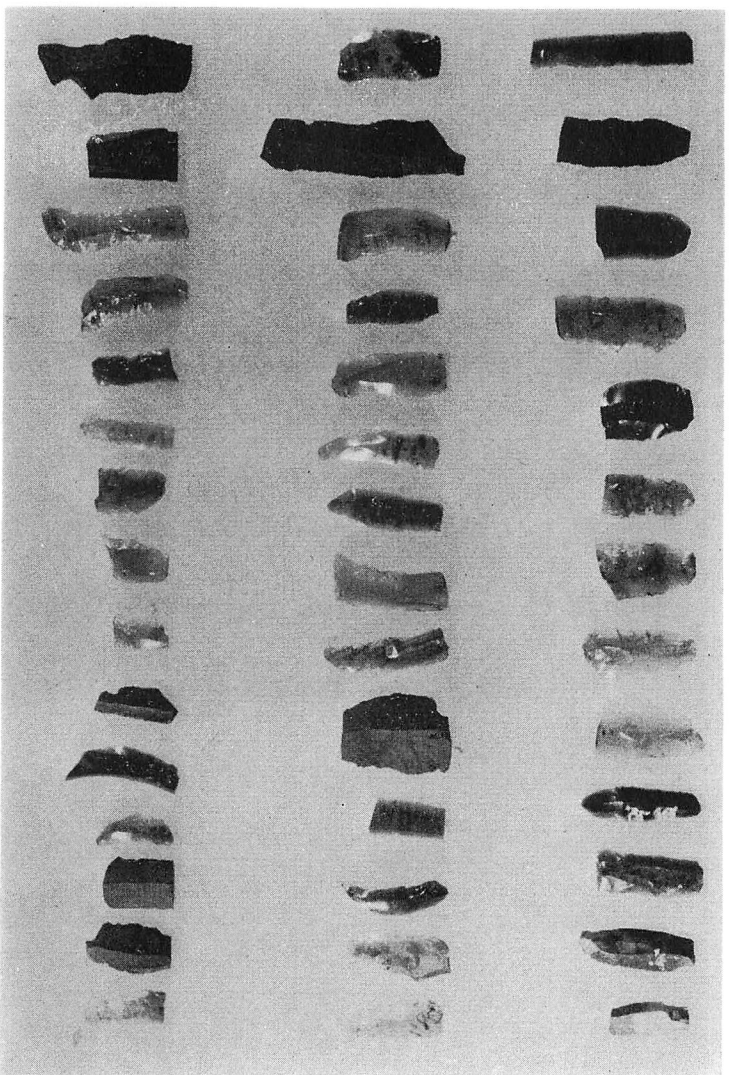
5 ナイフ形石器 (第1地点)



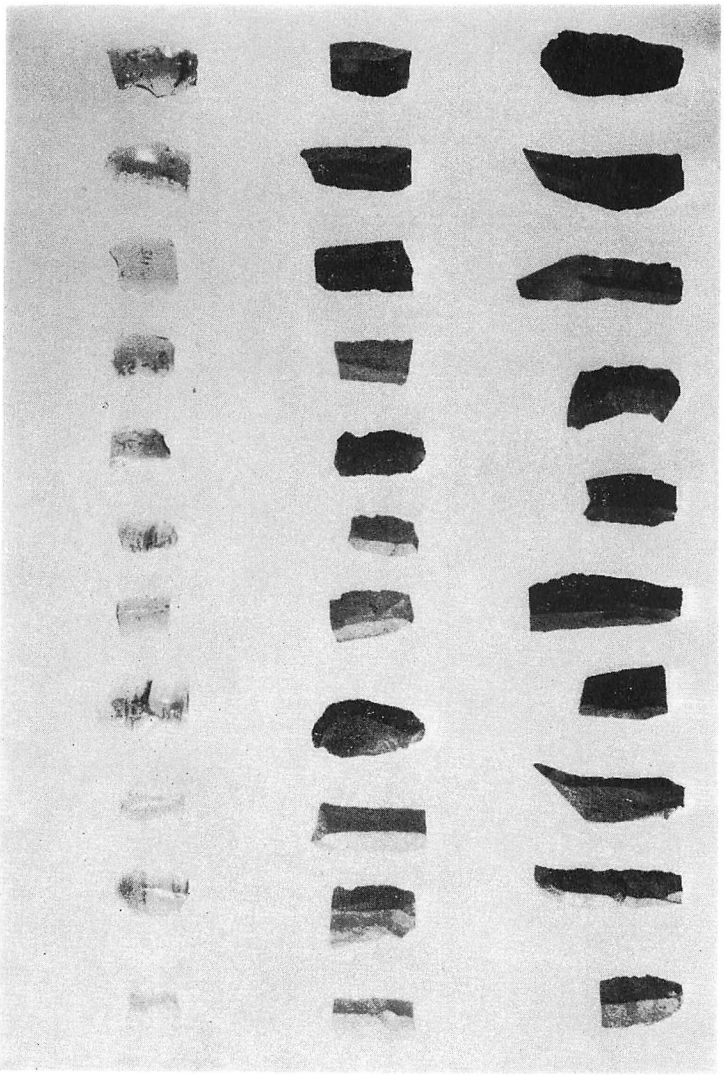
6 台形様石器（第1地点）



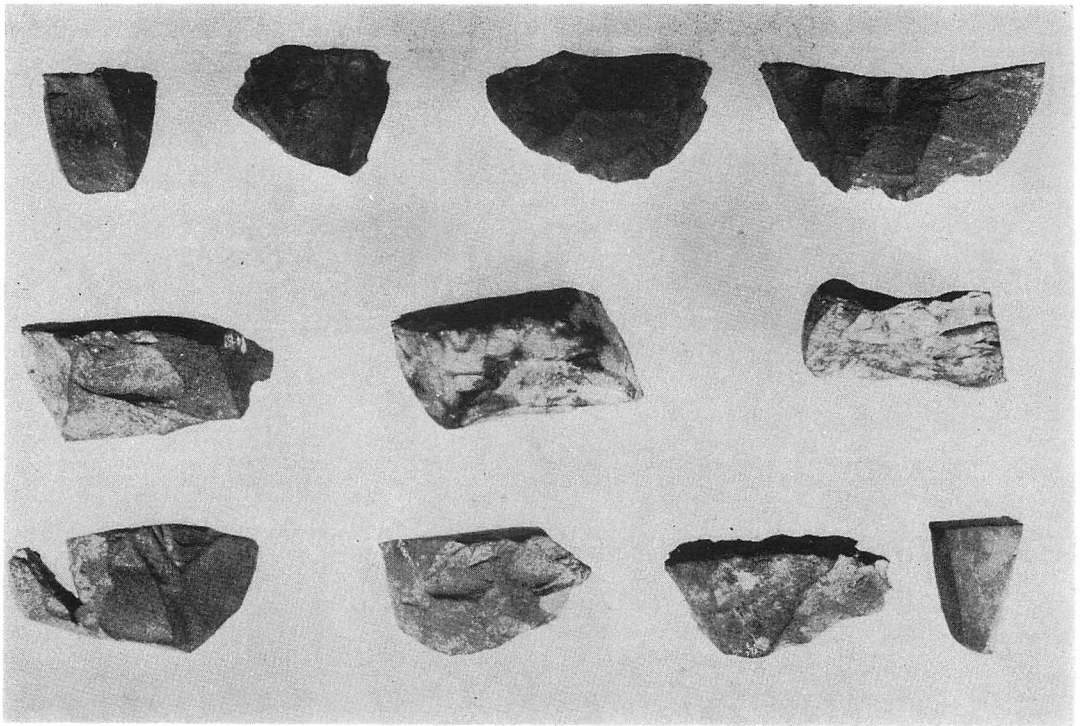
7 ナイフ形石器（第2地点）



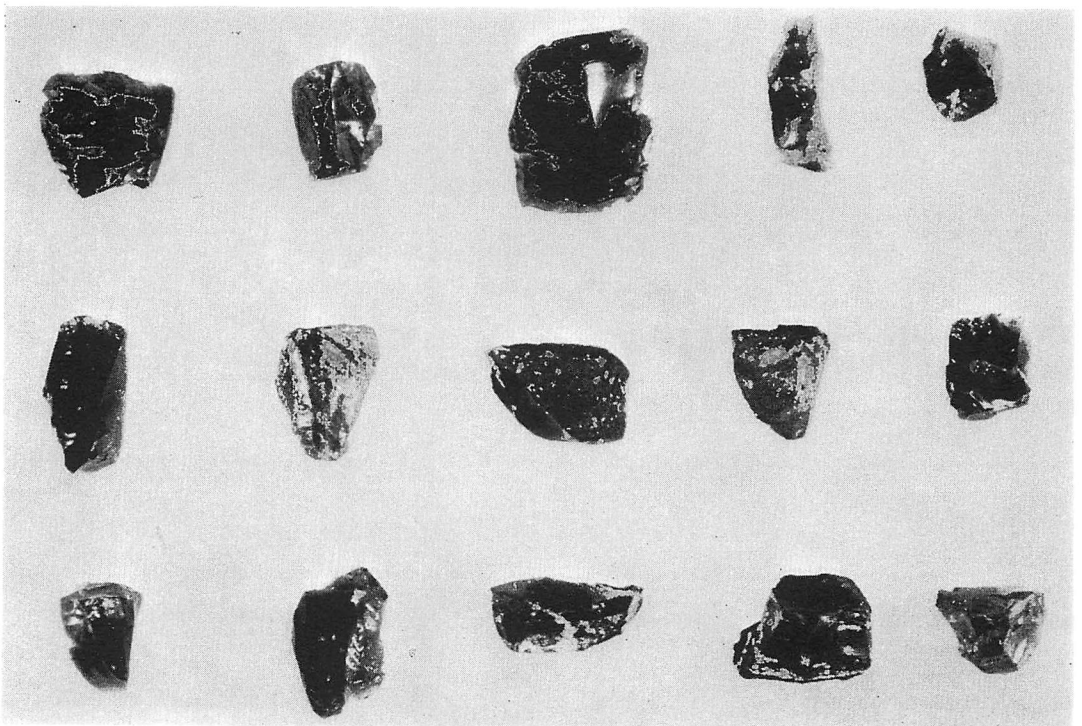
8 細石刃 (第1地点)



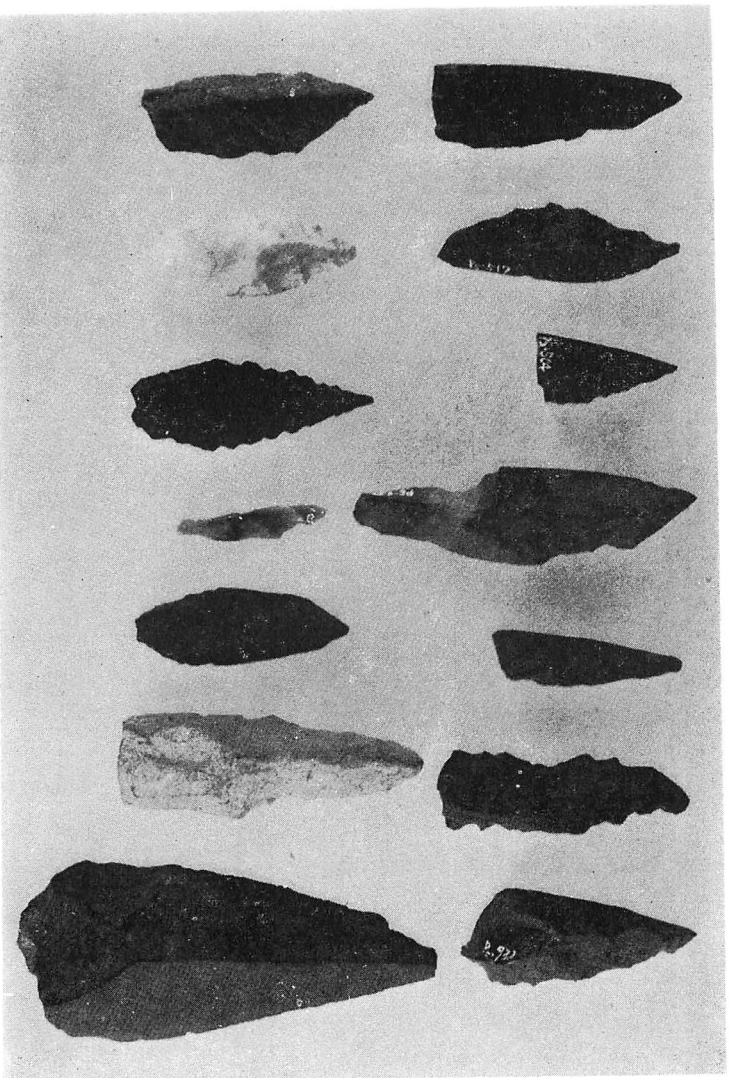
9 細石刃 (第2地点)



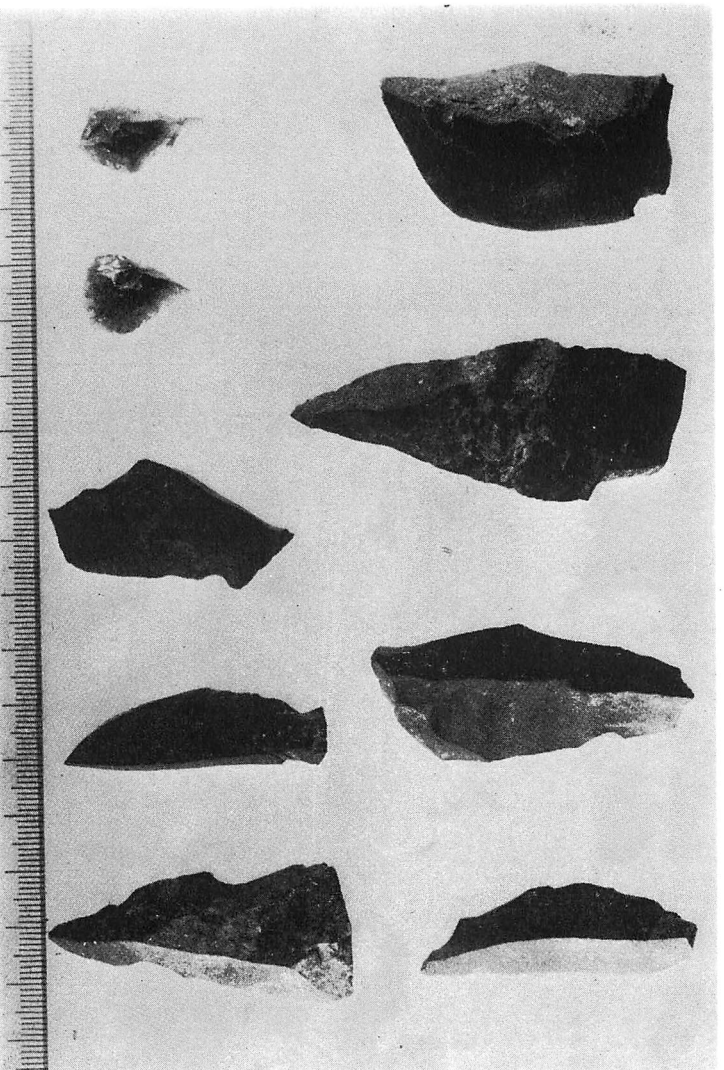
10 細石核 (第1・2地点)



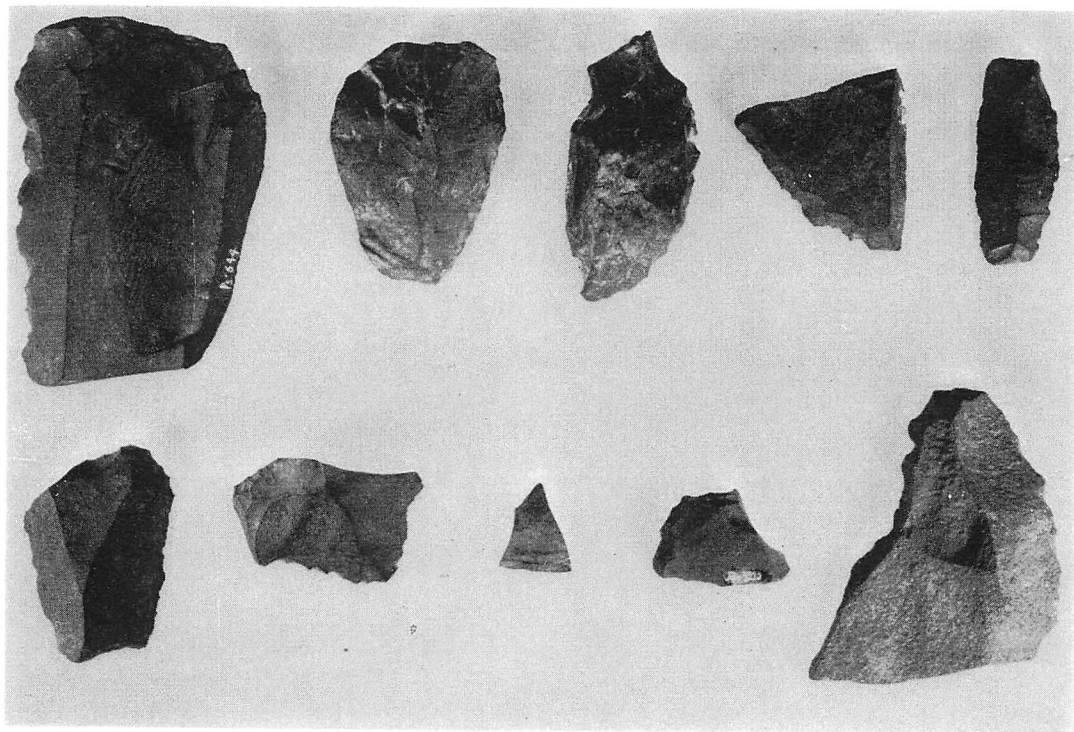
11 細石核 (第1・2地点)



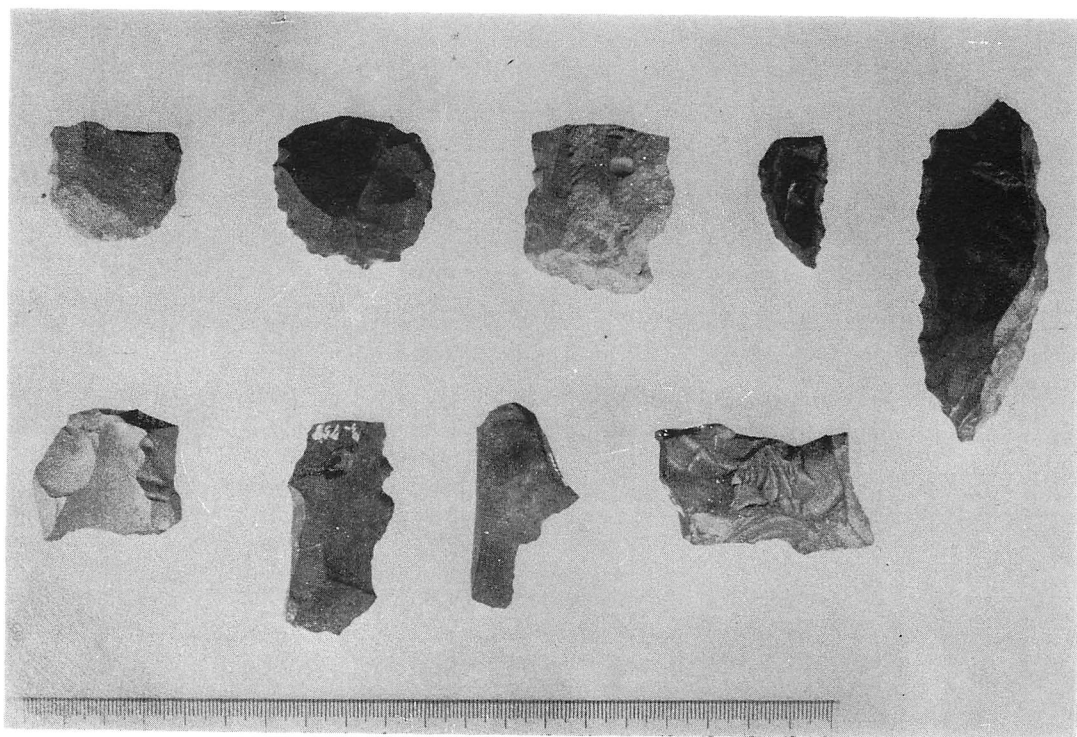
12 尖頭器 (第 1・2 地点)



13 彫器・石錐 (第 1・2 地点)

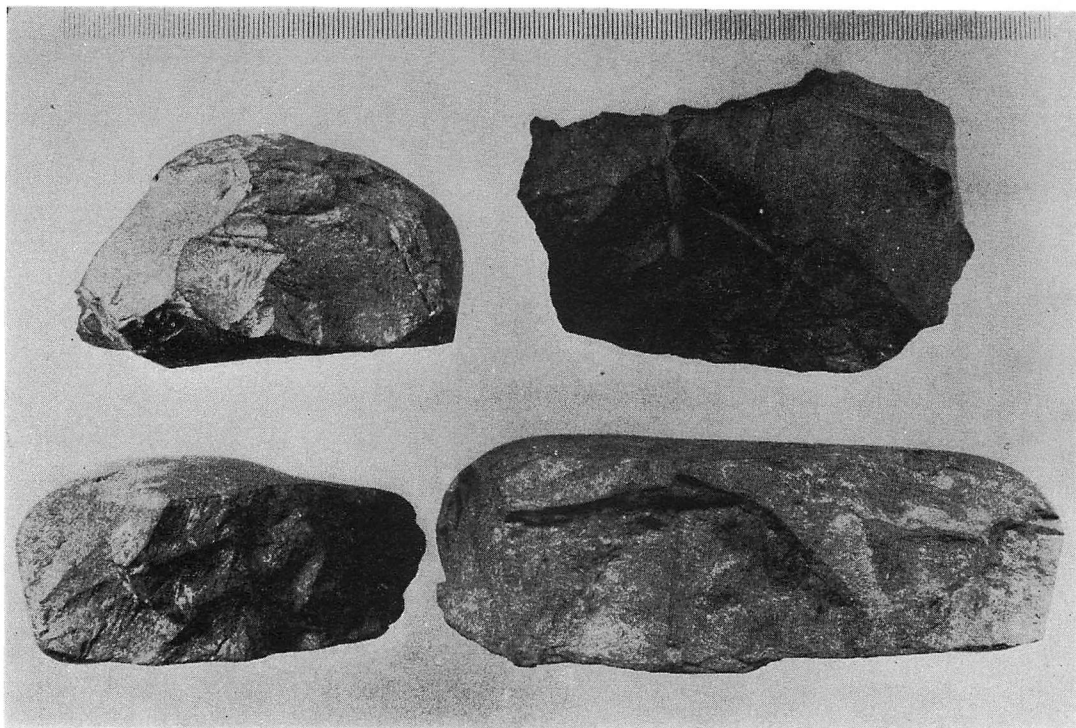


14 搔器・削器 (第1・2地点)

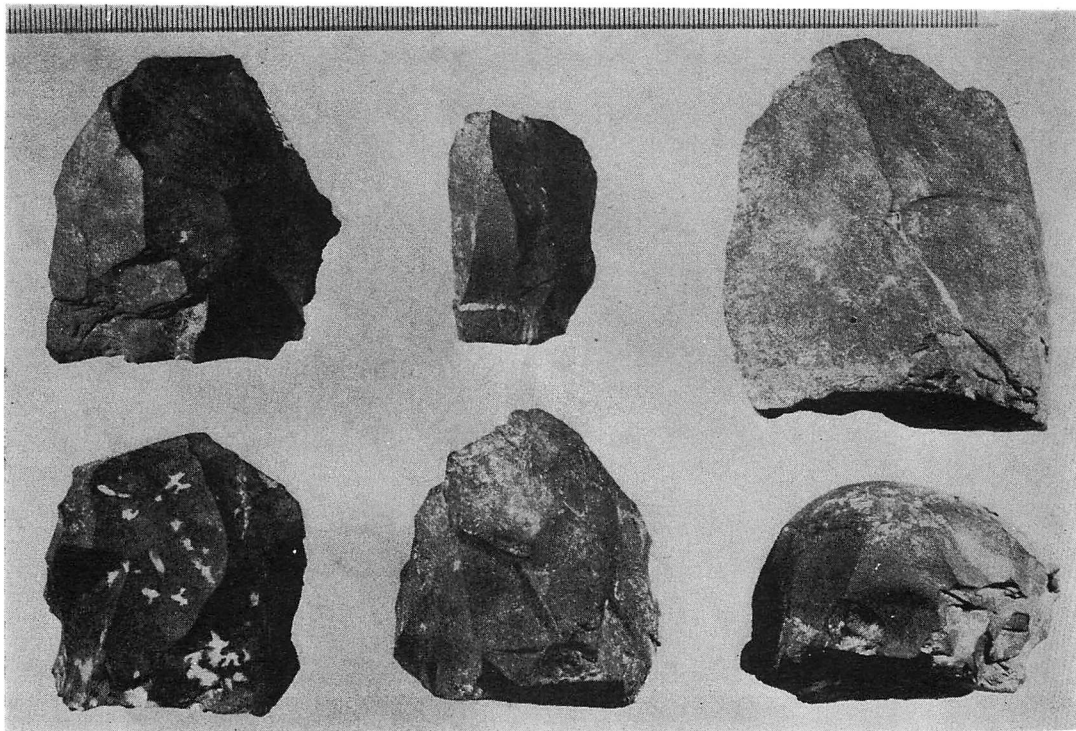


15 搔器・削器 (第1・2地点)

17 石核 (第1・2地点)



16 石核 (第1地点)





18 礫群と竪穴出土状況（第1地点）



19 礫群（第1地点）



20 第1号竖穴(第1地点)



21 第2号竖穴(第1地点)